Ⅴ．平安時代以降の遺構と遺物

平安時代の竪穴住居跡

調査区北部の平坦部で 4 軒の竪穴住居跡が発見された。このうち 2 軒（第 3・5 号住居跡）は近接しているが、他の 2 軒（第 1・2 号住居跡）とは大分離れて位置する。なお第 3 号住居跡は東半を第一次調査、西半を第二次調査で精査した。

第１号住居跡

一辺約 3.5mの方形を呈する竪穴住居跡で、壁高は約 35 ㎝である。住居跡の床面には約 7 ㎝の厚さに褐色土による貼床が行なわれ、東北隅に土壙が設けられている。北側につくられたカマドは、河原石による焚口と、1.8mの非常に長い煙道を有する。焚口付近には土師器甕の大破片が散乱している。（岡田茂弘・林謙作）

出土土器

土師器―坏と甕がある。いずれも製作にロクロを使用している。坏(1)は胴部が脹みをもって立ち上がり口縁部が外反気味になる。口径に較べて底径が大きい。底部に手持ちヘラケズリが加えられ、切り離し技法は不明である。内面はヘラミガキが認められ、再酸化されたらしく黒色ではない。甕(2)は長胴形と思われる。内面の調整は不明瞭である。

第２号住居跡

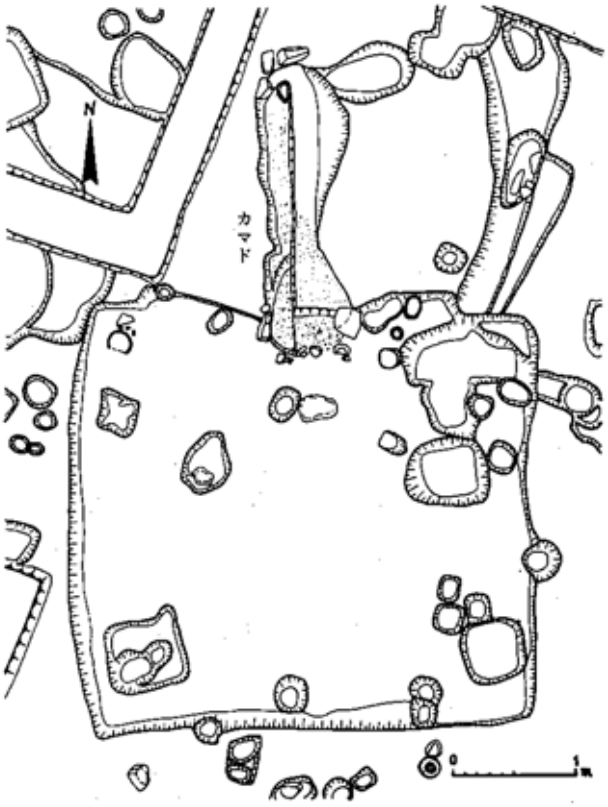
第 1 号住居跡の北方 28mで検出した住居跡であるが、住居廃棄後に掘込まれた土壙によって周壁、床面ともに破壊され、かろうじて規模が復原される程度であった。住居跡は南北 3.0m、東西 2.8m位の方形に近い平面を呈し、東側に河原石で焚口を構築したカマドを有する。

住居跡の床面および上部の堆積層中から、須恵器の長頸壺、坏、土師器の甕、坏等のほか、鉄斧 1、鉄鏃 1、刀子 4、鉄釘 1 の金属器や石錘などが出土している。なお、2 号住居跡内から出土した内黒土師器坏には、外壁の 2 カ所に「玉」字の墨書が認められる。

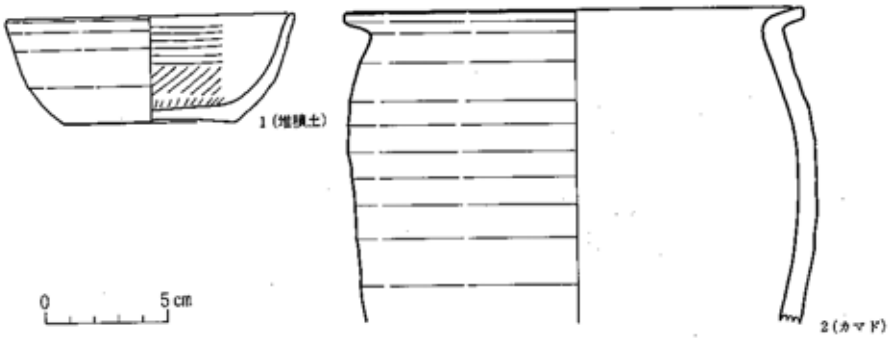
（岡田茂弘・林謙作）

出土土器

土師器―図示できたのは坏だけである（1～3）。胴部が脹みをもって立ち上がり、口縁部でわずかに外反気味になる。1 は他より大形である。底部は回転糸切り技法で切り離され、1 は胴部下半、2・3 は胴部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。3 の胴部には 2 カ所に「玉」の墨書が認められる。



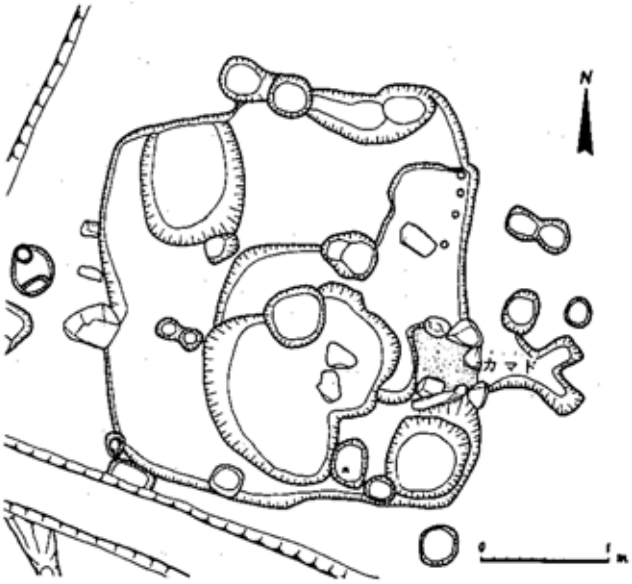
第426図　第１号住居跡



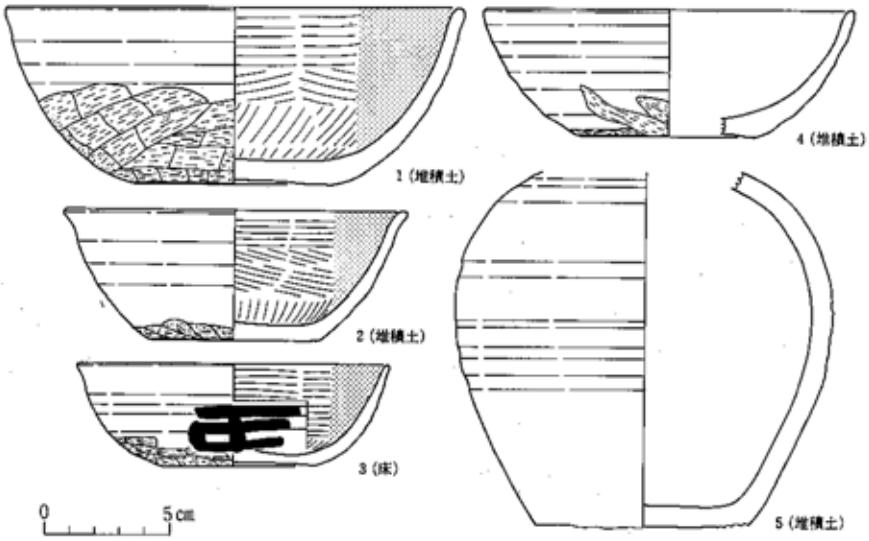
第427図　第１号住居跡出土遺物

須恵器―坏と壺がある。坏(4)は胴部から口縁部まで脹みをもって立ち上がる。底部は回転糸切り技法で切り離され、胴部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。壺(5)は口頸部と高台部を欠く。胴上部は丸く、下半は直線的である。長頸壺と思われる。

(注)　出土遺物のうち鉄製品（金属器）は錆化のためか現存せず、石錘は整理の際に確認できなかった。



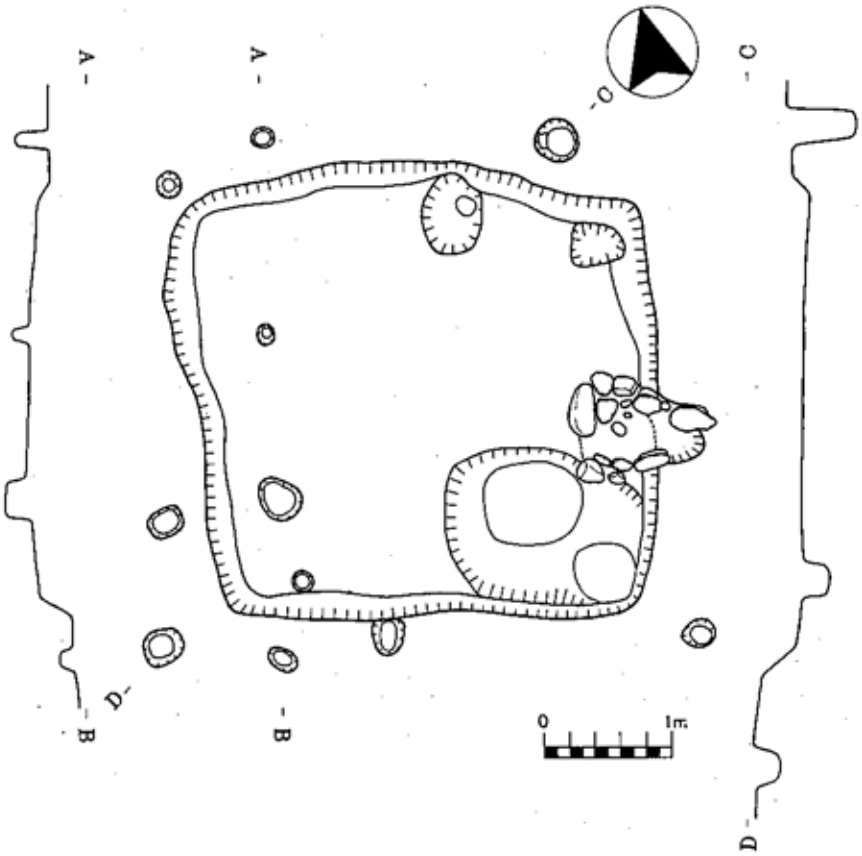
第428図　第２号住居跡



第429図　第２号住居跡出土遺物

第３号住居跡

一辺約3.3m、面積は約11㎡、北西隅がやや張り出した、ほぼ隅丸方形のプランを有し、カマドの軸は東西方向である。北壁はやや外側に脹みをもち、ローム層に約30㎝掘込んでいる。壁の立ち上がりは約70度であるが、北壁の西寄りではなだらかであり、周溝は持たない。床面の遺存状態はあまり良くなく、やや軟弱であり、カマドの周辺は少し低く、南壁、北壁付近は高くない。住居跡中央では低い。住居跡内部に小ピットが3個、西壁ぞいに認められるが、柱穴か



第430図　第３号住居跡

否か判断できない。床面からの深さは10～20㎝である。住居跡の外周には９個の小ピットが検出され、深さは約10～40㎝であり、柱穴かもしれない。住居跡内には、東南隅に約1.2×1.6mの大きなくぼみが認められるが、あるいは掘り過ぎかもしれない。また北壁の東側に２カ所、深さ約５㎝の浅いくぼみが認められる。カマドは東壁のやや南寄りにあり、河原石で構築されているが、左袖はくずれ原形をとどめていない。焚口は約50㎝あったものと推測され、奥行は約1mを測り、ゆるやかに立ち上がり、カマドの内部から焼土が検出された。煙道は現在全く認められないが発掘中、焼石が煙道部と思われる部位に数個動いた状態で出土しているので、あるいは煙道は耕作のため、すでに破壊されたのかもしれない。遺物は、第一次調査の際、住居跡堆積土層下部から鉄鏃が１点、今回の調査で鉄製品１点、内黒の土師坏が１個体分出土している。また、特異なものとして、馬の歯が出土しており、住居が放棄された後捨てられたものらしい。　（西脇俊郎）

第431図　第３号住居跡出土遺物

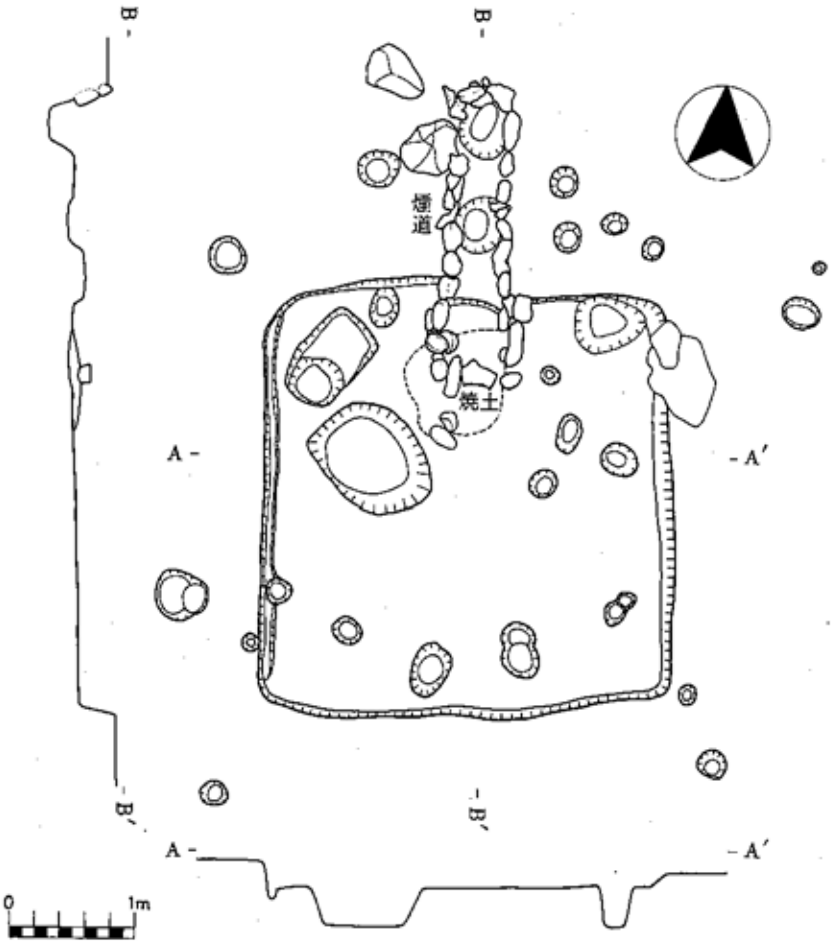
出土土器

土師器坏である。胴部から口縁部まで脹みをもって立ち上がる。底部は回転糸切り技法で切り離され、胴部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。胴部の2カ所に「舎」の墨書がみられる。

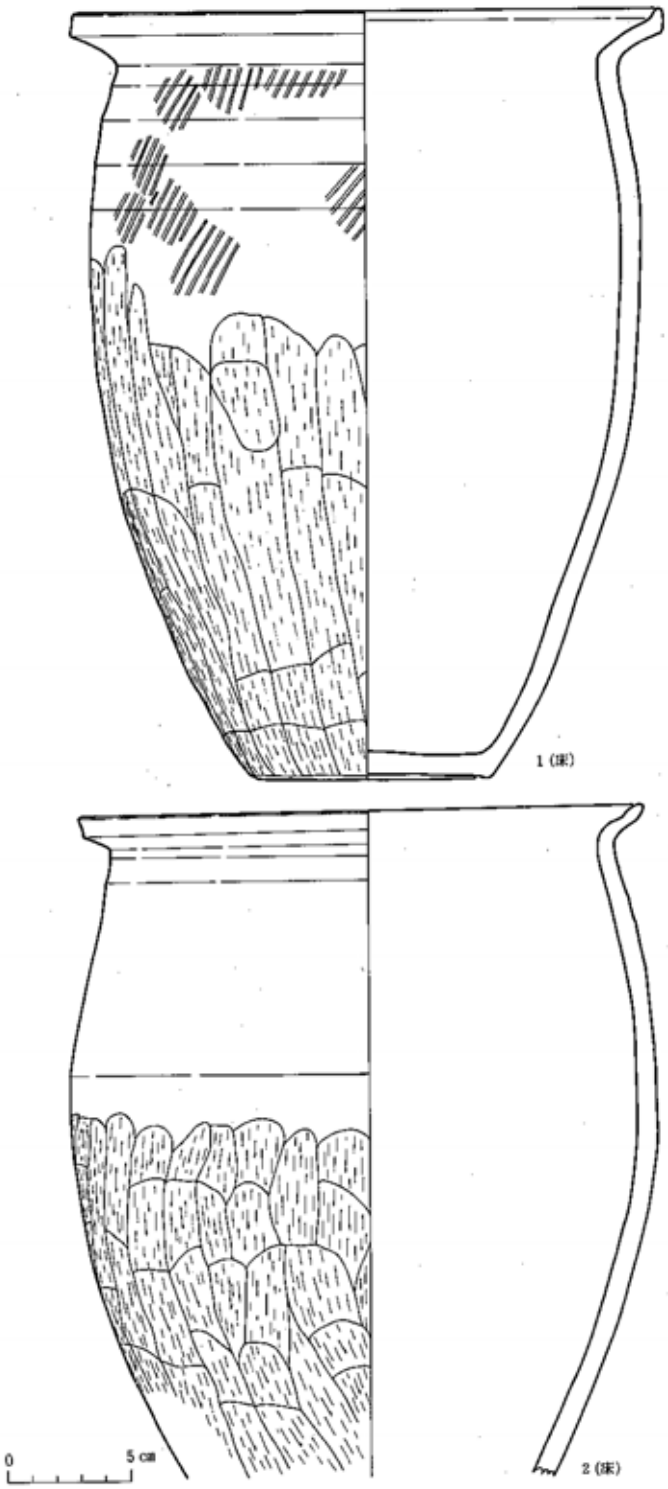
(注)　本住居跡出土の鉄製品は錆化のためか現存しない。

第５号住居跡

第3号住居跡の西側に近接して発見された。平面形は一辺約3m、面積約9㎡の隅丸方形を呈し、カマドの軸は磁北に一致する。北壁は、カマドの両側で約18㎝の食い違いが認められ、南壁はやや外張りをもち、東壁は北東隅寄りのローム層に食い込んだ自然石のため、約50㎝幅



第432図　第５号住居跡



第433図　第５号住居跡出土遺物

でとぎれている。住居跡の掘込みは、ローム層から南壁で約30㎝、北壁で約10㎝を測り、壁の立ち上がりは床面から約45～70度で、急角度に掘込まれているが、東壁はややなだらかである。周溝は北壁にそってのみ認められ、床面は住居跡の中央で固くしまり、壁の周囲では軟弱である。南壁からカマドに向い若干傾斜しているが東西ではほぼ平坦である。住居跡内に小ピットが10個、そのうち南壁にそって扇状に5個のピットが並び、住居跡外には10個のピットが周囲に検出されており、深さは約20～30㎝である。特に、煙道部周辺に検出されたピットは、煙道を覆う何らかの施設の存在を想起させる。また、住居跡内から大形のピットが北西部に 2 個検出され、ピット内には木炭を多量に含んだ粘土が詰り、上面は踏み固められていた。遺物の出土は全くないが、本住居の使用されていた期間に掘込まれたものと考えられるが、その性格は不明である。なお、北東隅のピットは縄文期のものである。カマドは北壁の中央にあり、河原石で焚口と煙道を構築しており、保存は良好である。焚口の幅は約40㎝、奥行約60㎝で、1.8mの煙道が付属する。煙道部と焚口部は10㎝前後の段で区画されている。焚口部は浅く掘りくぼめられ、内部には焼土と灰が混じり、焚口の手前には焼土と灰、さらに多量の木炭が堆積していた。また煙道の上部にも多量の粘土が認められ、煙道部の断面観察によると、煙道は河原石の部分より約4～5㎝幅広く掘られているが、丁度、煙道の掘込み部分に多量の粘土のブロックと焼土を少量含む層が検出され、煙道部を覆っていた粘土が内部に落ち込んだ状態を示していた。煙道内には、中央部と煙出し部に直径約40㎝のピットを有し、それぞれ水糸からの深さ 45㎝、62㎝であり、いずれも煙道の側石を置く前に掘られている。中央部のピットの石壁上では、カマドの底面より約10㎝高く、左壁上ではほぼ同一レベルである。これらの事は、あるいは煙道部の拡張を示すものかもしれない。住居跡の堆積層中から須恵器、土師器の小破片が、また床面からはほぼ完形の甕が2個体分、その他小破片が出土し、特にカマド付近に集中していた。（西脇俊郎）

出土土器

いずれも長胴形の土師器甕である。内外面にロクロ調整痕を残すが、1 はロクロ調整前の刷毛目が胴上部にみられ、下半は1・2ともヘラケズリが加えられている。

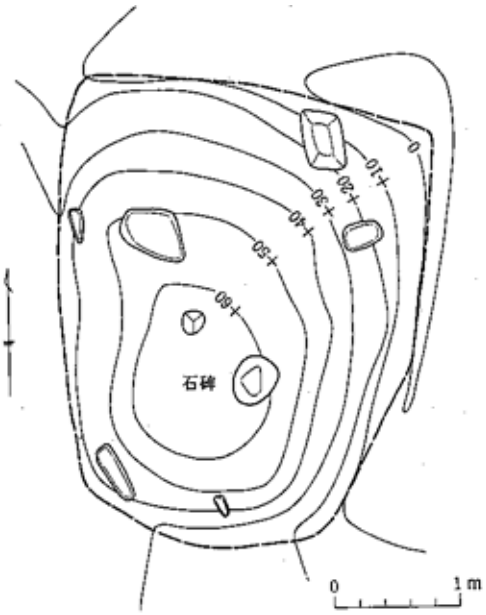
中世～近世の遺構と遺物

縄文時代の住居跡がある地区の西端に、楕円形（長径3m・短径2m）状の高さ80㎝の小塚があった。この塚は石塊を集めて築いてつくられたもので、五輪塔の破片や宋銭が出土した。しかも塚の下部は、広い配石遺構に連なり、その下から墓壙が3個検出され、人骨と宋銭・明銭が出土した。六道銭に寛永通宝が混入していないこと、煙管などを伴わないことなどから、

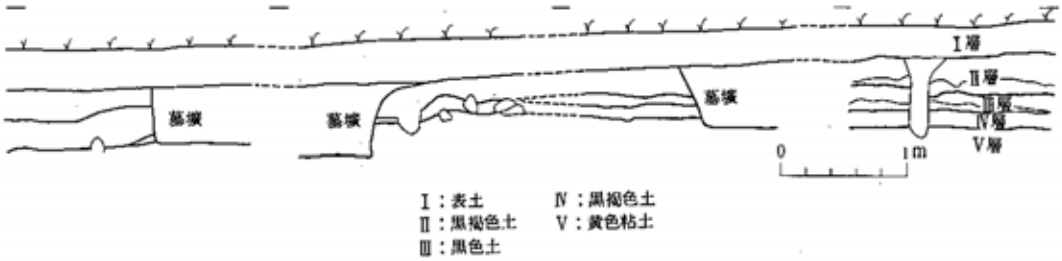
近世初頭に位置づけられるかもしれない(図版16上・下)。

小塚に隣接して最近まで墓地があった。道路敷内に入ったため改葬されたが、若干残っていたとみえ、墓壙が3個検出され、人骨と宋銭・寛永通宝・ハサミ・煙管が出土した。ここでは宋銭と寛永通宝が一組になって、あるいは寛永通宝のみで六道銭として使用されていた。江戸時代のものである。（林謙作・藤沼邦彦）

(注)　上記の出土遺物は整理時に確認できなかった。



第434図　塚



第435図　ＧＳ～ＧＰ55区東壁断面図

Ⅵ. 考　　察

1. 縄文時代中期後葉の土器

今回の調査において、中期後葉の土器は各住居跡、各埋設土器遺構、後期の遺物包含層、各地区から出土している。ここでは、器形、文様の特徴に基づいて分類し、検討する。

土器の分類

中期後葉の土器は前項で述べたように、深鉢、浅鉢、その他の器形（袖珍土器）がある。このうち、出土量が多く特徴が明らかな深鉢と浅鉢を対象に分類を行なう。なお、袖珍土器については土製品の項で説明する。

深鉢

深鉢には文様をもつものと地文のみがある。前者については器形の特徴から深鉢A～深鉢Ｉに大別することができる。後者は一括して深鉢Ｊとし、器形の特徴によって細別する。

深鉢A：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの（第436図1～3）

磨消手法による文様が口縁部から胴部に描かれている。1 は口縁部から胴部に縦位楕円文・縦位渦巻文・「∩」状文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部には縄文（ＬＲ）が充塡されている。文様構成としては口縁部から胴上半部に大波状沈線が巡り、山・谷部には縦位楕円文、縦位渦巻文が配され、それらの文様が交互に繰り返されている。なお、胴下半部には「∩」状文が並列されていると思われる。文様を描いた沈線は丁寧に研磨されている。

2・3 は全体の文様が明らかでないが、1 と同様な文様が描かれるものと推定される。2 は渦巻文・「∩」状文、3 は渦巻文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。文様を描いた沈線は1と同様に丁寧に研磨されている。施文された地文は2がＲＬ縄文、3がＬＲ縄文である。

深鉢B：口縁部が内弯し、胴部の屈曲が緩やかなもの（第436図4・5）

第1類：並列区画文のもの(第436図4)。

平口線で、口縁端部が小波状突起になる。胴部中央には隆線が巡り、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。胴上部の文様は磨消手法による幅の広い無文帯とその外側に充塡された楕円形状の縄文帯が隆線で区画され、楕円形状の充塡縄文帯が横方向に並列している。文様を描いた隆線は頂部が稜線状(以下この様な特徴をもった隆線は稜線と呼ぶ)になっており、周辺は丁寧に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部ともＬＲ縄文である。

土器の分類基準

深鉢A：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの。

深鉢B：口縁部が内弯し、胴部の屈曲が緩やかなもの。

1類：並列区画文のもの。

2類：「∫」状文のもの。

深鉢C：口縁部が外反し、胴部が緩やかに張むもの。

1類：縦位渦巻文のもの。

2類：「∩」状文のもの。

3類：「S状」状のもの。

深鉢D：口縁部が外反し、胴部が強く張むもの。

1類：平口縁のもの。

a：「∪」状文のもの。

b：「∞」状文（横位「S」状文）のもの。

c：一部非連結「S」状文のもの。

d：玉抱き連結「S」状文のもの。

e：各部分連結「S」状文のもの。

f：「∫」状文のもの。

g：「ʃ」状文のもの。

h：方形区画文のもの。

i：渦巻状文のもの。

j：玉抱き文のもの。

2類：波状口縁のもの。

深鉢E：口縁部が外傾し、胴部が僅かに張むもの。

1類：並列区画文のもの。

2類：方形区画文のもの。

a：隆線による方形区画文のもの。

b：隆・沈線の組み合せによる方形区画文のもの。

c：隆線・刺突文の組み合せによる方区画文のもの。

深鉢F：口縁部が外傾し、胴部が緩やかに張むもの。

深鉢G：胴下部から口縁部まで直線的に外傾するもの。

1類：並列区画文のもの。

2類：渦巻状円文のもの。

深鉢H：口縁部が直立し、胴中央部が僅かに張むもの。玉抱き文。

深鉢I：口縁部が直立し、胴部が円筒形のもの。

1類：「ʃ」状文のもの。

2類：

深鉢J：地文

1類：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの（地文）。

2類：口縁部が外反するもの。

a：頸部隆線文。

b：頸部隆沈線文。

c：頸部沈線文。

d：地文

3類：口縁部が直立するもの。

a：頸部隆線に沿って刺突文。

b：頸部隆線文。

c：頸部隆沈線文。

d：頸部沈線文。

e：地文。

第2類：「∫」状文のもの（第436図5）。

平口縁で、口唇部が肥厚する。胴上部の文様は磨消手法による各部分で連結した「∫」状の無文帯とその外側に充塡された楕円状の縄文帯が隆沈線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。文様を描いた隆線は隆線部分では稜線、沈線部分では幅が広く、共に丁寧に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部ともＲＬ縄文である。

深鉢Ｃ：口縁部が外反し、胴部が緩やかに脹むもの（第436図6～11）

口縁部から胴部に連続した文様をもつものである。

第1類：縦位渦巻文のもの（第436図6）。

口縁部から胴部の文様は磨消手法による縦位渦巻文が幅の広い沈線で描かれ、縦位渦巻文の内部に縄文（ＬＲ）が充塡されている。文様を描いた沈線は研磨されている。

第2類：「∩」状文のもの（第436図7）。

口縁から胴部の文様は磨消手法による「∩」状文と上部で反転する「∩」状文（鍵形文）？が幅の広い沈線で描かれ、これらの文様の内部には縄文（ＬＲ）が充塡されている。文様の構成は口縁部から胴下部へ縦方向に流れる「∩」状文と上部で反転する「∩」状文が交互に繰り返されているものと推定される。文様を描いた沈線は丁寧に研磨されている。

第3類：「Ｓ」状文のもの（第436図8～11）。

8 は磨消手法による非連結縦位「Ｓ」状文と「∪」状文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部に縄文（ＬＲ）が充塡されている。文様構成は大きな縦長の「Ｓ」状文が向い合い、その間に挟まれた小形の「∪」状文とが繰り返されながら胴部全体に描かれている。9・10 も 8 と同様に幅の広い沈線によって縦位「Ｓ」状文が描かれているものと推定される。文様の内部には縄文（ＬＲ）が充塡されている。

11 は口縁から胴下部の文様は磨消手法による非連結横位「Ｓ」状文と「∪」状文が幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部には縄文（ＲＬＲ）が充塡されている。文様構成としては大きな横位の「Ｓ」状文が胴部に展開し、その下部には小形の「∪」状文が描かれ、それらの文様が胴部全体に繰り返されている。また横位「Ｓ」状文間に縦位「Ｓ」状の文様が描かれているところもある。文様を描いた沈線はともに丁寧に研磨されている。

深鉢Ｄ：口縁部が外反し、胴部が強く脹むもの（第436図12・13～第438図5）。

第1類：平口縁のもの。

胴上部文様帯と胴下部地文帯からなっている。

ａ類：「∪」状文のもの（第436図12・13）。

12 は磨消手法による「∪」状文と波状文とが幅の広い沈線で描かれ、それらの文様の内部には縄文（ＲＬＲ）が充塡されている。文様構成は波状文が胴部に描かれ、その谷部に「∪」状文

が配されているものと思われる。13 も 12 と同様な文様が沈線によって描かれ、内部に縄文（ＬＲ）が充塡されている。文様を描いた沈線は丁寧に研磨されている。

ｂ類：「∽」状文(横位「Ｓ」状文)のもの（第 437 図 1）。

胴中央部には隆線が巡り、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。さらに、口縁下部に巡る隆線によって口縁部無文帯と胴部上部文様帯とをも区画している。胴上部の文様は磨消手法による「∽」状、弮形「∽」状の無文帯とその外側に充塡された刺突文が隆線で区画され、「∽」状・弮形「∽」状無文帯が横方向に並列している。「∽」状・弮形「∽」状無文帯の末端は鰭状の隆線となっている。文様を描いた隆線は稜線で、鰭状部分の隆線は特に高くなる。隆線は丁寧に研磨されている。胴下部に施文された地文はＬＲ縄文である。

ｃ類：一部非連結「Ｓ」状文のもの（第 437 図 2・3）。

3 は口縁部内面に稜が巡り肥厚する。いずれも胴上部の文様は磨消手法による一部で連結する「Ｓ」状無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆線（2・3）で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。3 は「Ｓ」状無文帯の一部が胴下部に下垂する。文様を描いた隆線は稜線で丁寧に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部とも 3 がＬＲ縄文、2 がＲＬ縄文である。

ｄ類：玉抱き連結「Ｓ」状文のもの（第 437 図 4・5）。

5 の胴上部の文様は隆沈線による「Ｓ」状の無文帯が複雑に入り組んで連結し、各部分には円形ないしは楕円形の区画文を描き、その内部に縄文・刺突文を充塡している。文様を描いた隆沈線はともに丁寧に研磨されている。また無文帯部分の末端は鰭状隆線になるところもある。施文された地文は 5 がＲＬＲ縄文、4 がＬＲ縄文である。

ｅ類：各部分連結「Ｓ」状文のもの（第 437 図 6）。

胴部の文様は磨消手法による「Ｓ」状の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆線で区画され、それらの文様が横方向に展開する。文様を描いた隆線は稜線で研磨されている。施文された地文は区画内・胴下部ともＬＲ縄文である。

ｆ類：「∫」状文のもの（第 437 図 7）。

胴上部の文様は磨消手法による「∫」状の無文帯とその外側に充塡された楕円状の縄文帯が隆沈線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で、隆線・沈線は共に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部ともＲＬ縄文である。

ｇ類：「ʃ」状文のもの（第 437 図 8）。

口縁部内面が肥厚する。胴中央部には隆沈線が巡り、胴上部文様帯と胴下部地文帯とに区画している。胴上部の文様は磨消手法による「ʃ」状の無文帯とその外側に充塡された方形状の

縄文帯が隆線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で、沈線と同様に研磨されている。施文された地文は区画内・胴下部ともＬＲＬ縄文である。

ｈ類：方形区画文のもの（第 438 図１・2）。

1・2 は口縁部内面が肥厚し、端部が小波突起になる。胴上部の文様は磨消手法による方形の無文帯とその外側に充塡された方形の縄文帯が隆線（1）、隆沈線（2）で区画され、これらの文様が交互に繰り返されて、横方向に展開する。文様を描いた隆線・隆沈線は研磨されている。施文された地文はいずれもＲＬ縄文である。

ｉ類：渦巻状文のもの（第 438 図 3）。

胴上部の文様は明らかではないが、沈線によって渦巻状文が描かれ、横方向に連続すると思われる。文様を描いた沈線は研磨されている。胴下部に施文された地文はＲＬ縄文である。

ｊ類：玉抱き文のもの（第 438 図 4）。

胴上部の文様は円形の無文帯とその外側に充塡された刺突文が隆沈線で区画されている。文様を描いた隆沈線は丁寧に研磨されている。

第 2 類：波状口縁のもの（第 438 図 5）。

口縁部は外反し、胴部が強く脹み、胴下部ですぼまる。胴部の文様は磨消手法による幅の広い無文帯と充塡縄文帯が沈線で区画されている。文様を描いた沈線は研磨されている。施文された地文はＬＲ縄文である。

深鉢Ｅ：口縁部が外傾し、胴部が僅かに脹むもの（第 438 図 6～8）。

文様は胴上部に描かれ、胴下部は地文のみとなる。

第 1 類：並列区画文のもの（第 438 図 6）。

胴中央部には沈線が巡り、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。胴上部文様は磨消手法による幅の広い無文帯と方形状の充塡縄文文帯が沈線で区画され、方形状の充塡縄文帯が横方向に並列している。文様を描いた沈線は粗雑な研磨がなされ、部分的に調整が加えられていないところもある。施文された地文は区画内・胴下部ともＬｒ撚糸文である。

第 2 類：方形区画文のもの（第 438 図 7・8、第 439 図 1・2）。

ａ類：隆線による方形区画文のもの（第 438 図 7・8）。

平口縁で、小波状突起をもつ。7 は口縁部内面が肥厚している。胴上部の文様はいずれも磨消手法による方形の無文帯とその外側に充塡された縄文帯が隆線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。8 も 7 と同様な文様が描かれるものと思われる。文様を描いた隆線（7・8）は稜線で丁寧に研磨されている。

ｂ類：隆・沈線の組み合わせによる方形区画文のもの（第 439 図 1）。

胴上部の文様は隆線による「⌐」状と下垂する細い沈線の組み合わせによって方形に区画され、区画内にはＬｒ撚糸文が充塡されている。この「⌐」状隆線に沿って刺突文が加えられている。文様を描いた隆線は粗雑に研磨されている。沈線は調整されていない。

ｃ類：隆線・刺突文の組み合わせによる方形区画文のもの（第 439 図 2）。

口縁端部は波状突起をもつ。頂部には円窓がある。胴上部の文様は波状突起から下垂し胴部に巡る「⊥」状隆線と刺突文が組み合って方形に区画され、区画文内に縄文が充塡されている。頂部には鰭状の隆線となるところもある。文様を描いた隆線は粗雑に研磨されている。施文された地文は区画内、胴下部ともＲＬ縄文である。

深鉢Ｆ：口縁部が外傾し、胴部が緩やかに脹むもの（第 439 図 3・4）。

「ノ」状文のもの（第 439 図 3・4）。

3・4 は平口縁で、小波状突起をもつ。胴上部の文様は磨消手法による「ノ」状の無文帯と不整方形ないしは楕円形の充塡縄文帯が沈線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。さらに、「ノ」状無文帯の結合部は鰭状の隆線となっている。この鰭状隆線と頚部に巡る隆線上には連続した刺突文が加えられている。また、4 は波状突起部から下垂する隆線上にも刺突文が加えられている。文様を描いた頚部隆線では丁寧に研磨されているが、鰭状隆線部分では不徹底な研磨がなされている。沈線は研磨されているが、調整されていない部分が多い。施文された地文は 3 が区画内、胴下部ともＬＲ縄文。4 が区画内にＲｌ撚糸文である。

深鉢Ｇ：胴下部から口縁部まで直線的に外傾するもの（第 439 図 5・6）。

第 1 類：並列区画文のもの（第 439 図 5）。

口縁部は平口縁で、口唇部内面に稜が巡り肥厚する。口縁部から胴部に文様をもつ。文様は磨消手法による幅の広い無文帯と横長楕円状の充塡縄文帯が沈線で区画され、横長楕円状の縄文帯（区画文）が横に並列している。文様を描いた沈線の周辺・内部は研磨されているが、部分的に研磨されていないところがある。区画内に施文された地文はＲＬ縄文である。

第 2 類：渦巻状円文のもの（第 439 図 6）。

口縁部は平口縁で、2 個の小波状突起をもつ。小波状突起部間の文様は磨消手法による渦巻状円文（無文帯）とその外側に充塡された円形刺突文が隆沈線で区画され、渦巻状円文帯が横方向に展開する。また渦巻状円文帯の末端は鰭状の隆線となっている。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で丁寧に研磨されている。沈線も隆線同様に研磨されている。胴部に施文された地文はＬＲ縄文である。

深鉢Ｈ：口縁部が直立し、胴中央部が僅かに脹むもの（第 439 図 7）。

口縁部は外反気味に直立する。胴上部の文様は磨消手法による玉を抱いた無文帯と楕円状の

充塡縄文帯が隆・沈線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。玉を抱いた部分の外側には円形刺突文が加えられている。文様を描いた隆・沈線は隆線部分が稜線で丁寧に研磨されている。沈線部分は隆線と同様に研磨されている。施文された地文は区画内・胴下部ともＬｒ撚糸文である。

深鉢Ｉ：口縁部は直立し、胴部が円筒形のもの（第439図8・9）。

胴上部文様帯と胴下部地文帯からなるもの。

第1類：「ʃ」状文のもの（第439図8）。

胴上部の文様は磨消手法による「ʃ」状の無文帯と楕円形の充塡縄文帯とが隆線で区画され、それらの文様が交互に繰り返されて横方向に連続する。文様を描いた隆線は稜線で丁寧に研磨されている。施文された地文は区画内・胴下部ともＬＲ縄文である。

第2類：口縁部無文帯で、胴部上半に文様帯をもつもの（第439図9）。

頚部に一条の沈線が巡り、口縁部無文帯と胴部文様帯とを区画している。胴部文様は破片のためその内容は明確ではないが磨消手法による幅の広い無文帯と方形状の充塡縄文帯が沈線で区画されている。また、無文帯の上下は鰭状の隆線となっている。文様を描いた沈線は一部に研磨痕もみられるが全体としては無調整の部分が多い。鰭状隆線部分では粗雑な研磨が加えられている。施文された地文は区画内・胴下部ともＲ撚糸文である。

深鉢Ｊ：地文だけのもの（第440図1～12）。

第1類：口縁部が内弯し、キャリパー形のもの（第440図1）。

平口縁で口縁部上端が内傾気味に強く内弯する。口縁部から胴部にＬＲ縄文が施文される。

第2類：口縁部が外反するもの（第440図2～5）。

ａ類：頚部に隆線が巡るもの（第440図2）。

胴部の地文はＬＲ縄文である。

ｂ類：頚部に隆沈線が巡るもの（第440図3）。

口縁部内面が一部つば状に脹む。胴部の地文はＬＲ縄文である。

ｃ類：頚部に沈線が巡るもの（第440図4）。

胴部の地文はＬＲ縄文である。

ｄ類：頚部に隆・沈線が巡らないもの（第440図5）。

胴部にＬＲ縄文が施文される。

第3類：口縁部が直立するもの（第440図6～12）。

ａ類：頚部に巡る隆線に沿って刺突文が加えられるもの（第440図6）。

平口縁で小波状突起をもつ。は胴部にＲｌ撚糸文が施文されている。

ｂ類：頚部に隆線が巡るもの（第440図7）。

胴部にはＬＲ縄文が施文されている。

ｃ類：頚部に隆沈線が巡るもの（第 440 図 8）。

胴部にはＬＲ縄文が施文されている。

ｄ類：頚部に沈線が巡るもの（第 440 図 9）。

胴部にはＬＲ縄文が施文される。

ｅ類：頚部に隆線・沈線が巡らないもの（第 440 図 10～12）。

胴部の地文は 10 がＲＬ縄文、11 がＬｒ撚糸文、12 が条線文である。

浅鉢

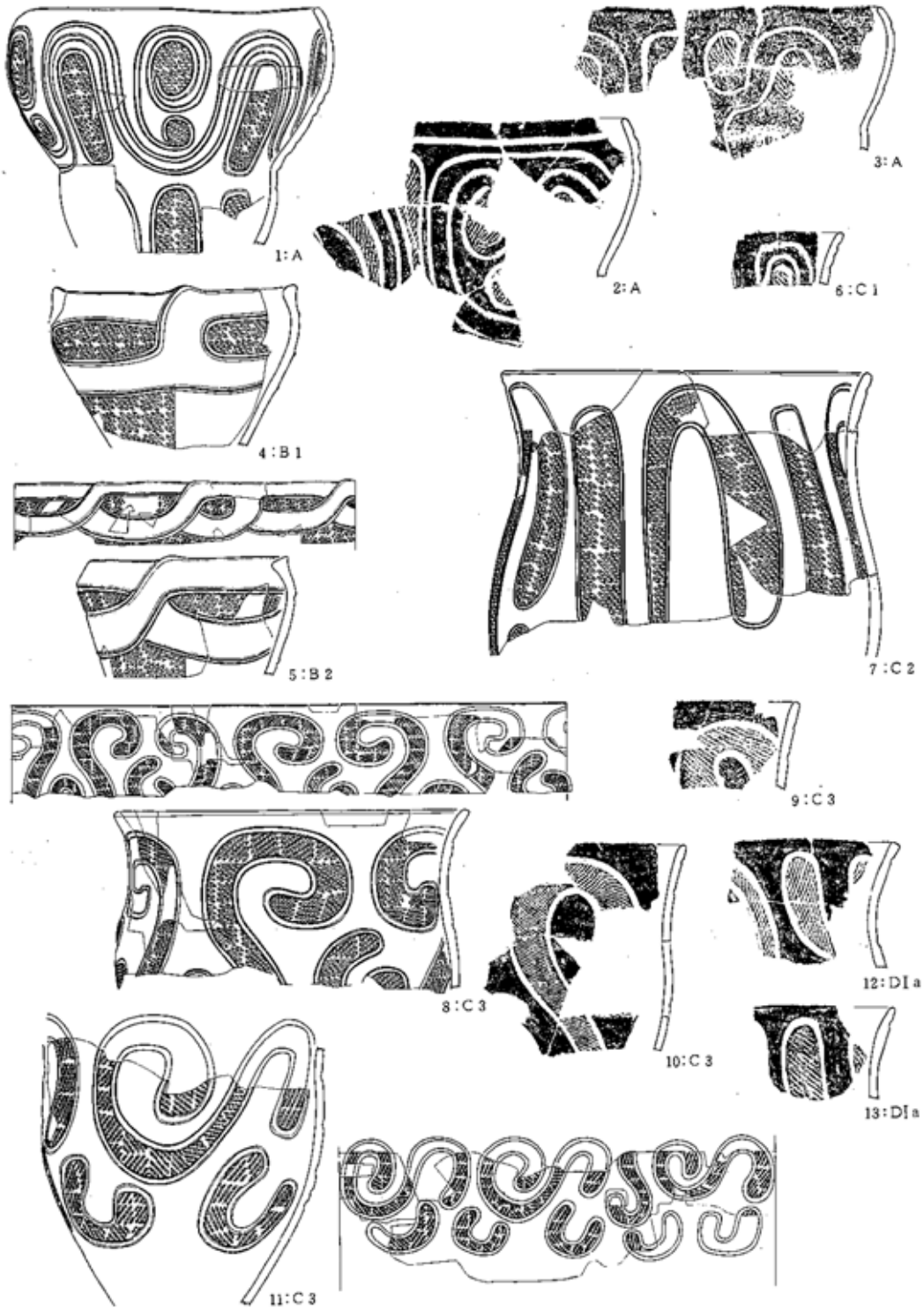
浅鉢は器形の特徴からＡ・Ｂに大別することができる。

浅鉢Ａ：口縁部が内弯気味のもの（第 440 図 13）。

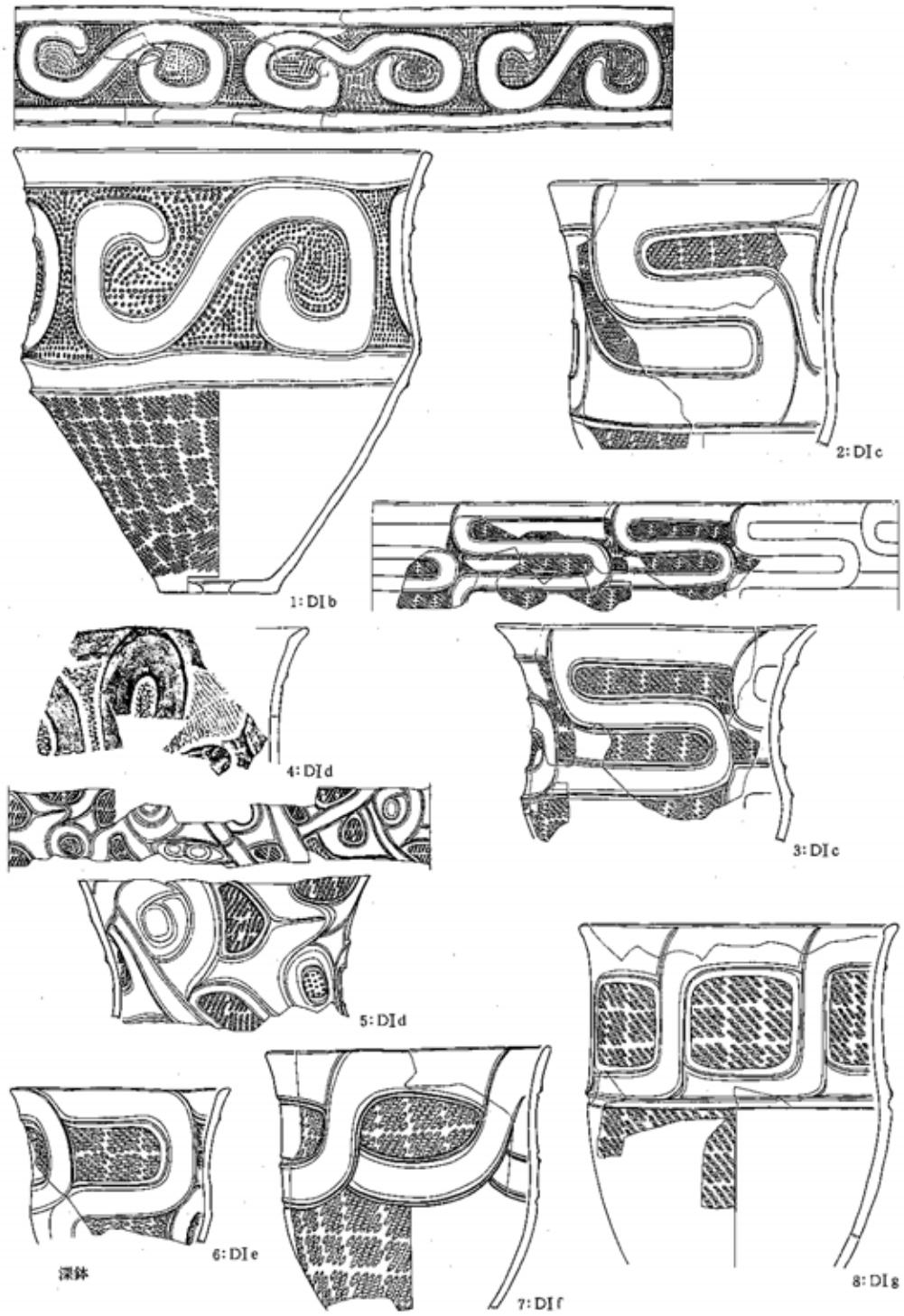
口縁部は 3 つの大波状突起をもつ浅鉢で、底部には小さな台が付く。突起部中央には円窓がある。大波状突起間の文様は突起部から隆線が下垂し、胴部では横長楕円状の充塡縄文帯と無文帯が隆沈線で区画され、横長楕円状の充塡縄文帯が横方向に並列している。また、大波状突起部は鰭状の隆線となっている。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で丁寧に研磨されている。沈線部分も隆線と同様に研磨されている。区画内に施文された地文はＬＲ縄文である。

浅鉢Ｂ：口縁部が内傾するもの（第 440 図 14・15）。

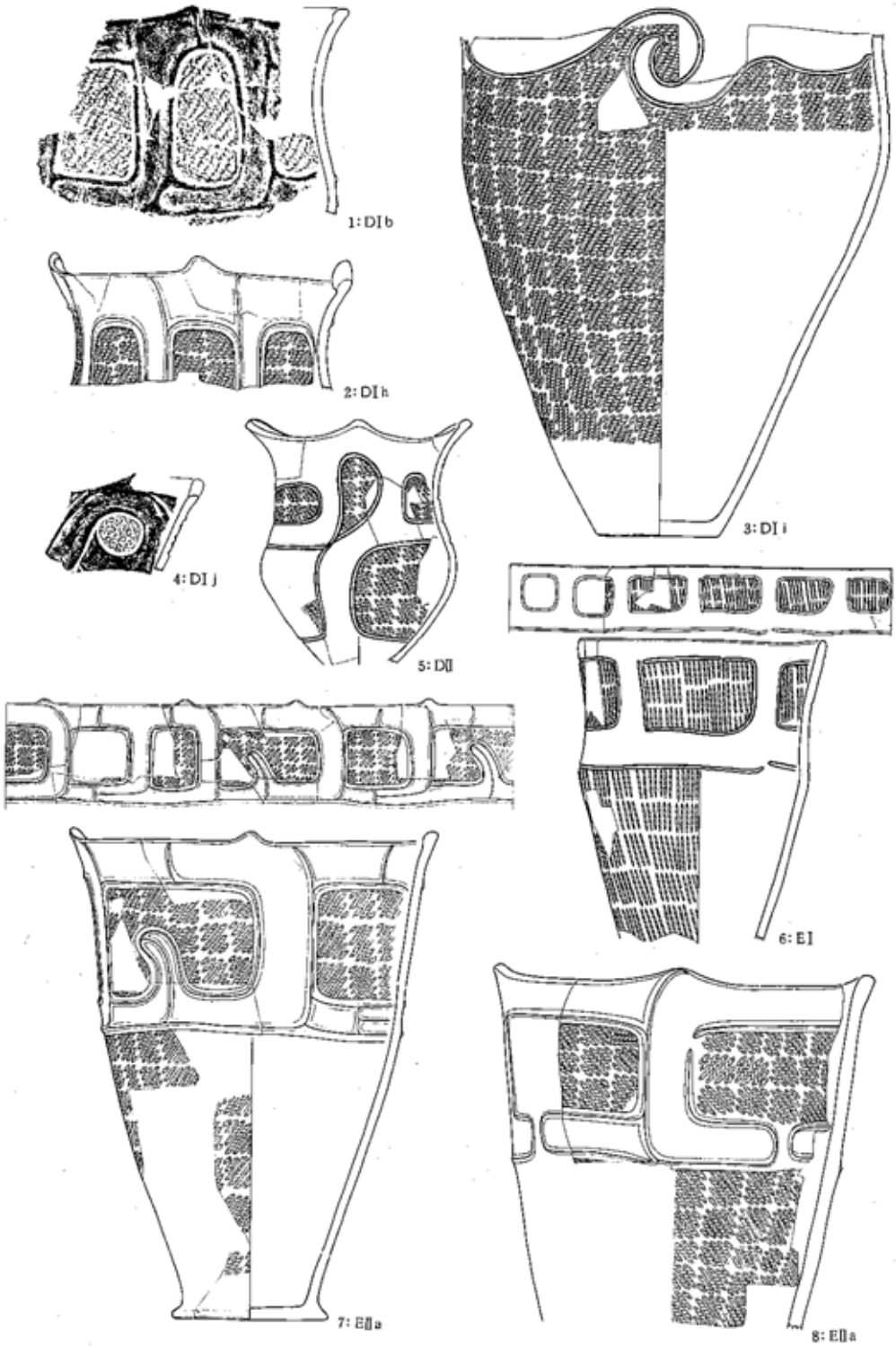
14・15 は波状突起をもつ浅鉢で、突起部には注口が付く。15 は突起部が橋状になっている。14 も 15 と同様に突起部が橋状になると推定される。14 は注口部が 1 個であるが、15 については注口部が 1 個かあるいは、それ以上なのかは不明である。14 の口縁文様は隆線によって区画文が描かれている。胴部文様は磨消手法によって描かれている胴部の文様は隆線による渦巻状円文（無文帯）が描かれている。その渦巻状円文帯間には隆線による方形区画文が描かれ、区画文外には縄文が充塡されている。また、渦巻状円文帯の外側には円形刺突文が充塡されている。渦巻状円文帯の末端は鰭状の隆線となっているところもある。区画文内・胴下部に施文された地文はＬＲ縄文である。15 は全体の文様は不明だが隆沈線によって、楕円状の区画文が描かれ、区画内に縄文が充塡されている。区画内・胴下部の地文はＬｒ撚糸文である。



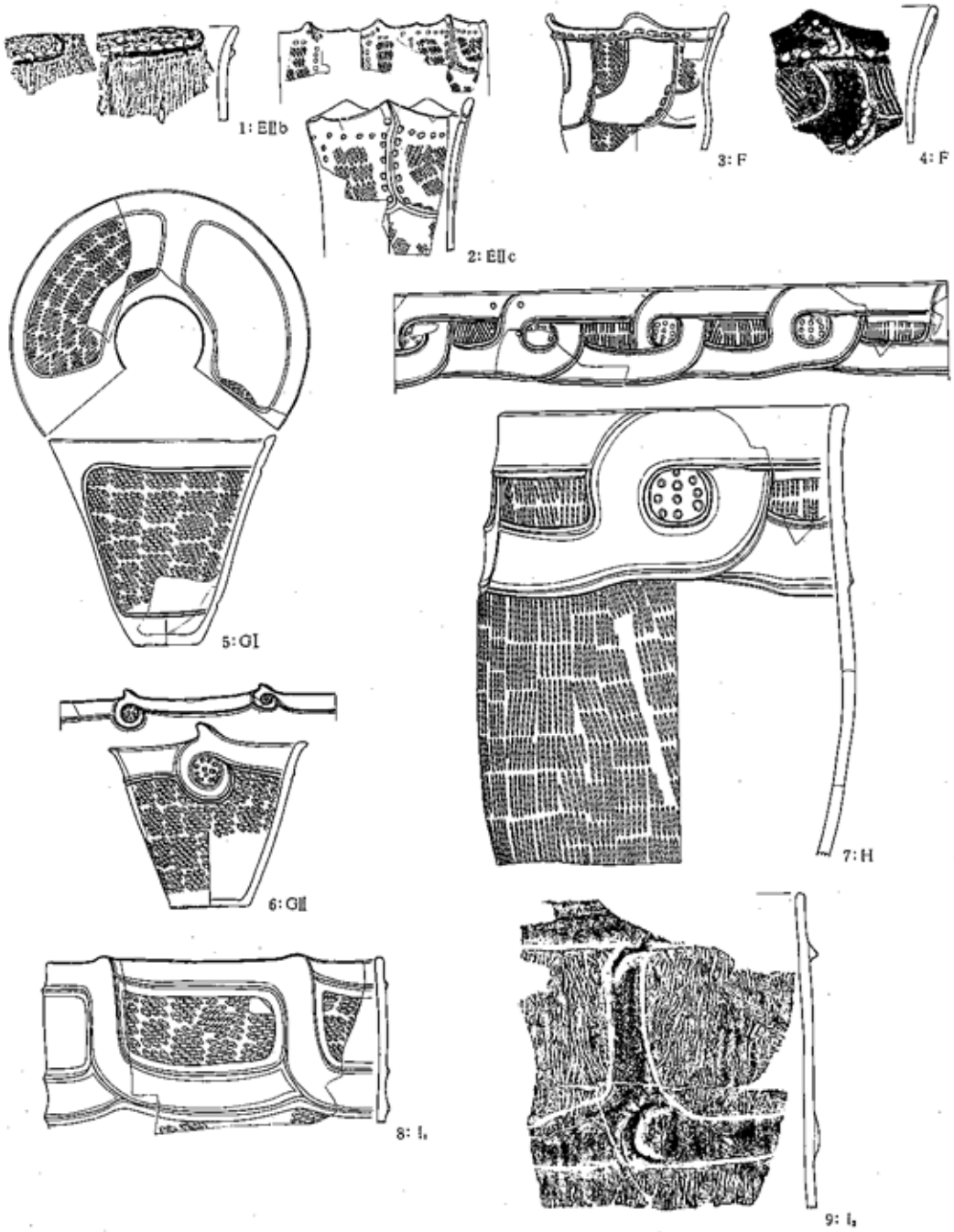
第436図　土器分類基準図（中期）



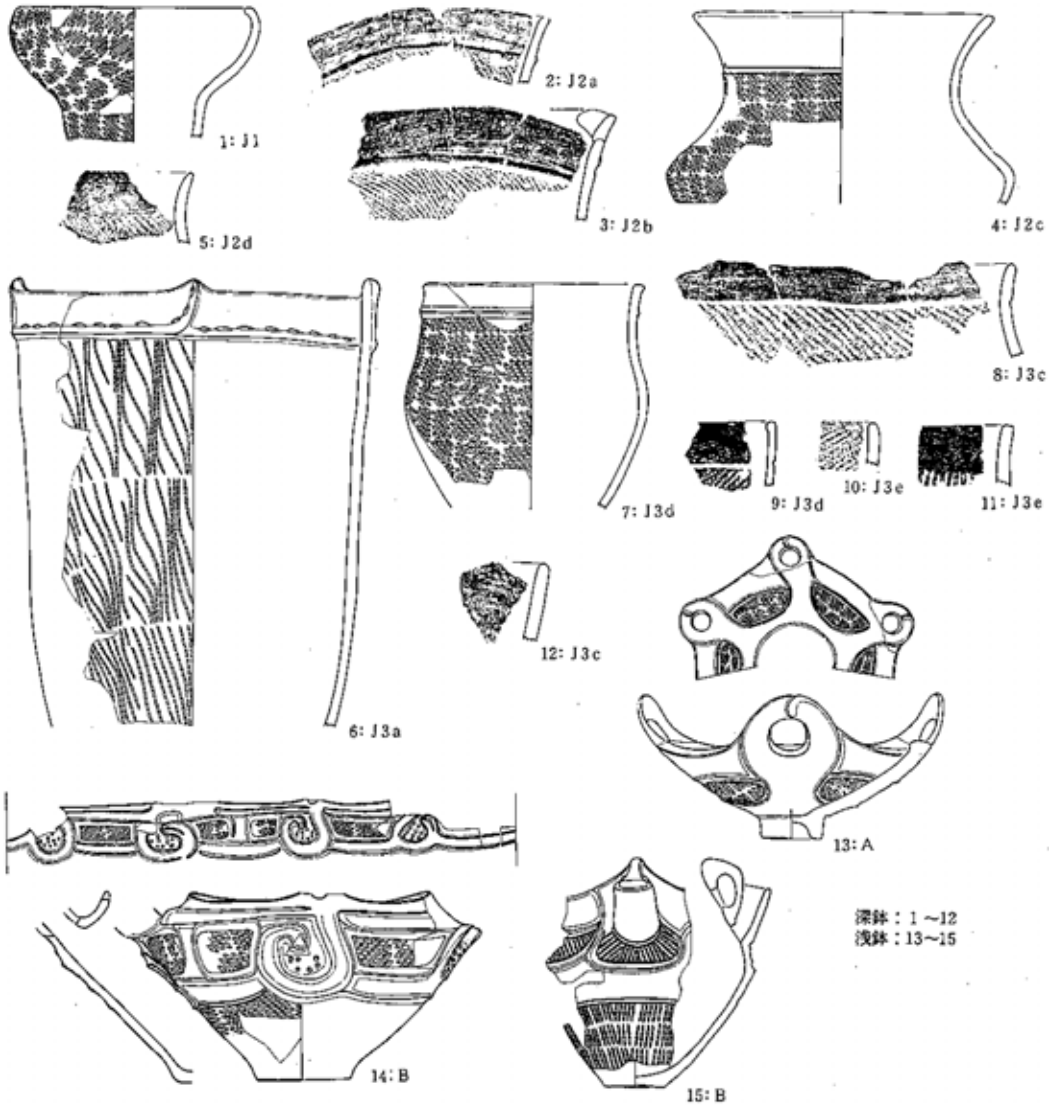
第437図　土器分類基準図（中期）



第438図　土器分類基準図（中期）



第439図　土器分類基準図（中期）



第440図　土器分類基準図（中期）

土器の共伴関係と編年的位置

共伴関係の検討

縄文時代中期後葉の土器は深鉢 10 種類、浅鉢 2 種類に分類された。これらの土器は各住居跡・各埋設土器遺構・後期の遺物包含層・各地区から出土していることは既に述べた通りである。共伴関係の資料として取り扱うものは第 4・6・7 号住居跡 1 号炉の炉埋設土器・床面から出土した土器を対象とする。これらの土器は同一層におけるまとまりのある土器群で占められているため組み合せを考えるうえで良好な資料である。この点、各住居跡堆積土、各埋設土器遺構・後期の遺物包含層・各地区から出土した土器は後期の土器と混在が著るしく、また単独出土であるため共伴関係の資料として取り扱うには十分なものとはいえない。以下、第 4・6・7 号住居跡 1 号炉における出土状況を基に共伴関係、組み合せについて検討してみたい。さらに、その結果に基づいて編年的位置づけを行うことにする。

各住居跡における出土状況

第 4・6・7 号住居跡 1 号炉の土器の出土状況をみると、第 4・7 号住居跡 1 号炉では炉埋設土器、第 6 号住居跡では床面から出土している。

第 4 号住居跡においては深鉢C2(「∩」状文)・深鉢C3 類(「S」状文)が共伴関係にある。

第 6 号住居跡においては深鉢B1 類（並列区画文）・深鉢D1ｃ類（一部非連結「S」状文）・深鉢D1ｊ類（玉抱き文様）・深鉢D1ｆ類（「∫」状文）・深鉢J2b類（頚部隆沈線文）・深鉢J2d類（地文）・深鉢J3d類（頚部沈線文）が共伴関係にある。

第 7 号住居跡 1 号炉においては深鉢D1ｉ類（渦巻状文）・深鉢J3b類（頚部隆線文）が共伴関係にある。なお、床面・床付近から深鉢D1ｃ類（一部非連結「S」状文）・深鉢J2ａ類（頚部隆線文）・深鉢J3b類（頚部隆線文）・深鉢J3ｃ類（頚部隆沈線文）・浅鉢B類が出土している。しかし、発掘調査の不備とあいまって後期の土器も少量出土しており、共伴関係にするのには幾分問題も含むが、床面・床付近の土器の大部分は炉埋設土器の特徴と類似していることから深鉢D1ｃ類・深鉢J2ａ類・深鉢J3b類・深鉢J3ｃ類・浅鉢B類もほぼ同時期のものと考えられる。以上のように、第 4 号住居跡と第 6・7 号住居跡 1 号炉では土器群に相違が認められた。ここでは前者をA群土器（深鉢C2 類・C3 類）、後者をB群土器（深鉢B1 類・D1ｃ類・D1ｊ類・D1ｆ類・D1ｉ類・J2ａ類・J2ａ類・J2b類・J2d類・J3b類・J3ｃ類・J3d類・浅鉢B類）とする。

これ以外の 2 軒の住居跡についてみると、7 号住居跡 2 号跡では深鉢D1d類・J3b類・第 8 号住居跡では深鉢 3ｃ類が出土している。このことから、第 8 号住居跡の土器はA群土器に属

する。

以上のようなA・B群土器の共伴関係を整理すると次のようになる。

A群土器：深鉢C2類・C3類からなるグループ（第4・8号住居跡）。

B群土器：深鉢B1類・D1c類・D1j類・D1f類・D1i類・J2a類・J2b類・J3b類・J3c類・J3d類・浅鉢B類からなるグループ(第6・7号住居跡1号炉、2号炉)。

さらに、A・B群土器と共伴関係が認められなかった土器：深鉢A類・B2類・C1類・D1a類・D1b類・D1d類・D1e類・D1g類・D1h類・D1j類・D2類・E1類・E2a類・E2b類・E2c類・F類・G1類・G2類・H類・I1類・I2類・J1類・J2c類・J3a類・J3e類・浅鉢A類がある。

編年的位置

以上で述べた、A・B群土器とA・B群以外の土器について従来の研究成果に基づいて編年的位置づけを検討してみたい。

A・B群土器

A・B群土器はその特徴から縄文時代中期後葉（大木 10 式期）に位置づけられている。近年大木10式土器は第Ⅰ～Ⅳ段階まで細分されている(丹羽茂：1981)。さらに、第Ⅱ段階をA・B段階に細分した考えも指摘されている（丹羽・阿部・小野寺：1982）。

A群土器

大木10式土器の中で、A群土器は「S」状の文様を胴部全体に描いているという点では第1段階に位置づけられる。

A群土器と類似した内容をもつ土器群は福島県二本松市塩沢上原A遺跡の第 15 号住居跡炉から出土している（目黒・木元：1975）。C3 類（「S」状文）の特徴に類似するものは炉Aから出土している。炉Aから出土した土器は器形・文様表現技法などの点を除けばC3 類と類似する。C2類（「∩」状文）の特徴に類似するものとしては炉B・C炉内から出土している。C2類の文様は大木9式土器の新しい段階（丹羽茂：1981）に特徴的にみられ、文様変遷の上で直接的関係が指摘できるが、炉B・C炉内から出土した土器の文様は「U」状・波状文で、「∩」状文からの文様変遷がうかがわれるものの直接的な関係は指摘できない。このように、A群土器と塩沢上原A遺跡の第 15 号住居跡炉から出土した土器群とではいくつかの相違する面が認められる。このことは両者の土器群で時期差が相定される資料なのか、あるいは同一時期なのか、2 つの可能性が考えられるが、現時点ではそのいずれとも決め難い。そのため、ここでは一応A群土器を大木10式土器第1段階に位置づけ、資料の増加に注目し判断したい。今回、県内における第1段階の土器群の地域性について検討を加えることができなかった。この点についても今後の課題としたい。

B群土器

大木 10 式土器の中で、B群土器は連結された「S」状文の文様が描かれているという点で第Ⅱ段階に位置づけられる。第Ⅱ段階の土器群は菅生田遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982）においてA・B段階に細分されている。ここではB群土器と菅生田遺跡第１群土器のA・Bグループの土器とを比較し、検討を加えてみたい。B群土器のD1ｃ類（一部非連結「S」状文）は菅生田遺跡第１群土器のAグループの土器（第１類）と器形・文様などの点で類似する。また、本群のB1類（並列区画文）・D1ｆ類（「∫」状文）・D1ｉ類（渦巻状文）・D1ｊ類（玉抱き文）は菅生田遺跡第１群土器のBグループの土器群の特徴とも一部類似する。しかし、B群土器は菅生田遺跡第１群土器A・Bグループの土器群とは土器組成の点で大きな相違が認められる。このことはB群土器が菅生田遺跡第１群土器のA・Bグループの土器との過渡的な様相を示す土器群ともみられることができるが、現段階では判断できない。そのため、B群土器は一応大木10式第Ⅱ段階の中に位置づけておきたい。なお、B群土器の地域性は既に菅生田遺跡で述べてあるので、そちらを参照されたい。

A・B群土器以外の土器

前述のように、A・B群土器の共伴関係・編年的位置づけを行ったが、ここではA・B群土器のいずれにも共伴関係が認められなかった深鉢、浅鉢について編年的位置づけを行う。

深鉢A類は沈線による渦巻文、縦位楕円文、「∩」状文の文様が胴部全体に描かれ、それらの文様の内部に縄文が充塡されている。このような特徴（器形・文様構成・文様表現技法）をもった土器は二本松市上原遺跡（目黒吉明：1969）、石巻市南境貝塚（後藤勝彦：1968）などから出土しており、大木９式期に位置づけられている。

深鉢C1 類は沈線による縦位渦巻文の文様が胴部に描かれ、文様の内部に縄文が充塡されている。このような特徴をもった土器は川崎町湯坪遺跡第２号住居跡（一條孝夫：1978）、南方町青島貝塚Ｆトレンチ第４層（加藤・後藤他：1975）などから出土しており、大木９式期に位置づけられている。

大木９式土器については、その出土例が増加する中で、２つの土器群に分け、さらにそれ以外にもいくつかの土器群の存在が指摘されている（丹羽茂：1981）。

この中で深鉢A類、C1 類の土器は口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画したキャリパー形の器形や隆線による渦巻文がない点で第Ⅱの土器群（新しい段階の土器）と類似するが、大木 9 式土器については今だ明確な位置づけがなされていない。そのため、両類の土器も充分に検討を加えることができなかった。

深鉢B2 類(各部分連結「∫」状文)、D1ｅ類（各部分連結「S」状文）、D1ｇ類(各部分連結「∫」状文)・E1類(並列区画文)・G1類（並列区画文）・G2類（渦巻状円文）・H類（各

部連結玉抱き文）・Ⅰ$_1$類（「ʃ」状文）・浅鉢A類は文様構成文様表現技法などの点でB群土器の特徴とも類似しており、大木10式第Ⅱ段階のものと考えられる。

深鉢D1ａ類は「∪」状の文様が胴部に描かれている。D1ａ類と類似した文様は二本松市塩沢上原A遺跡第14号住居跡炉A(目黒・木元他：1975)に見られ、大木10式土器の第Ⅱ段階(丹羽茂：1981)に位置づけられている。

深鉢D1ｂ類は非連結「∞」状文の文様が胴上部に描かれている。この点、B群土器と類似した特徴を持っている。さらに、第1段階の「S」状文とも文様変遷のうえで直接的関連を指摘することができる。このことから、大木10式土器第Ⅱ段階の中でも古い段階のものと考えられる。

深鉢D1ｄ類（各部連結玉抱き「S」状文）はB群土器を出した第7号住居跡1号炉と直接層位的関係が認められた。このことから、深鉢D1ｄ類はB群土器よりも一段階古い時期のものかあるいは同時期か2つの時期の可能性が考えられる。

深鉢F類（「ノ」状文）を器形、文様などが類似した土器群は西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層出土土器(後藤・斎藤：1967)の中にまとまってみられ、大木10式土器第Ⅲ段階(丹羽茂：1981)に位置づけられている。

深鉢D1ｈ類・E2ａ類の文様と特徴が類似した土器群は前述の西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層出土土器・沼津貝塚（三塚・阿部・佐藤：1976）の中に一部みられる。このことから、これらの類は大木10式土器第Ⅲ段階か、それ以降の時期のものと推定される。

深鉢E2ｂ類・E2ｃ類に類似した土器は南境貝塚（後藤勝彦：1968）・沼津貝塚（三塚・阿部・佐藤：1976）・六反田遺跡（田中則和他：1981）などから出土している。これらの土器は方形区画文という点で大木10式土器最終末段階に位置づけられている。現時点で最終末段階とされている土器群は個別的な資料や、層位的関係のない資料であり、まとまりのある土器群としてはいまだ公表されていない。そのため、本類は多くの問題点を含むが大木10式土器最終末段階に位置づけておく。

深鉢J1 類(地文)は土器の特徴が不明瞭であるため編年的位置づけは困難であるが、本遺跡でJ1類のような器形は大木9式土器に限定されることから、本類もほぼ同時期の可能性が強い。

深鉢 J2c 類・J3ｅ類は第6・7号住居跡の堆積土から出土しており、時期決定には問題を含むが、床面・炉埋設から出土した土器は大木10式土器に位置づけられている。このことから、これらの類もほぼ同時期に相当するものと思われる。

深鉢J3ａ類に類似した土器は前述の沼津貝塚・梨木囲貝塚（芳賀良光：1968）などにみられ、大木10式期に位置づけられている。

2. 縄文時代後期前葉の土器

後期前葉の土器は南側・北側遺物包含層・竪穴住居跡（第6・7号住居跡）、炉跡（第2・7・9号炉）、第1号配石遺構Ｆの埋設土器遺構（埋設土器遺構Ａ・Ｃ・Ｆ）、それ以外の埋設土器遺構（第1・2・3・9・11・13号埋設土器遺構）、土壙（第1号土壙）などの遺構や、堆積層から出土しており、このほか表土および地区・層位不明のものがある。

このうち出土量からみると遺物包含層出土土器が大半を占め、南側・北側の両遺物包含層ともほぼ同様の特徴をもつ土器であるところから、まずこれらの土器についての検討を行うことにする。またこのほかに、南側遺物包含層第2層からもごく微量出土しているが、大半は堆積層から出土し、包含層出土土器の大半とは著しく特徴が異る土器群がある。「その他の土器」として別に取り扱う。

遺物包含層出土土器の分類

南側・北側遺物包含層出土土器についてはすでに各区、層位ごとに類別を行っている。ここではそれらを総合して分類し、各類の特徴をまとめることにする。

土器の器形は深鉢、鉢、台付鉢、壺、注口土器の5種に大別される。大別の基準は、深鉢が口径より器高の大きいもの、鉢は逆に口径が器高より大きいものとし、壺は頚部径（あるいは口径）が胴部径の半分以下のもの、注口土器は注口の付くものすべてとした。しかし実際には注量が計測できた土器は全体からみればわずかであり、これらのいずれかと推定可能なものを含めている。台付鉢は1点だけである。鉢については器高が口径とほぼ等しいものから口径の約半分のものまであって、「鉢」と「浅鉢」とに分けるべきかも知れないが、両者の違いを明瞭にできなかったため「鉢」として一括した。また注口土器には注口が付くことを除けば一部はほぼ同じ器形が鉢に含まれている。

以下、大別された器形ごとに分類するが、口縁部資料を主にしているものの、可能な限り胴部資料も含めている。

深鉢

深鉢には15種類(Ａ類～0類)の器形がみられ、各器形（類）はさらに細部の器形的特徴や文様の施文される位置、あるいは文様の種類によっていくつかに細分される。

Ａ類：胴上部が張り出して開き、頚部に鍔状の隆線が巡り、口縁部が外反する器形である。

胴中位ですぼまってそのまま底部にいたる。高い突起が付くものと思われるが、突起上部を欠損している。

深鉢の分類基準①

	器形		文様	
深鉢A類	胴上部張り、頸部窄状、口縁部外反			
深鉢B類	胴上部張り、口縁部外傾・外反	BⅠ．胴上部強く張る		
		BⅡ．〃 張り弱い		
深鉢C類	胴中央に稜、それ以上外反気味			
深鉢D類	胴中位くびれ、それ以上外反		Ⅰ．胴部に文様	a．方形区画文
				b．「X」・「Y」・「V」字状文
				C．三角懸垂文　c
				d．渦文
			Ⅱ．口縁部から胴部に文様	a．1・2条の沈線
				b．多条沈線
			Ⅲ．口縁端部に文様	
深鉢E類	胴上部から口縁部内傾口縁端部水平に外に折る			
深鉢F類	頸部に稜、口縁部くびれて外反		Ⅰ．口縁部に文様	
			Ⅱ．地文のみ	
深鉢G類	頸部まるくくびれ、口縁部外反	GⅠ．胴部張る		
		GⅡ．〃 膨む	a．文様をもつ	
			b．地文のみ	
深鉢H類	頸部「く」字状にくびれ、口縁部外反・外傾胴上部内弯	HⅠ．口縁部内弯気味に外傾、端部肥厚		
		HⅡ．口縁端部肥厚して段・角がつく	a．縦長単位文様 (Ⅰ) 楕円・対称弧状文、連結渦文 (Ⅱ) 蕨手類似文 (Ⅲ) 蕨手文	
			b．横位展開文様 (Ⅰ) 楕円渦入菱形文、楕円文 (Ⅱ) 入組渦文 (Ⅲ) 渦付三角文 (Ⅳ) 流水状文	
			c．多条沈線文様 (1) 縦長単位文様 (2) 横位展開文様	
		HⅢ．波状口縁		
深鉢I類	頸部「く」字状にくびれ、口縁部短く外傾、胴上部内弯			
深鉢J類	胴上部から口縁部内弯		a．1・2条沈線文様	
			b．多条沈線文様	
深鉢K類	口縁部内反気味、頸部に稜、胴部直線的外傾		Ⅰ．文様をもつ	a．胴部隆線文様
				b．〃 沈線文様
			Ⅱ．地文のみ	
深鉢L類	口縁部内傾、胴部直線的に外傾			

深鉢の分類基準②

深鉢M類	口縁部・胴部が直線的に外傾		Ⅰ．口縁部から胴部に文様	a．縦長単位文様	
				b．横位展開文様	
				c．多条沈線文様	(1) 縦長単位文様
					(2) 下垂線区画文様
			Ⅱ．胴部に文様、縦長単位文様 (i) 楕円文 (ii) 蕨手類似文、鉤状文 (iii) 蕨手文 (iv) 平行線文、破線文、ジグザグ文		
深鉢N類	口縁部から胴上部直線的に外傾、頸部閉状隆線				
深鉢O類	口縁部・胴部わずかな膨みをもって立ち上がる				
		OⅠ．平口縁	口縁部から胴部上半に文様		
		OⅡ．平口縁	胴部上半に文様	a．方形区画文	
				b．「c」字・斜行線文	
		OⅢ．平口縁	胴部全体に文様	a．横位連結文様	
				b．縦長単位文様	1．上下連結文様
					2．上部肥大文様 (i) 円・半円・楕円・「U」字状文 (ii) 蕨手類似文、鉤状文 (iii) 蕨手文
					3．単純下垂文様
				c．幅広単位文様	
				d．多条沈線文様 (1) 縦長単位文様 (2) 横位展開文様	
		OⅣ．平口縁	口縁部に文様	a．口縁部全体に文様	
				b．口縁部突起下に曲線文様	
				c．口縁一部に単純下垂文様	
		OⅤ．平口縁	地文のみ	a．頸部に区画線	
				b．区画線なし	
		OⅥ．波状口縁			

口縁部は突起下部を除いて無文である。胴部に文様がみられ、一部連鎖状の隆線と沈線、磨消縄文技法等によって、横に連結される「C」字状文から懸垂文が下る文様が４単位描かれている。磨消縄文技法には縄文を隆線・沈線以前に施して後に磨り消すもの（以下「磨り消し」と言う）と、隆線、沈線を施してあるから充塡するもの（以下「充塡」と言う）との二者がある。地文（縄文）は斜行縄文（ＬＲ）である。

B類：胴上部が張って口縁部が外傾・外反する器形である。破片資料だけのため、胴下部の形態は不明である。胴上部の張りが強く、口縁部が短いＢⅠ類と張りが弱く口縁部の長いＢⅡ類とがある。

ＢⅠ・ＢⅡ類とも胴上部に文様がみられ、粘土を一方に盛り上げる連続刺突文が施され、その上下端を隆線で画するものもある。口縁部と胴下部は無文で、地文は認められない。

C類：胴部中央に稜がつき、稜以上が外反気味に立ち上がり、稜以下は直線的あるいは反り気味に外傾する器形である。口縁部に低い山形突起が付く。

胴上半の稜から上に文様がみられる。上端の沈線、下端の隆沈線と下垂する連鎖状隆線とによって４単位の方形区画文を構成し、区画内には連鎖状隆線を中心とした対称弧状文、あるいは区画中央にクサビ状文、平行線文、蕨手状文、ジグザグ文などが沈線で描かれている。ジグザグ文以外は磨消縄文（磨り消し）技法が用いられている。口縁部は大部分が無文で、突起下にだけボタン状隆線などが施される。胴下部は地文がみられる。地文（縄文）は斜行縄文(ＬＲ)である。

D類：胴部中央がくびれてそれ以上が外反し、胴下部が張り出す器形である。胴部に文様をもつＤⅠ類と口縁部から胴部に連続した文様をもつＢⅡ類と口縁端部に文様をもつBⅢ類とに分かれる。ＢⅠ・Ⅱ・Ⅲ類では口縁端部の形態にも多少の違いが認められる。

ＤⅠ類―口縁端部が肥厚して段がつくものや、単に丸くおさまるもの、角ばるものなどがみられる。山形の突起がつく。口縁部は突起部を除き無文である。胴部文様には次の４種類がある。

ＤⅠａ類　方形区画文　―沈線と隆線、地文の縄文は撚糸文(Ｒ)。
ＤⅠｂ類　「X」・「Y」・「V」字状文―沈線、磨消縄文(充塡)、まれに刺突充塡。
ＤⅠｃ類　三角懸垂文　―沈線､磨消縄文(充塡)。「Ｓ」字連鎖文を充塡。
ＤⅠｄ類　渦文　―沈線、磨消縄文(充塡)。単位全体は不明。

ＤⅠ類の文様単位数はＤⅠａ・ＤⅠｂ類が４単位、他は不明である。

ＤⅡ類―口縁端部が肥厚して段がつき、外面に凹み状の沈線や刻目などの装飾が施され、窓の開いた頂部の丸い突起が付く。文様は２条の沈線によって描かれるもの(ＤⅡａ類)と多条沈線によるもの(ＤⅡｂ類)とがある。

ＤⅡａ類　下垂線区画の間に矢羽根状文と渦文が交互に配されるものや、楕円状の文様が入れられるものがある。前者に地文はみられず、後者は磨消縄文（充塡）技法を用いている。

ＤⅡｂ類　下垂線区画の間に連続弧状文、斜行線などが充塡され、部分的に方向の異る沈線が接続して三角文や多角形を成すことがある。多くは縄文を地文として描かれ、まれに磨消縄文（充塡）技法の用いられるものがみられる。また下垂区画線内に刻目状の刺突や、刻目の付いた隆線が加わるものもある。

ＤⅡ類の文様単位数は４・８単位がみられる。

DⅢ類―口縁端部が内傾し、刺突文が施され、口縁・胴部は地文（縄文）である。

D類の地文（縄文）は斜行縄文でＬＲが圧倒的に多く、ＲＬはごく少い。

E類：胴部は脹みをもって立ち上がり、胴上部から口縁部にかけて内傾し、口縁端部で水平に外側へ折れ曲がる器形である。突起と一体になった橋状把手がつく。

文様が施される部位は口縁部と胴部、胴部だけという違いがみられるが、個体数がごく少いため細分は行わない。胴部文様は単位が不明確であるが、「∪」字状文と思われるものがある。いずれも沈線で描かれ、磨消縄文（充塡）を用いており、縄文は斜行縄文ＬＲとＲＬがある。

F類：頚部に稜がつき、口縁部がくびれて外反する器形である。胴部はわずかに脹みをもつ。口縁部に文様が施されるＦＩ類と、文様のみられないＦⅡ類とに分かれる。

ＦＩ類―4 個の山形突起がつき、突起下の口縁部にボタン状隆線と沈線の加えられた隆線によって「Ｊ」字状文が４ヶ所に施文され、頚部に連鎖状隆線が巡る。「Ｊ」字状文を除き口縁部は無文であり、胴部に地文（縄文）が施される。縄文は斜行縄文（ＬＲ）である。

ＦⅡ類―大小の突起が交互に４個付き、大きな突起には窓が開いて頂部に斜めの沈線が入り、その下に橋状把手がつく。

口縁部は無文、胴部は地文（縄文）で、頚部に隆線が巡る。縄文は斜行縄文（ＲＬ）である。

G類：頚部がまるくくびれて口縁部が外反する器形である。胴部が張るＧＩ類と、脹む程度のＧⅡ類とに分かれる。

ＧＩ類―山形小突起がつく。口縁部は無文で、胴部にボタン状隆線や円文を基点として連結文様が描かれる。文様単位が判明したものは、沈線による渦文、「Ｃ」字文からボタン状隆線を介して沈線が下垂する連結文様で、磨消縄文（磨り消し）技法を用いている。また小破片では頚部を刺突の加えられた隆線で画するものがある。

ＧⅡ類―文様をもつもの（ＧⅡａ類）と地文のみ（ＧⅡｂ類）とがある。

ＧⅡａ類　窓が開いてねじれた突起と橋状把手がついて、口縁部から胴部にかけて連続「Ｓ」字をはさんだ平行隆線文と「Ｓ」字状平行隆線文がみられ、胴部には磨消縄文（磨り消し）が用いられるものと、窓の開いた楕円文が連なるつり手がついて口縁部無文・胴部に渦状沈線文が磨消縄文（充塡）技法によって描かれたものとがある。

ＧⅡｂ類　低い山形突起のつくものが多い。頚部が隆線や沈線で画され、口縁部が無文で胴部が地文（縄文）である。縄文は斜行縄文でＬＲが多いが、ＬＲＬもみられる。

H類：頚部が「く」字状にくびれて口縁部が外反・外傾し、胴上部が内弯する器形である。口縁部の形態によってＨＩ・ＨⅡ・ＨⅢ類に分かれる。

ＨＩ類―口縁部が内弯気味に外傾し、端部内側が肥厚するものである。高い突起のつくものがある。

口縁部は無文で、胴部に「Ｙ」字状文が沈線で描かれ、磨消縄文（充塡）技法が用いられる場合と刺突が充塡されるものとがある。縄文は斜行縄文（ＬＲ）と撚糸文（Ｌ）がみられる。

以下のＨⅡ・HⅢ類より小形である。

ＨⅡ類―口縁端部が肥厚して段や角がつくものである。突起のつくことが多い。その形態は頂部のまるいもの、丸い大小対をなすもの、頂部の凹みが一方に下るもの、幅の広い台形のものなど多様であり、窓・沈線・盲孔などによる装飾が加えられる。台形の突起は以下のＨⅡｃ類に、他はＨⅡａ・ＨⅡｂ類にそれぞれ認められる。また突起間を結ぶように口縁端部には沈線や刻目が施されるものもあり、その下の口縁部には下垂・弧状隆線文・方形沈線文、下垂平行沈線文等がみられ、このほか文様のない場合を含めて大半は地文が施されないが、方形沈線文には地文のみられるものが少量ある。隆線文には刺突が加わった連鎖状や、刻目の施されることがある。

このＨⅡ類は胴部文様の種類によって次の３つに分かれる。

ＨⅡａ類　縦長の単位が並列する文様である。(ⅰ)楕円文、対称弧状文、(ⅱ)蕨類似文、(ⅲ)蕨手文などが沈線で描かれ、楕円文には横に連絡されるもの、上下に連続するものがある。磨消縄文(磨り消し)技法が用いられる。

ＨⅡｂ類　横位に展開する文様である。(ⅰ)楕円・渦入入菱形文、楕円文、(ⅱ)入組渦文、(ⅲ)渦付三角文、(ⅳ)流水状文などが沈線で描かれる。磨消縄文技法が用いられ、「磨り消し」が多く、「充塡」はまれである。前者の場合には磨り消しが不完全で縄文が部分的に残されるものも多い。

ＨⅡｃ類　多条沈線で文様が描かれるものを一括した。文様単位は２種みられる。

文様１　円・半円から弧状文が下垂する縦長単位文様である。

文様２　入組渦文、連絡渦文などのような横位展開文様である。

文様１・２はいずれも縄文を地文としており、文様２ではまれに磨消縄文（充塡）技法を用いることがある。

ＨⅡ類の文様単位数は、ＨⅡａ類が６・８単位、ＨⅡｂ類が３・４・６単位、ＨⅡｃ類が４・８単位で、口縁部突起もこれと同数あるいはその半数に対応する。また地文の縄文は斜行縄文・ＬＲが大半で、同ＲＬ、撚糸文（ＬＲ）はごく少い。

HⅢ類―波状の口縁である。口縁部が内弯気味になる。口縁部は無文で、胴部に隆線による楕円文が重層・連続して施され、楕円の中に連続刺突文と部分的に細かな縄文が充塡される。

Ｉ類：頚部が「く」字状にくびれて口縁部が短く外傾し、胴上部は内弯する器形である。口縁部が短い点を除けばH類にほぼ相似する。幅の広い台形状や、窓の開いた耳状の突起がつく。口縁部に沈線や、刺突の入った平行沈線文などがみられ、胴部には多条沈線で縦長単位が並列する円・半円弧状文が８単位描かれ、地文は斜行縄文（ＬＲ）である。

Ｊ類：胴上部から口縁部にかけて内弯する器形である。器形の特徴はＨⅡ類の胴部に似てい

るが、内弯の度合がそれらより強い。文様の違いによって２つに分かれる。

Ｊａ類―口縁部が無文で、胴部に横位転開の楕円・三角文が沈線と磨消縄文(磨り消し)技法によって描かれ、縄文は斜行縄文（ＬＲ）である。

Ｊｂ類―口縁部から胴部にかけて多条沈線による横位展開の連絡渦文が施文されている。破線文が加えられ、地文は斜行縄文（ＬＲ）である。

K類：口縁部は内反気味になり、頚部に稜がついて胴部が直線的に外傾する器形である。文様をもつＫＩ類と地文だけのＫII類とに分かれる。

ＫＩ類―頚部に隆沈線が施されることによって高い稜を成している。口縁部と胴部に文様がみられ、胴部文様が隆線によって描かれるもの（ＫＩａ類）と沈線によるもの（ＫＩｂ類）とがある。

ＫＩａ類　頂部が凹んだ筒状の突起がつき、突起下の口縁部に沈線と盲孔の加わった円形隆線がみられる。

胴部文様は単位が不明であるが頚部のボタン状隆線を基点として「〽」状の隆線文が施されている。連結文様と思われる。斜行縄文（ＬＲ）を地文としている。

ＫＩｂ類　口縁部は山形小突起がついて突起頂部と頚部のボタン状隆線を結んだ沈線の引かれた弧状隆線文が施されるものと、窓の開いた耳状の突起がついて、その下に橋状把手のみられるものとがある。

胴部文様は縦長の単位が並列する文様である。単位は沈線による「Ｔ」字・蕨手文、「Ｔ」字文、下端連絡楕円文、ジグザグ文などで、蕨手・「Ｔ」字文、楕円文は単位下端で横に連絡されており、また磨消縄文（磨り消し）技法が用いられている。縄文は斜行縄文（ＬＲ）である。文様単位数は４単位が多く、８単位もみられる。

ＫII類―頚部が屈曲することによって稜を形成している。４個の低い山形突起がつく。

口縁部は無文、胴部に地文（斜行縄文・ＬＲ）が施されている。

L類：口縁部が内傾し、胴部は直線的に外傾する器形である。頚部は隆沈線が走って稜を成すものが多い。口縁部形態を細かくみると、口縁端部に段のつくものや、肥厚して三角状のもの、丸くおさまるものとがあり、前二者は口縁部が無文で胴部に蕨手文などの磨消縄文（磨り消し）技法を用いた沈線文様が施文され、後者は口縁部に縄文を地文として方形（？）沈線文、胴部に地文がみられる、という違いがある。しかしこの類はいずれも小破片であり、なかにはＫ類との識別が難しいものも含まれているため細分は行わない。なお縄文は斜行縄文（ＬＲ）である。

M類：口縁部・胴部がほぼ直線的に外傾する器形である。口縁部から胴部にかけて文様が施

文されるＭＩ類と、口縁部は無文で胴部に文様の施されるMII類とに分かれる。

ＭＩ類―口縁端部が肥厚して内面に段を形成し、外面に沈線が走る。突起のつくものが多く、低い山形突起、台形で窓の開いたもの、頂部の丸いものなどがある。数は2・3・4個で、文様単位数に対応してその同数あるいは半数となっている。文様は次の3種類がみられる。

ＭＩａ類 縦長の単位が並列する文様である。「Y」字文、破線文、連結楕円文が交互にくり返されるものと、渦付懸垂文とがあり、沈線で描かれ、磨消縄文技法が用いられているが前者は「磨り消し」、後者は「充塡」である。また後者には口縁端部に刻目が加えられている。

ＭＩｂ類 横位に展開する文様である。単位は(ｉ)楕円・三角文、(ii)渦付三角文、(iii)連続山形文などで、沈線と磨消縄文（充塡、磨り消し）技法によって描かれている。

ＭＩｃ類 多条沈線で文様が描かれるものを一括した。

文様構成には、円・半円から弧状線が下る縦長単位を並列させるもの(文様1)と下垂線区画の間に斜行線、を入れるもの（文様2）とがある。この中には刻目のついた隆線が施されるものもある。縄文を地文としている。

ＭＩ類の文様単位数は4・6・8単位である。縄文は斜行縄文・ＬＲが多く、他に同・ＲＬや網目状撚糸文（R）もみられる。

MII類―口縁端部は内面が削がれたような三角状を呈し、内面に軽い段のつくこともある。突起をもつものが多く、頂部の凹みが一方に下るものや低い山形突起で、後者は大小対を成すものがある。

胴部文様は縦長の単位が並列する文様で、単位は(ｉ)下端で横に連絡される楕円文、(ii)蕨手類似文、鉤状文、(iii)蕨手文、(iv)平行線文破線文、ジグザグ文で、(ｉ)・(ii)・(iii)・平行線文は、磨消縄文技法を用いており、破線文、ジグザグ文は単に縄文を地文としている。異った単位が交互にくり返される個体も多い。文様単位数は4・8単位である。なお磨消縄文技法は「磨り消し」が大半を占めているが、「充塡」の場合と、地文をもたないジグザグ文が各1点認められる。

MII類の縄文は斜行縄文でＬＲとＲＬがみられ、前者が圧倒的に多い。

N類：口縁部破片1点だけであるが、他にみられない器形のため類別した。口縁部から胴上部にかけて直線的に外傾し、頸部に鍔状隆線が走る。鍔状隆線上には刻目が施され、ボタン状隆線や渦状隆線文がつく。胴部には斜行縄文（ＲＬ）を地文として沈線文が描かれている。

0類：口縁部・胴部がわずかに脹みをもって立ち上がる。大きな屈曲の認められない単純な器であり、胴部中位から口縁部にかけてほぼ直立する。また4個の突起のつくものが多く、その大半が低い山形突起である。

0類は口縁部形態と文様の施文される部位の違いによって以下の6類（Ｉ～VI類）に細分さ

れる。Ⅰ～Ⅴ類は平口縁で、Ⅵ類だけが波状口縁である。

0Ⅰ類―口縁部から胴部上半にかけて文様が施文されるものである。

隆線あるいは隆線と沈線によって方形区画文が描かれている。前者は斜行縄文(ＬＲ)、網目状撚糸文（R）を地文としており、隆線上に刺突が加えられ、山形突起から下垂する隆線と胴中位の横位隆線によって4単位の区画がなされている。胴下部は無文である。後者は口縁部にも横位区画線が施され、4単位の方形区画内にさらに2単位づつ方形沈線文を入れ、磨消縄文（充塡）技法を用いている。胴下部には地文（縄文）が施され、縄文は斜行縄文（ＲＬ）である。0Ⅰ類は他の0Ⅱ～0Ⅳ類より小形である。

0Ⅱ類―口縁部は無文で胴部上半に文様をもつものである。文様の種類によって 2 つに分かれる。

0Ⅱａ類 隆線、隆沈線によって方形区画文が描かれるが、0Ⅰ類の文様とは異って方形文が並列しており、文様間の上部に渦文が施されるものもある。またこの類につく突起は0類では特異な形態であり、頂部の丸い山形突起や横「8」字状にねじれたもの、二又に分かれた橋状把手と一体化した三角形の突起などが認められる。

0Ⅱｂ類 頚部と胴部中位を隆線で区画し、その間に「C」字文と斜行平行線文が沈線と磨消縄文技法によって描かれている。沈線は3条単位である。胴部下半には地文（縄文）がみられる。

0Ⅱ類の磨消縄文技法には「充塡」と「磨り消し」の両者があり、縄文は斜行縄文のＬＲ・ＲＬで前者が多い。なお 0Ⅱａ類と思われる胴部破片には方形区画内に斜行線や襷文が沈線で施されているものもある。

0Ⅲ類―胴部のほぼ全体に文様をもつものである。まれに胴下半にまで文様が及ばない場合でも 0Ⅱ類のような横位の区画線は認められない。口縁部には突起下に限って隆線文や沈線文のつくものが多い。

0Ⅲ類は胴部文様の種類によってさらに 3 類に分かれる。いずれも沈線によって描かれている。

0Ⅲａ類 横位に連結される文様である。「J」字文を中心に斜行・平行沈線が盲孔やボタン状隆線を介して連結する。沈線が3条になる部分のある点が特徴的である。磨消縄文（磨り消し）技法を用いている。またこの類の口縁部には沈線の加えられた隆線によってボタン状隆線を基点とする「C」字文が施文され、頚部に隆線が巡る。なお同類はいずれも胴下半部を欠く破片であり、文様構成は 0Ⅱｂ類との共通点も持っている。したがって本来は0Ⅱb 類に含まれるべき土器である可能性が残る。

0IIIｂ類 縦長の単位が並列する文様である。3 種類みられる。

0IIIｂ1 類はボタン状隆線を介して上下に連結される。上部は半円、三角、弧状、楕円を成し、下部は平行線かジグザグ文である。平行線の場合には連結部が広がってクサビ状になるものや、リボン状文などがみられる。上部は 3 条沈線の場合がある。磨消縄文（磨り消し）技法が用いられている。口縁部には突起頂部と頚部のボタン状隆線を結ぶ沈線入下垂・弧状隆線文が施されたり、頚部に隆線の巡るものが多い。

0IIIｂ2 類は縦位平行沈線の上部が肥大して(ｉ)半円・楕円・「U」字状文、(ii)蕨手類似文、鉤状文、(iii)蕨手文などになる。

0IIIｂ3 類は単に下垂する連続「S」字文、平行線文、ジグザグ文、破線文などである。

0IIIｂ2・3 類は連続「S」字文、ジグザグ文、破線文を除き磨消縄文（磨り消し）技法が用いられているが、磨り消しが不徹底なために、沈線による区画内に縄文を残すことがしばしば認められ、1 単位が全く磨り消しの施されないものもある。また例外的に条線を地文として文様が描かれ、磨消縄文技法を用いないものが 1 点ある。口縁部には下垂・弧状の隆線文や沈線文、盲孔、ボタン状隆線などがみられる。頚部は沈線や隆線で画されているが、0IIIｂ1 類と 0IIIｂ2 類の半円、楕円、「∪」字文では隆線・隆沈線が多く、中には刺突の加えられるものも認められる。そのほかはほとんどに沈線が巡る。

なお、0IIIｂ類の文様単位数は 4 あるいは 8 単位で、4 単位の場合には同一文様単位がくり返されているが、8 単位では異った単位が交互に配されることがある。その中には0IIIｂ1類や0IIIｂ2類に0IIIｂ3類と同じ単位のジグザグ文などが加わる例がみられ、それぞれ突起下には各類の基準となる文様が位置し、その中間に施される。したがって 0IIIｂ3 類に含めた土器で突起下以外の位置に文様が施文されている破片資料の場合は、必ずしも同類に属するとは限らない。

0IIIｃ類には幅広い単位の文様がみられる。楕円「T」字状文、横位弧状文、三角文、「八」字状文、方形沈線文など多様な単位があり、単位形がまとまりをもたずほぼ個体ごとに異っている。磨消縄文技法が用いられ、「磨り消し」が多く、「充塡」は少い。文様単位数は 4 単位である。

0IIIｄ類は多状沈線によって文様が描かれるものを一括した。文様の構成に 2 種類みられ、

(1)：縦長の単位が並列する円・半円・弧状文、

(2)：横位に展開する楕円・三角文である。文様単位数は4・8単位で後者が多い。大部分は縄文を地文としているが、まれに地文の施されないものがある。

0Ⅲ類の縄文は斜行縄文・ＬＲが大半で、他に同・ＲＬ・Ｒ・Ｌや撚糸文（Ｒ・Ｌ）、網目状撚糸文（Ｒ・Ｌ）もわずかに認められる。

0Ⅳ類―口縁部に文様をもち、胴部は地文だけである。口縁部文様の種類によって 3 つに分かれる。

0Ⅳａ類 口縁部全体に文様が施される。渦文を中心に長楕円文がつくもの、沈線の引かれた下垂隆線や「C」字文から横位・斜行沈線が連結されるものなどがあり、磨消縄文（磨り消し）技法を用いている。文様構成は 0Ⅲａ類の胴部文様に類似性が認められる。いずれも小破片のため土器全体の特徴は不明である。

0Ⅳｂ類 口縁部突起下に曲線文様が施される。いずれも隆線文で、沈線が加えられた「C」字文、「S」字文、「J」字文、刺突の加わった弧状文などである。頸部に隆線が巡り、刺突が施されるものもある。

0Ⅳｅ類 口縁部の一部に下垂、弧状の単純な文様が施される。隆線が用いられる。頸部に隆線、隆沈線が巡る。

0Ⅳ類の地文は斜行縄文・ＬＲが多く、他に同ＲＬ・Ｒ・Ｌ、撚糸文（Ｒ・Ｌ）、条線が認められる。

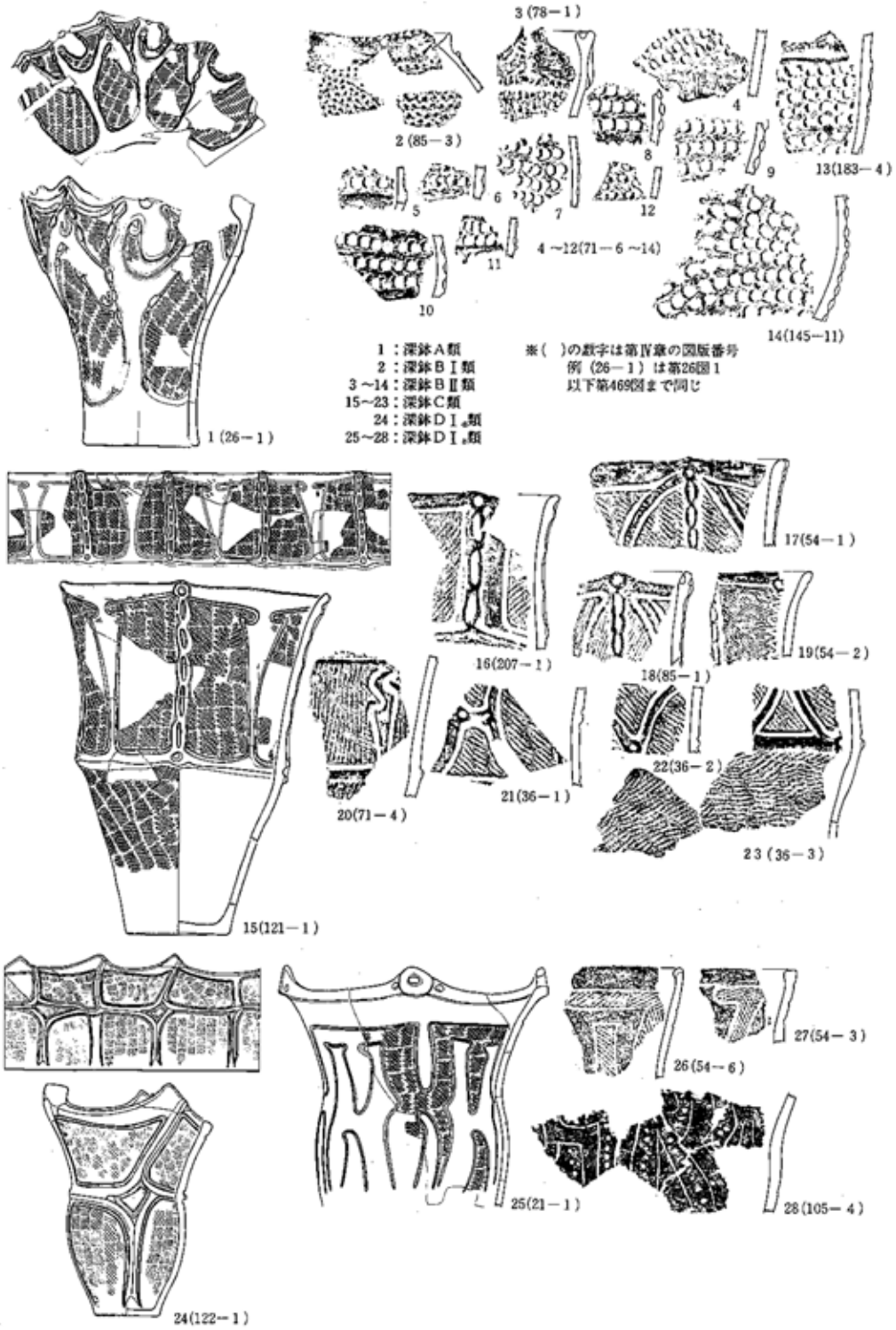
0Ｖ類―口縁部・胴部が地文あるいは無文のものである。

0Ｖａ類 頸部区画線が認められる。隆線・隆沈線・沈線・列点刺突などが用いられる。口縁部は無文・胴部地文である。

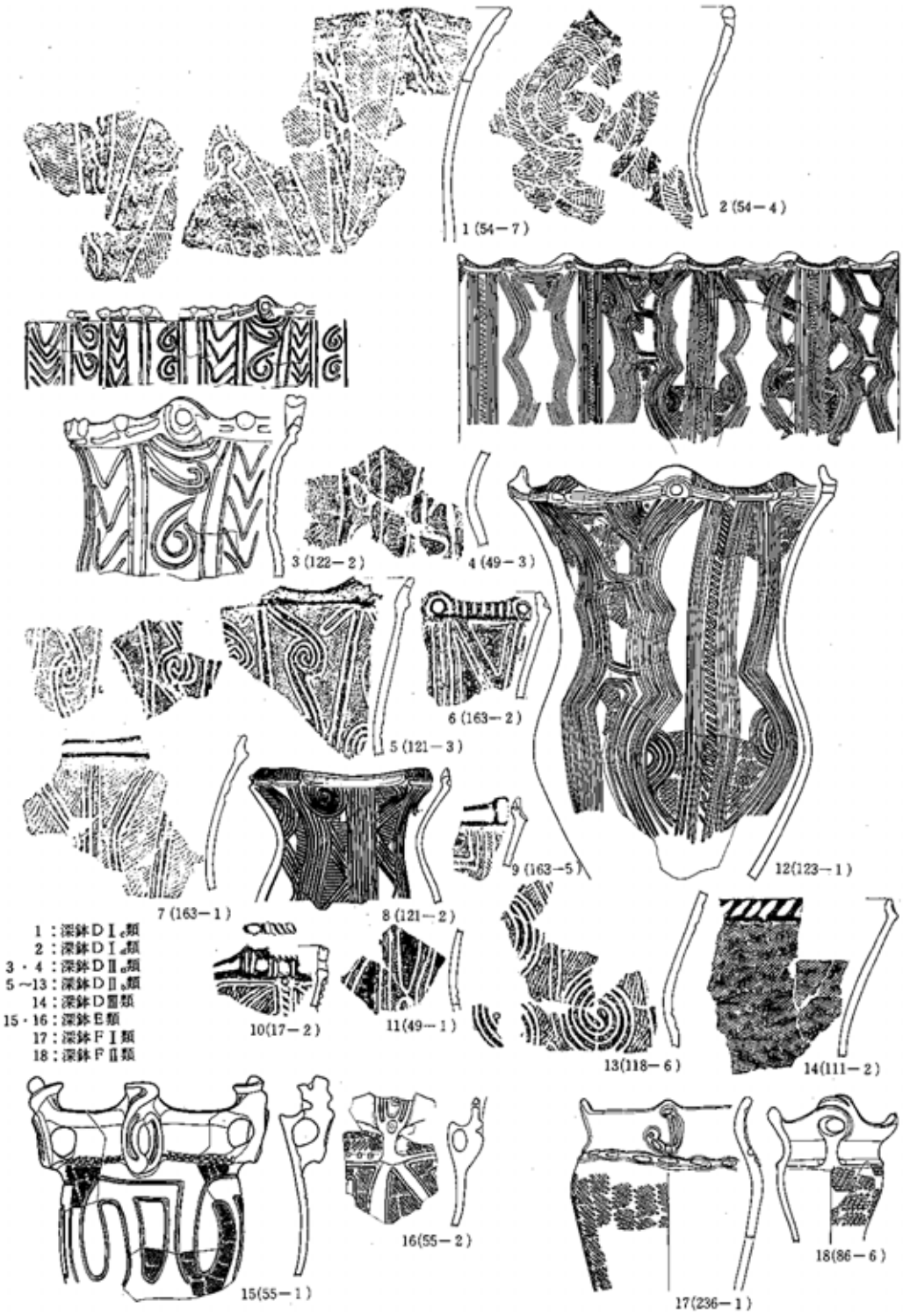
0Ｖｂ類 頸部区画線がない。口縁部が無文で胴部に地文がみられるものと、口縁・胴部が地文のものとがある。

0Ｖ類の地文は斜行縄文・ＬＲが大半で、他に同ＲＬ・Ｒ・Ｌ、撚糸文（Ｒ・Ｌ）、櫛歯状条線、条線がみられ、櫛歯状条線では斜行・下垂線が組み合ったり、連続Ｓ字状になって文様的効果を生じているものも認められる。また 0Ｖｂ類には内面に格子状沈線文の施された土器がわずかにあり、器壁が他と比較してごく厚い。

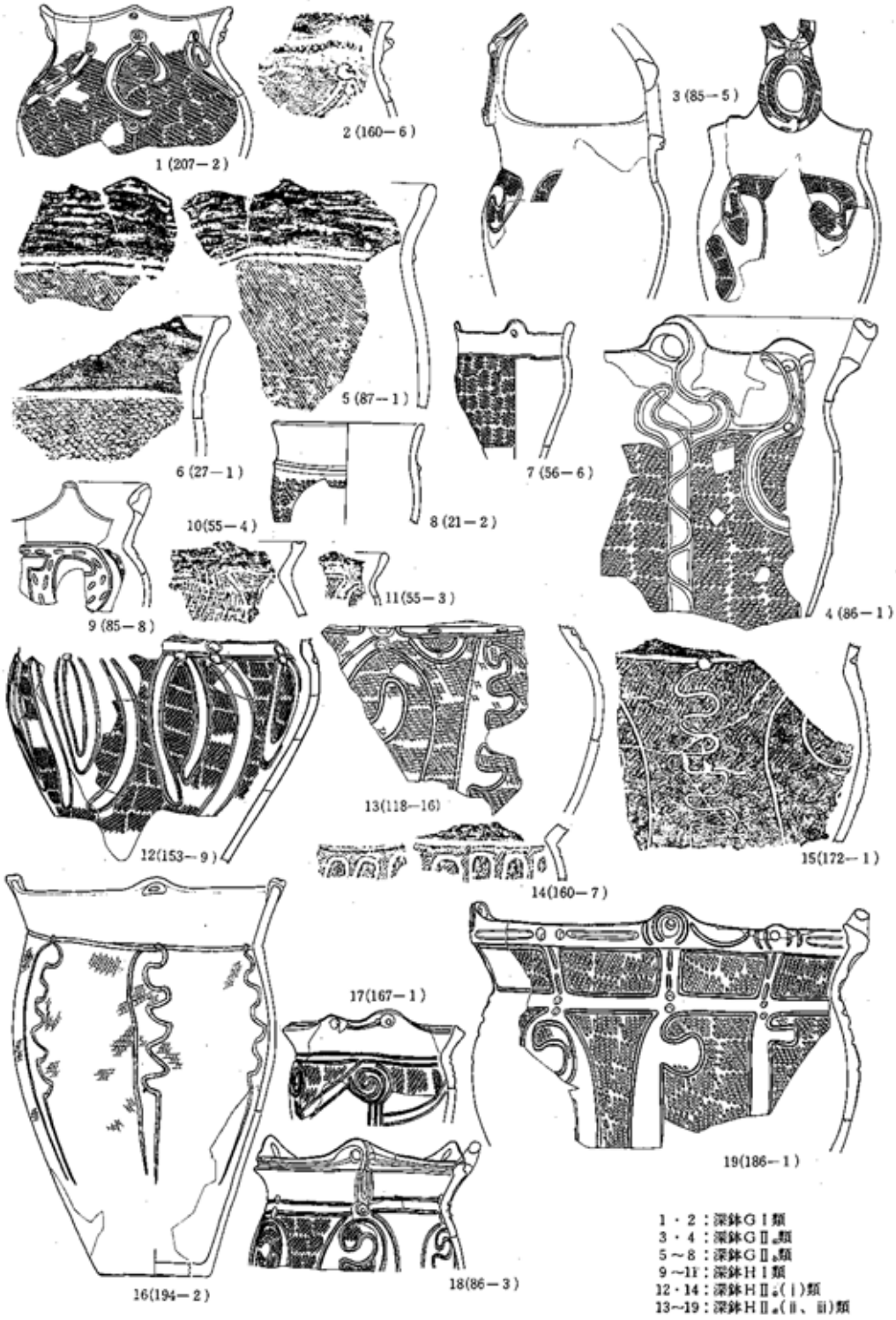
0Ⅵ類―0Ⅰ～0Ｖ類とは異って波状口縁である。胴部に刺突の入った平行沈線による連続山形文、3 条沈線による横位連結文が磨消縄文（磨り消し）を用いて描かれている。縄文は斜行縄文（ＬＲ）である。



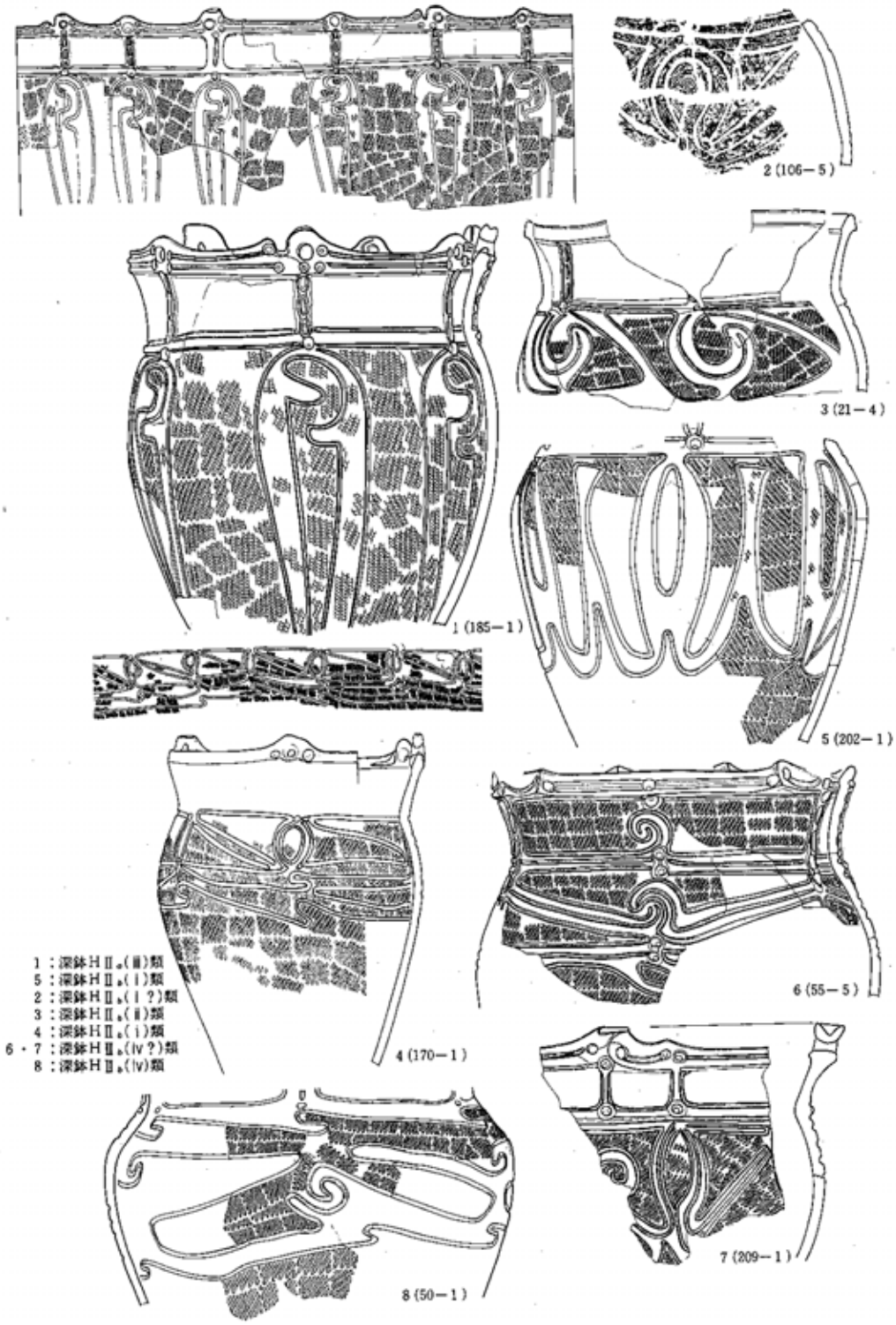
第441図　土器分類基準図（後期）



第442図　土器分類基準図（後期）

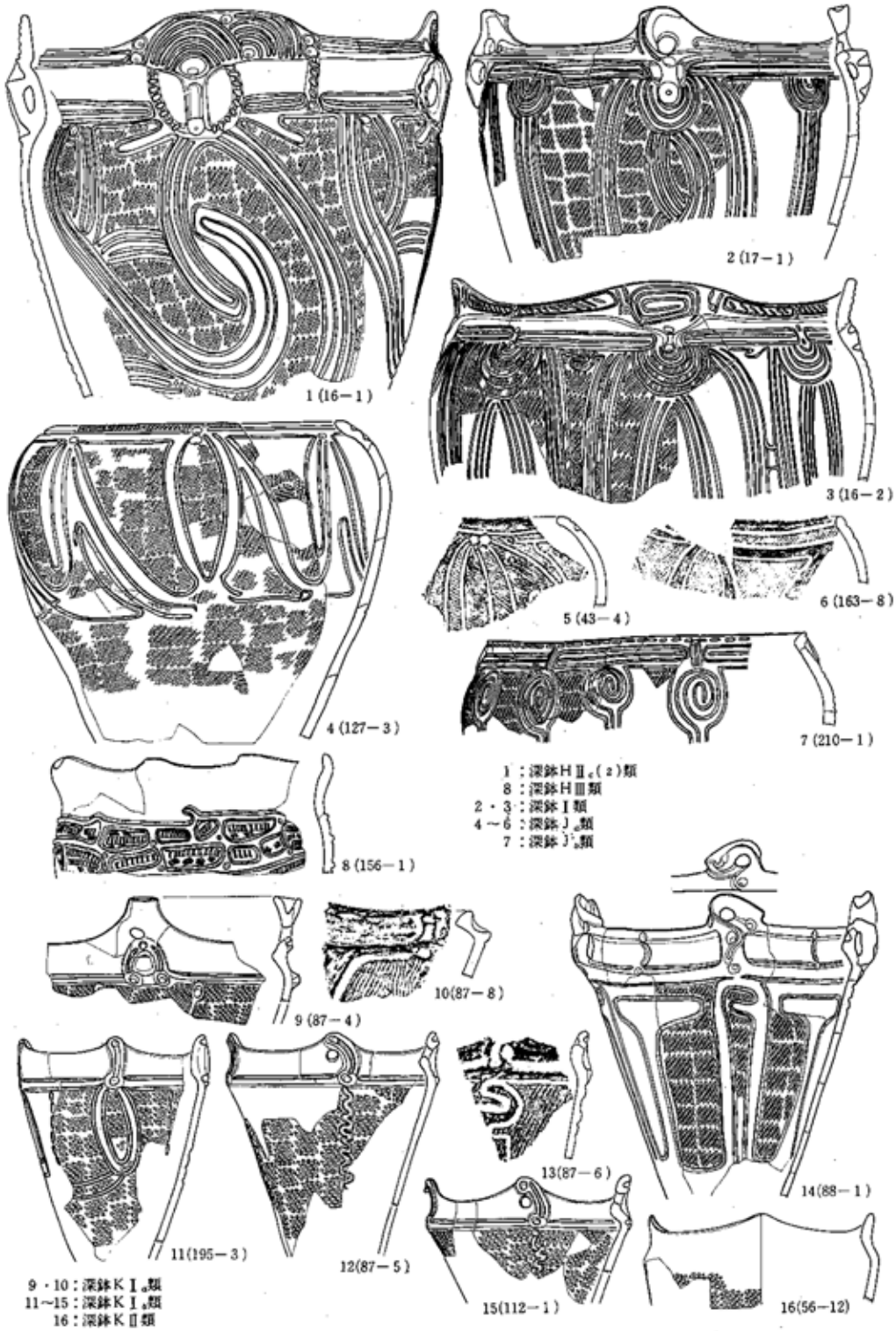


第443図　土器分類基準図（後期）

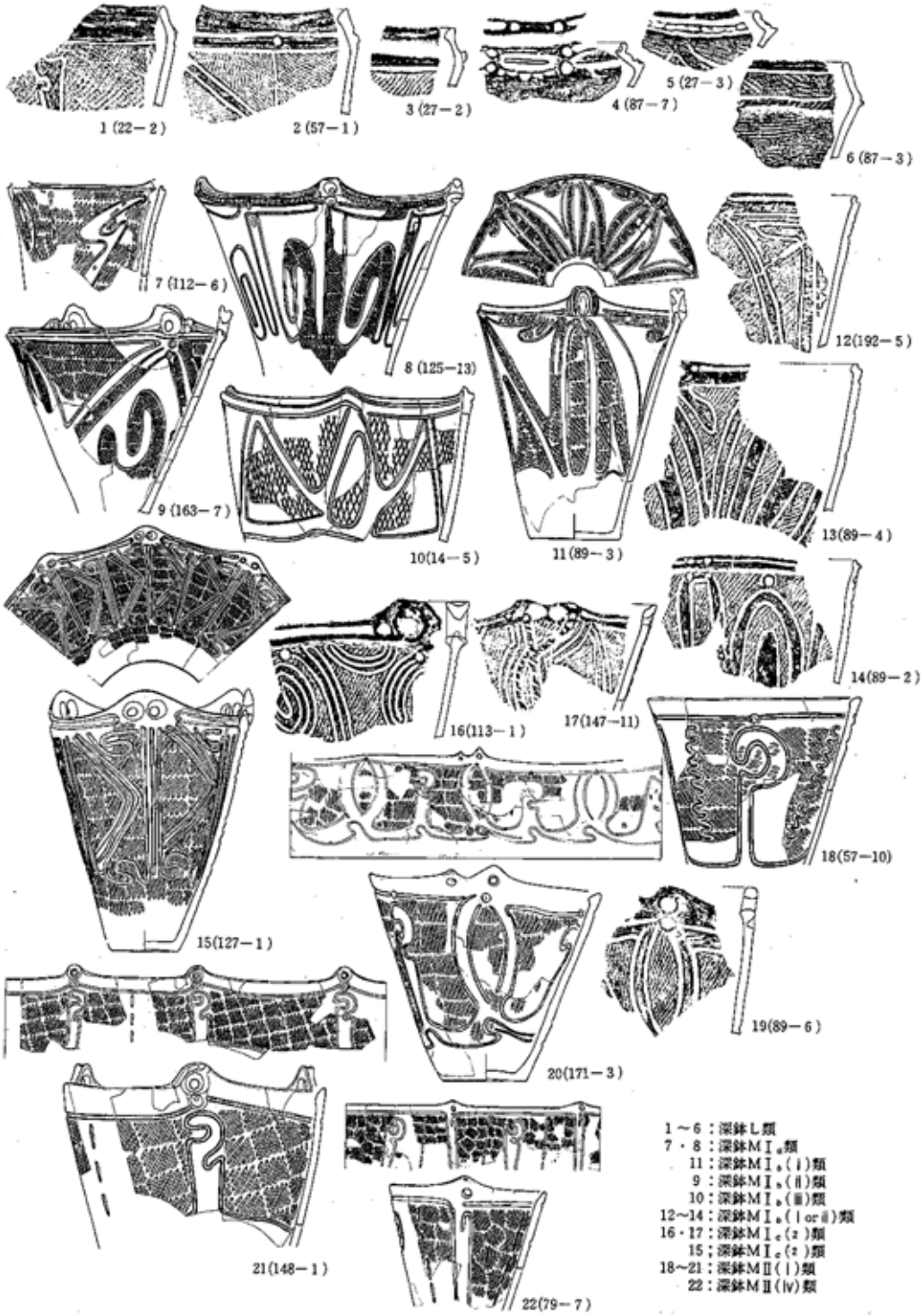


第444図　土器分類基準図（後期）

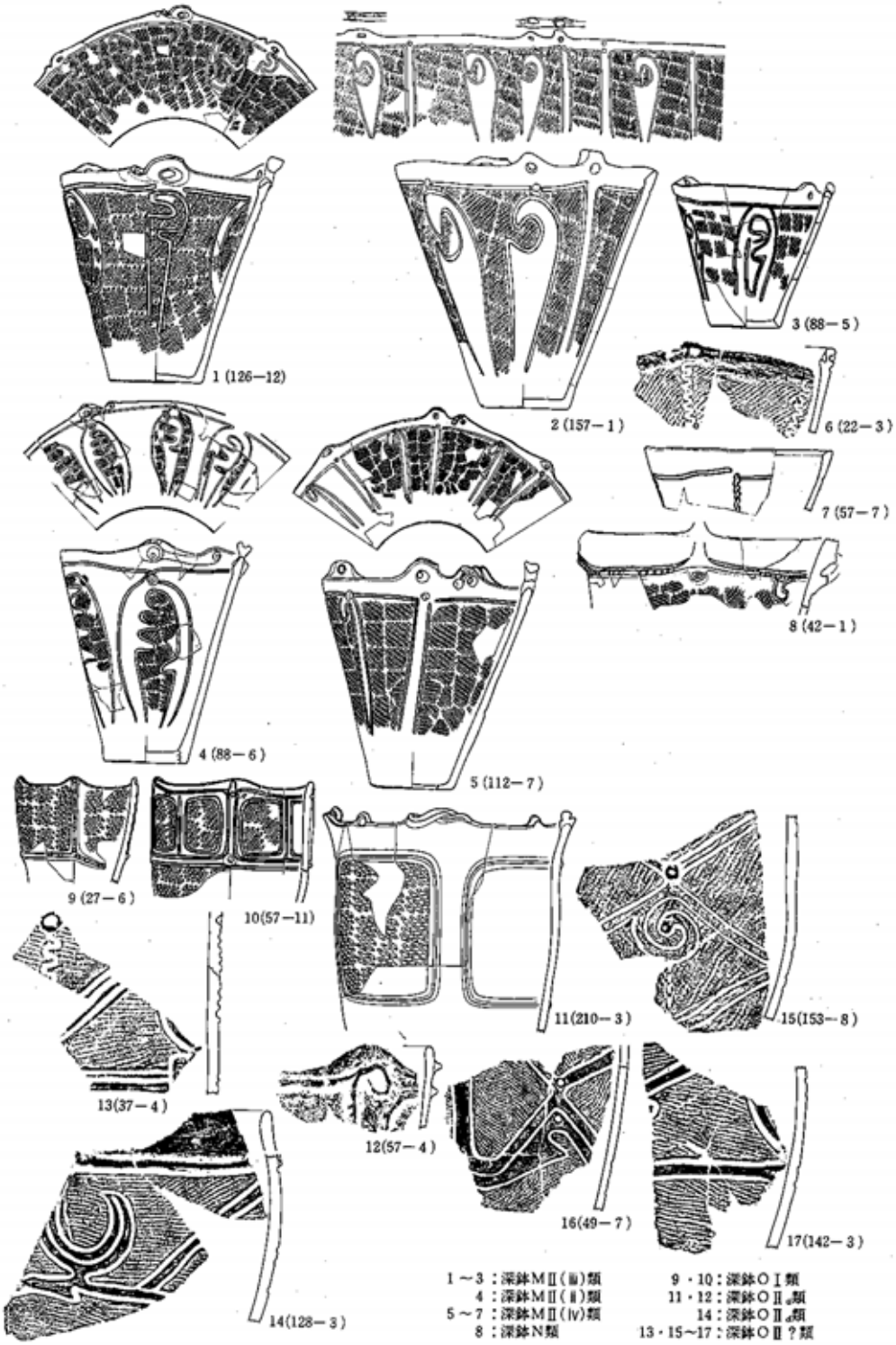
第445図　土器分類基準図（後期）



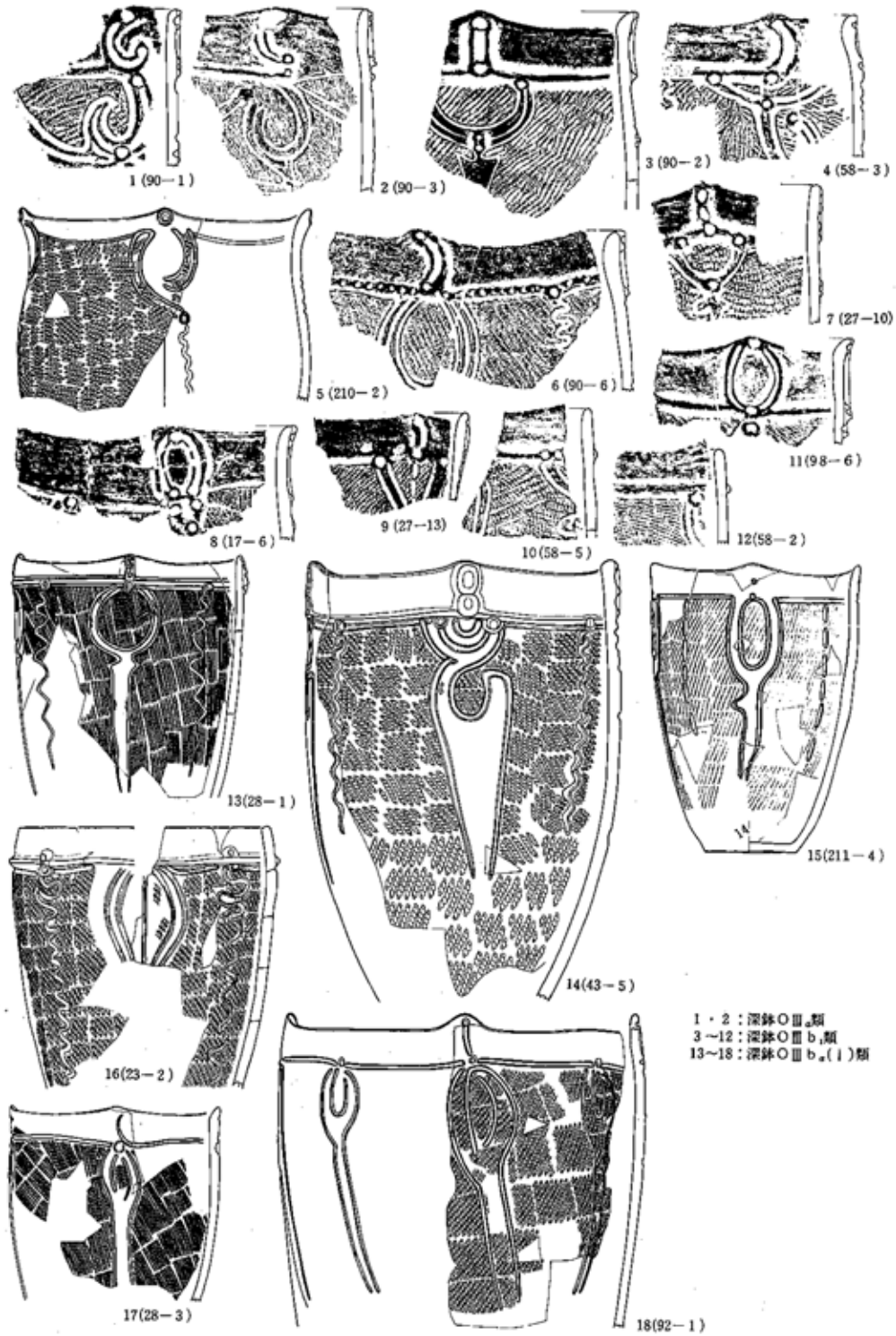
第446図　土器分類基準図（後期）



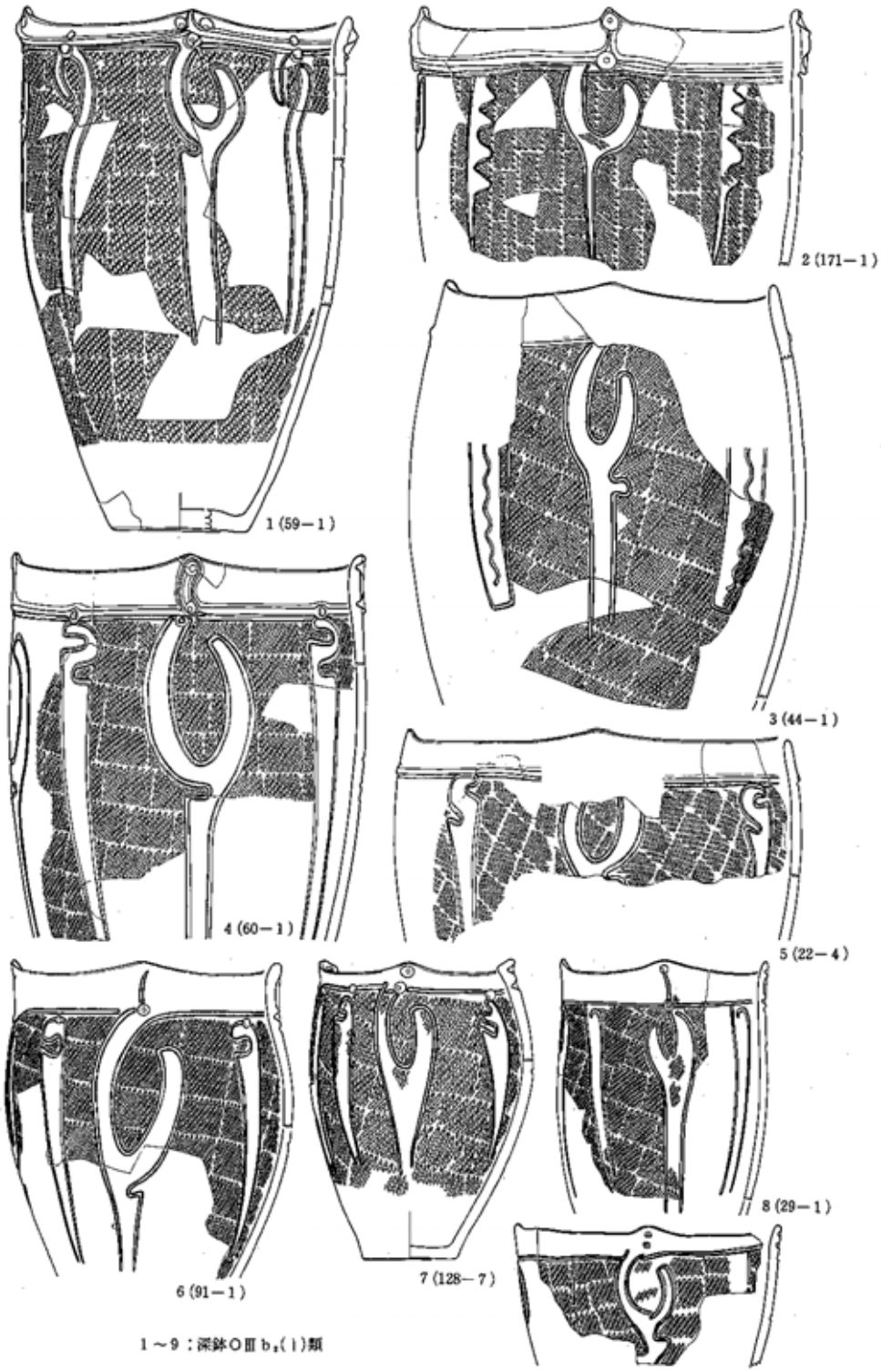
第447図　土器分類基準図（後期）



第448図　土器分類基準図（後期）

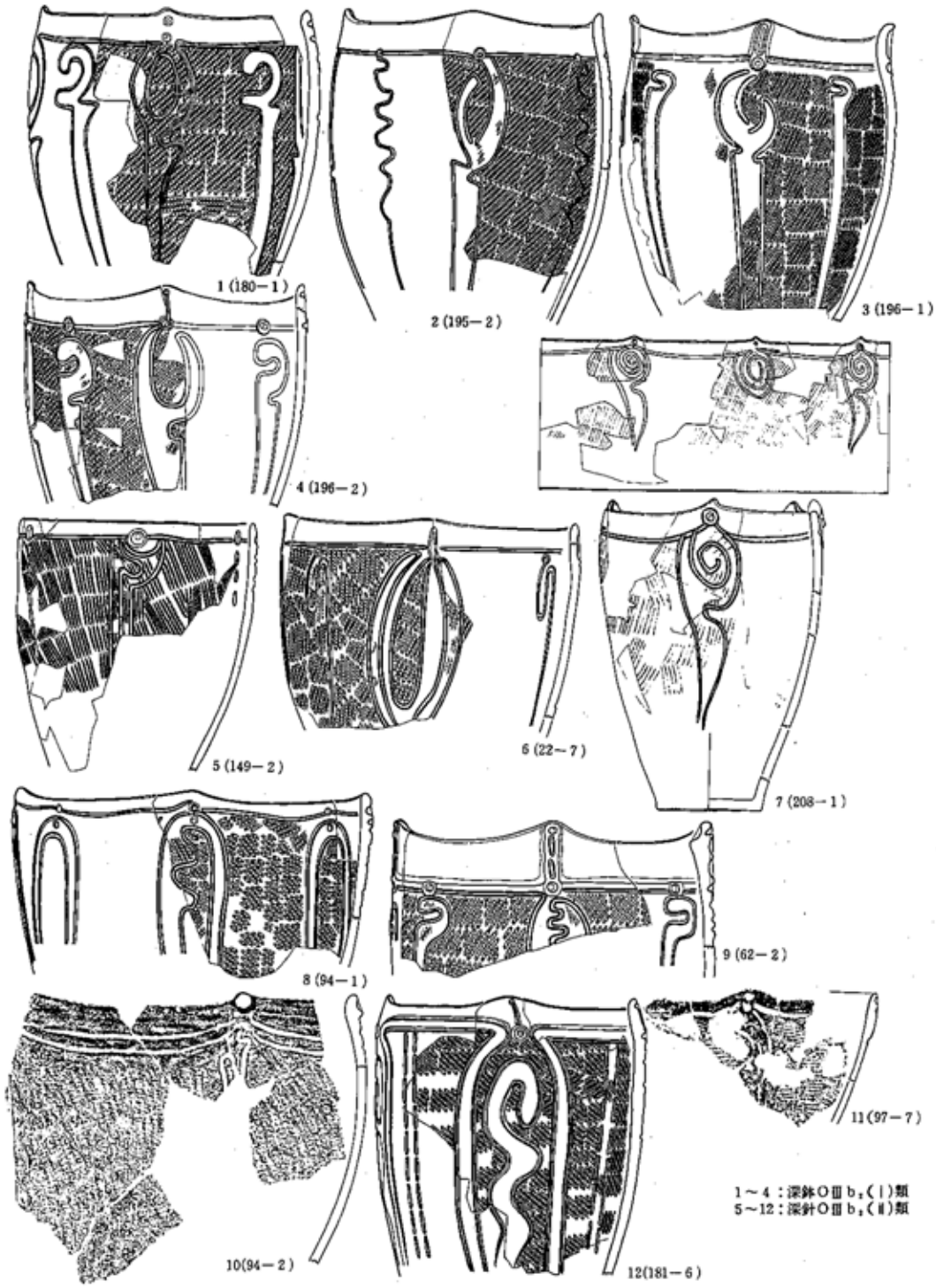


第449図　土器分類基準図（後期）

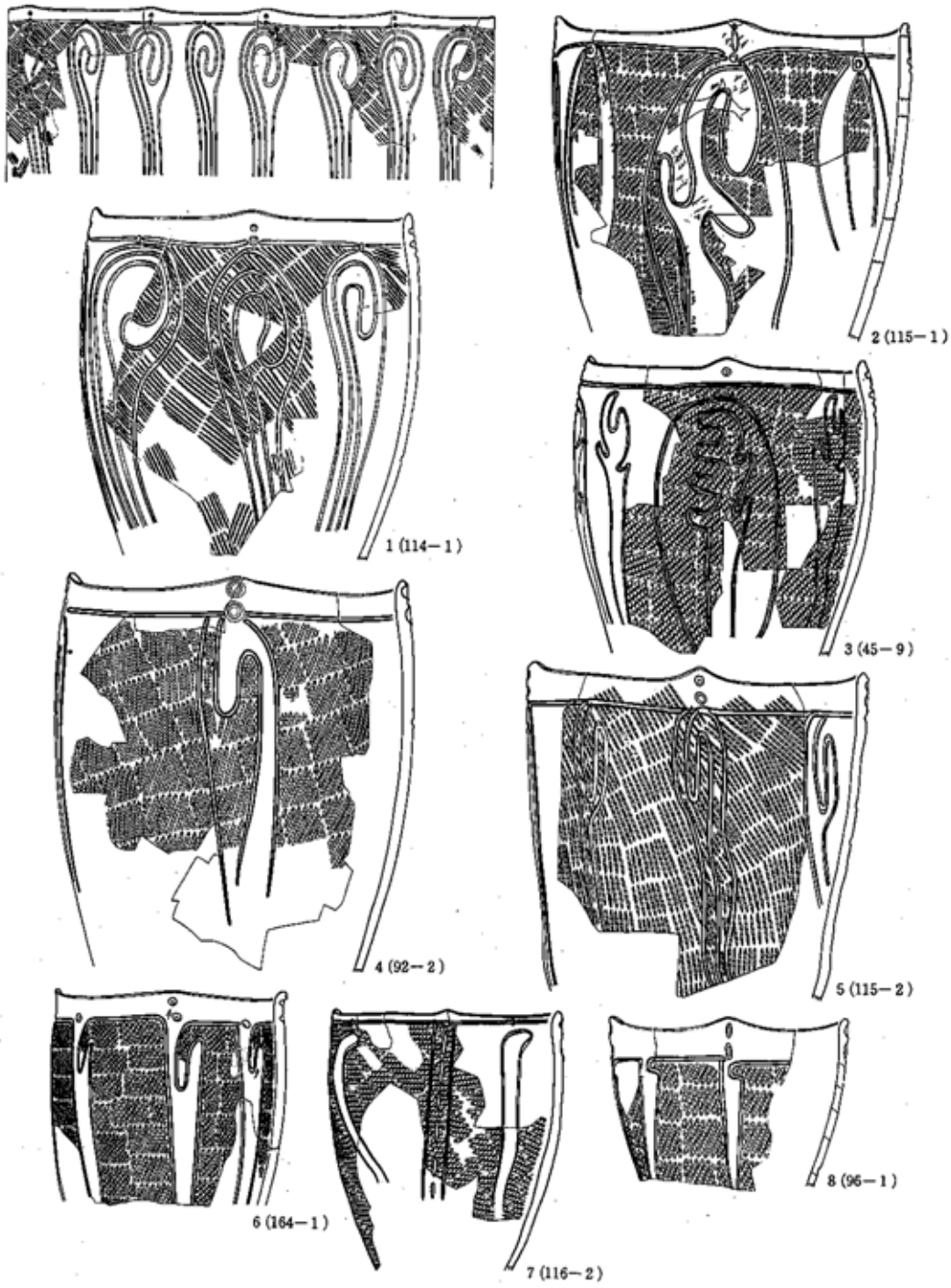


1～9：深鉢OⅢb_2(1)類

第450図　土器分類基準図（後期）

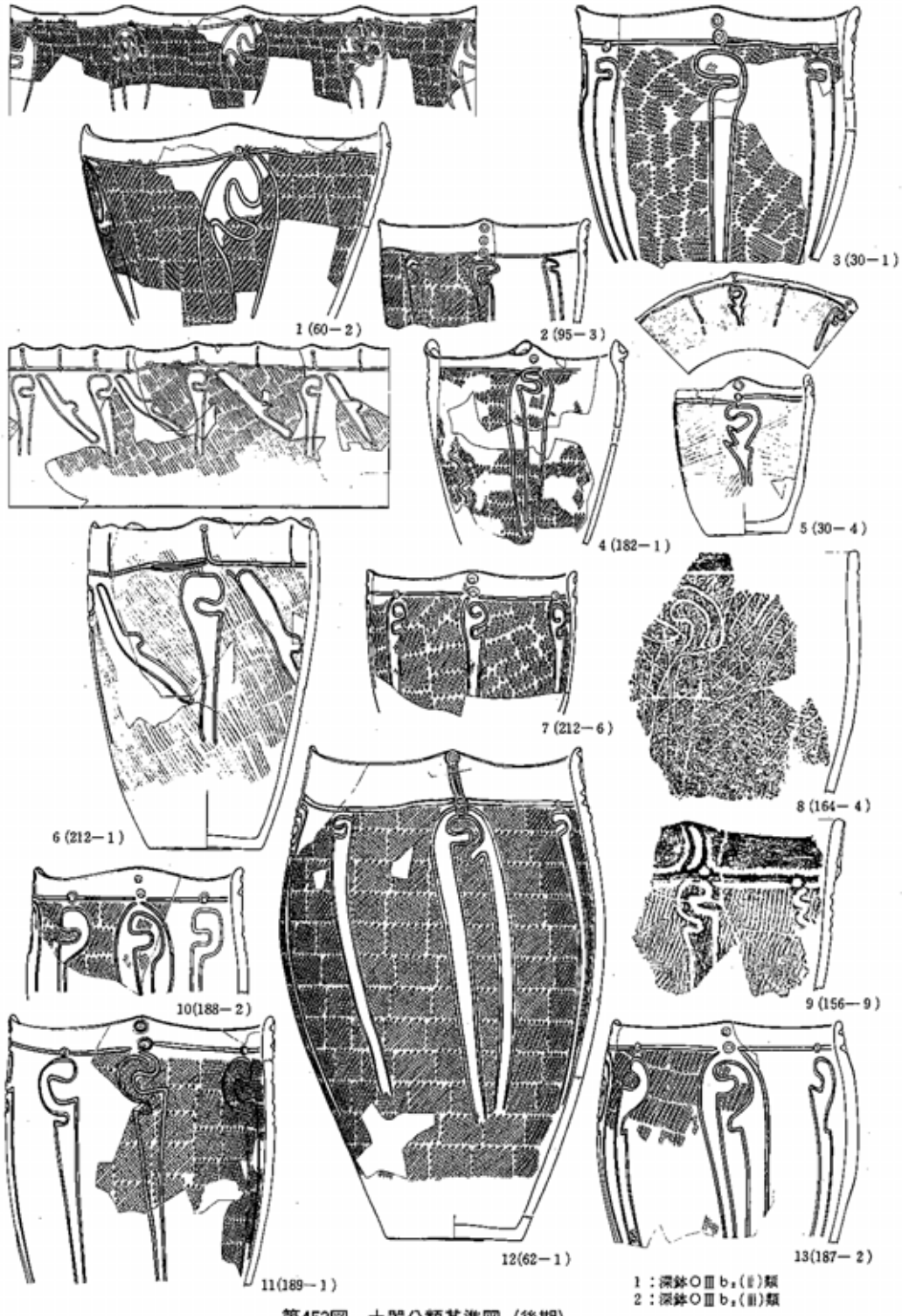


第451図　土器分類基準図（後期）

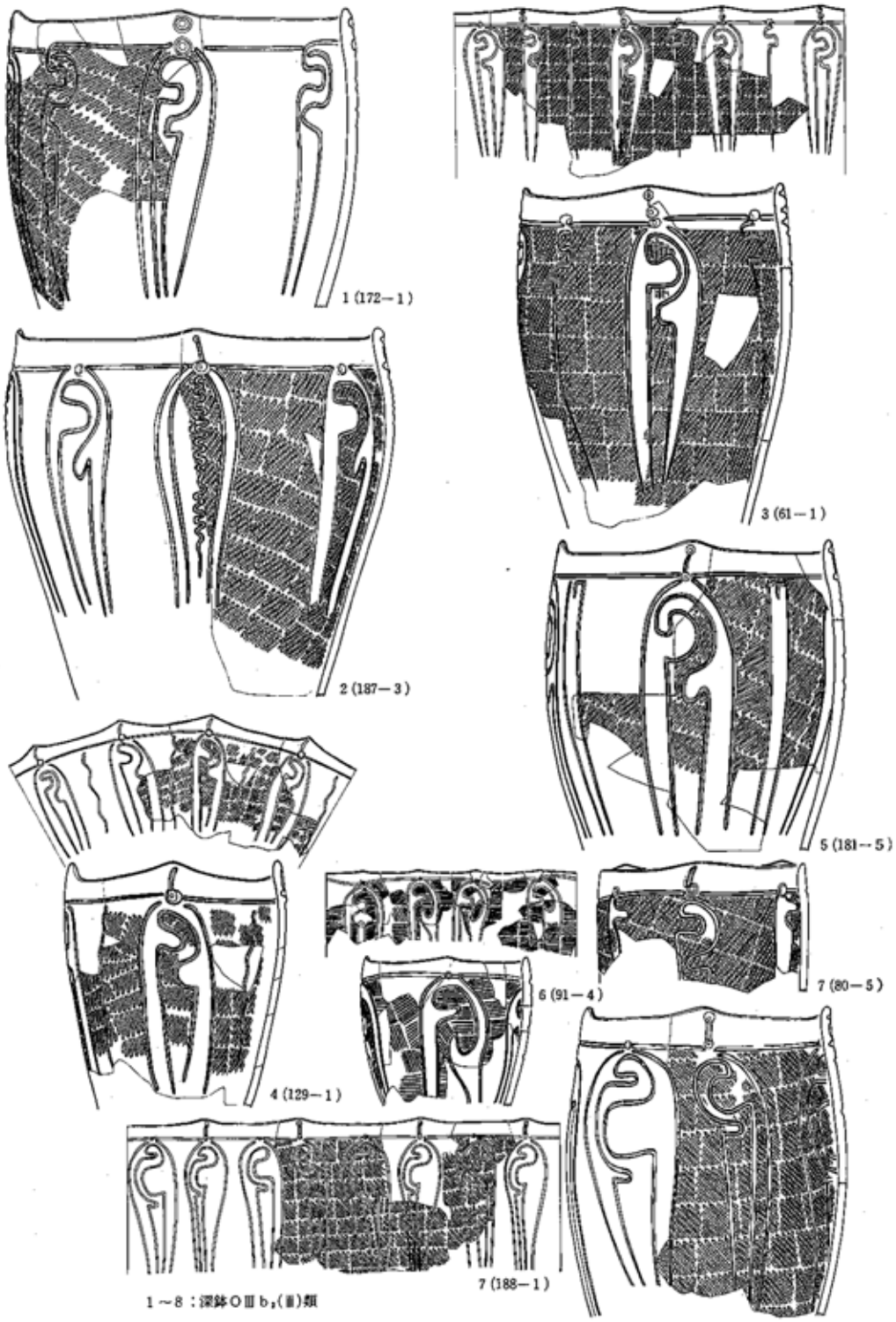


1～6・8：深鉢○Ⅲb_2(Ⅱ)
7：深鉢○Ⅲb_2類

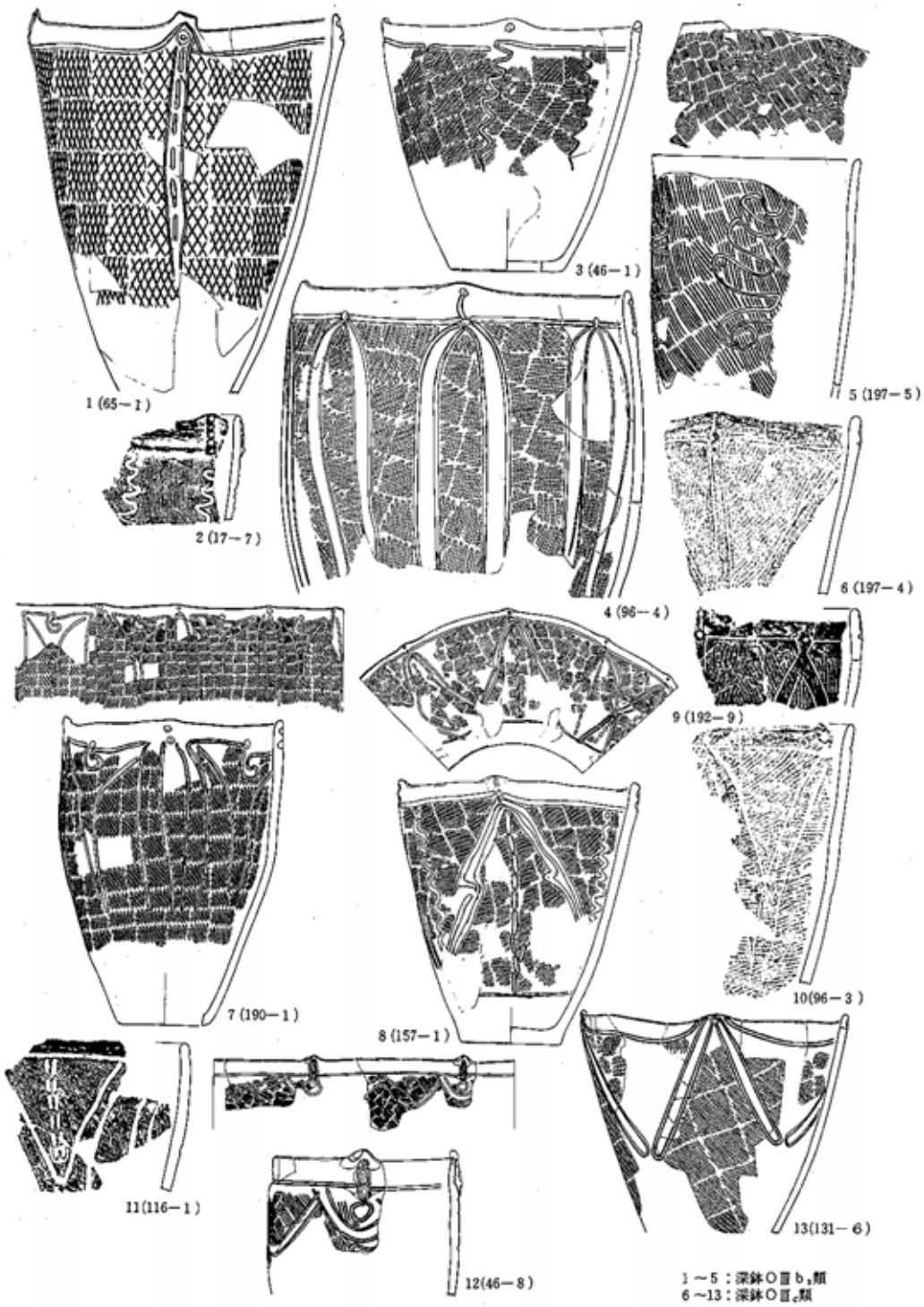
第452図　土器分類基準図（後期）



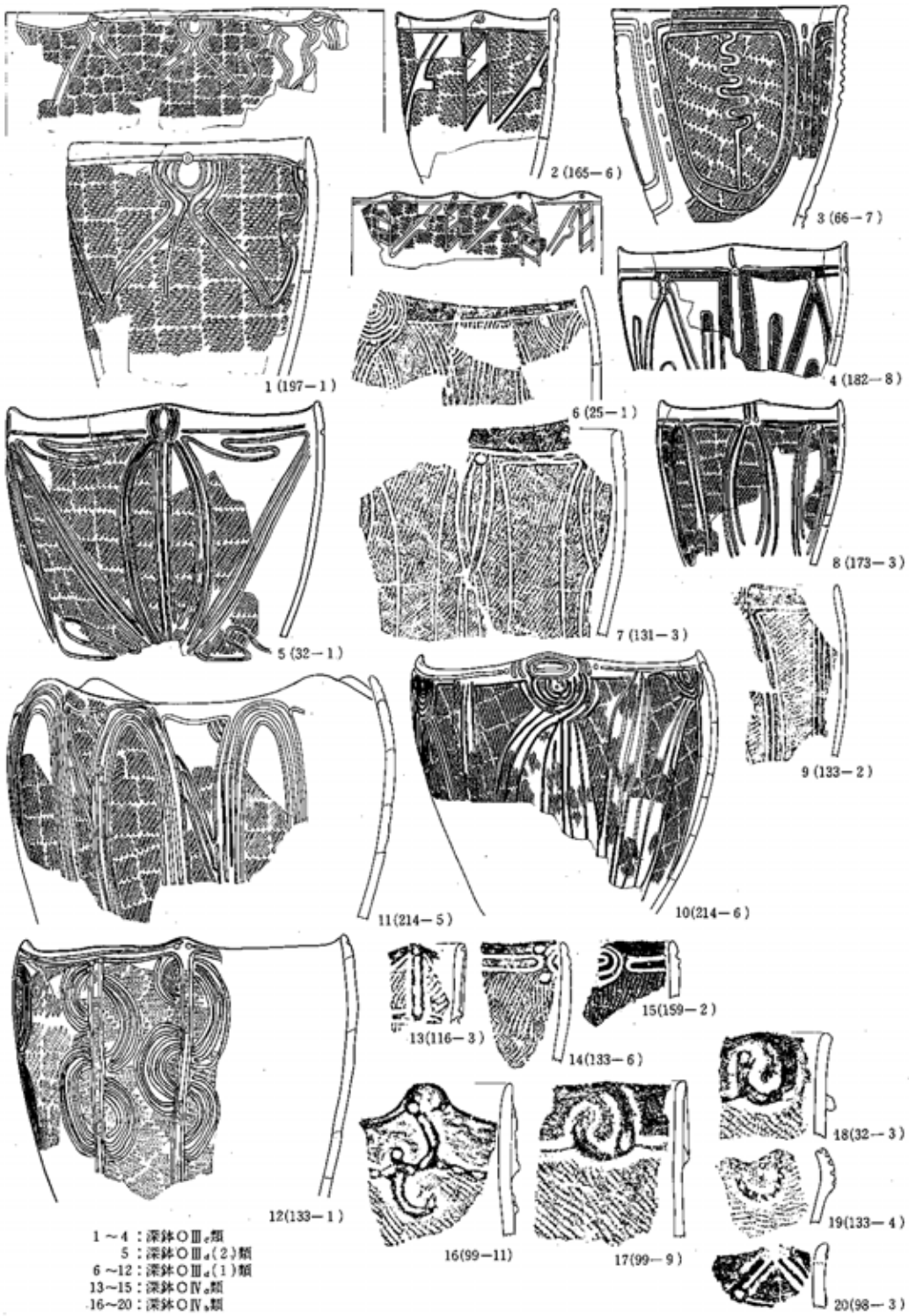
第453図　土器分類基準図（後期）



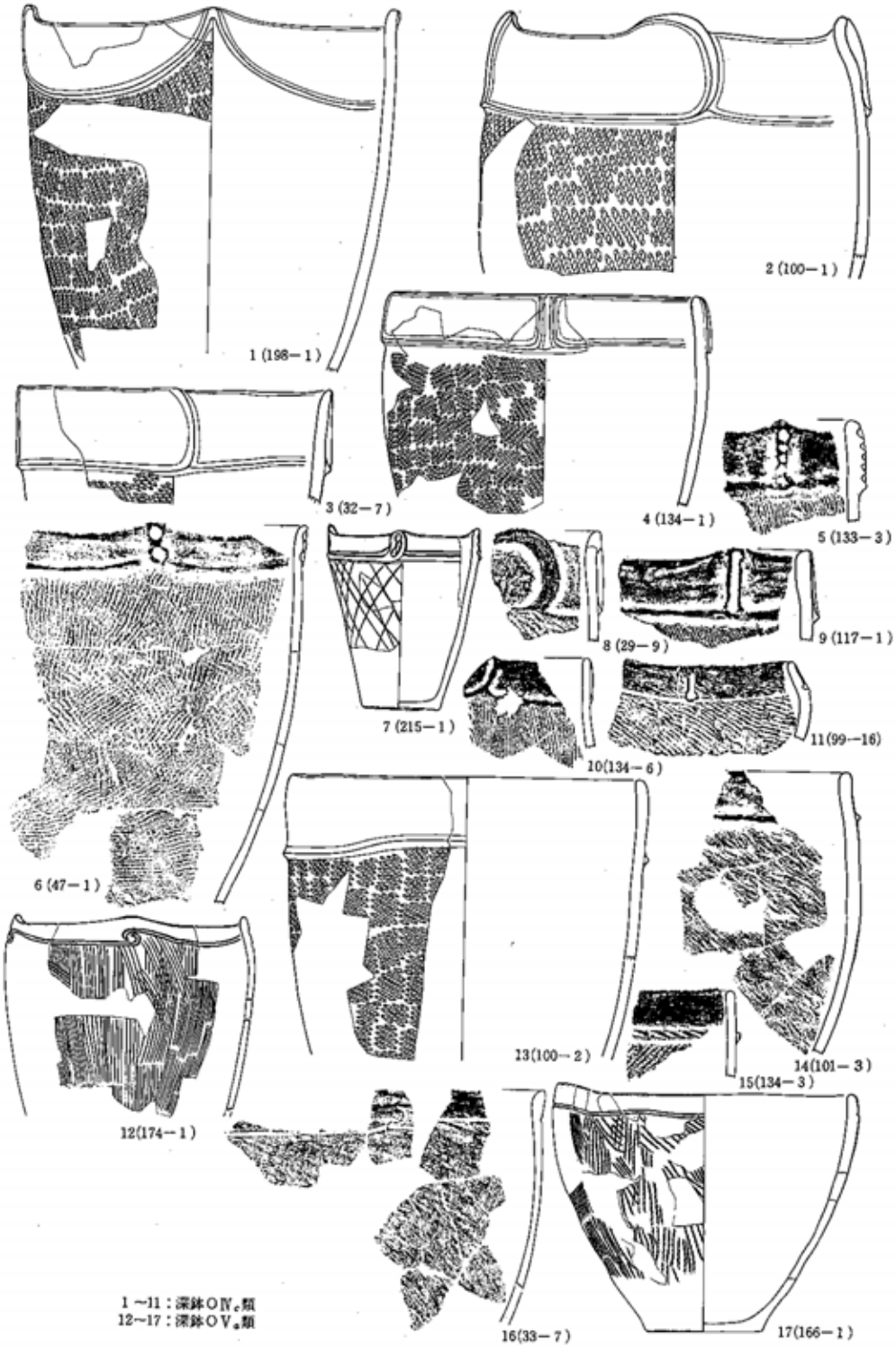
第454図 －土器分類基準図（後期）



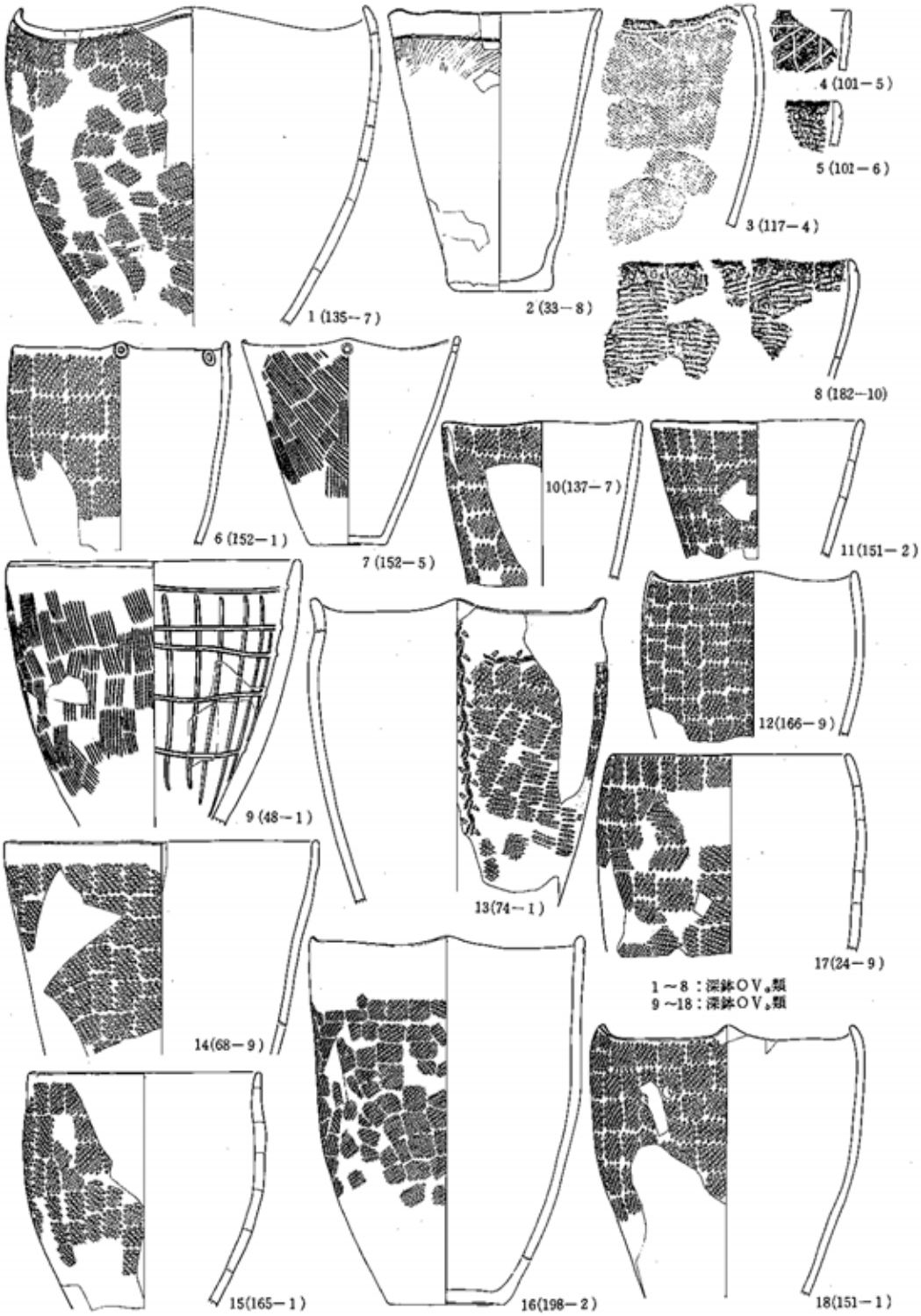
第455図　土器分類基準図（後期）



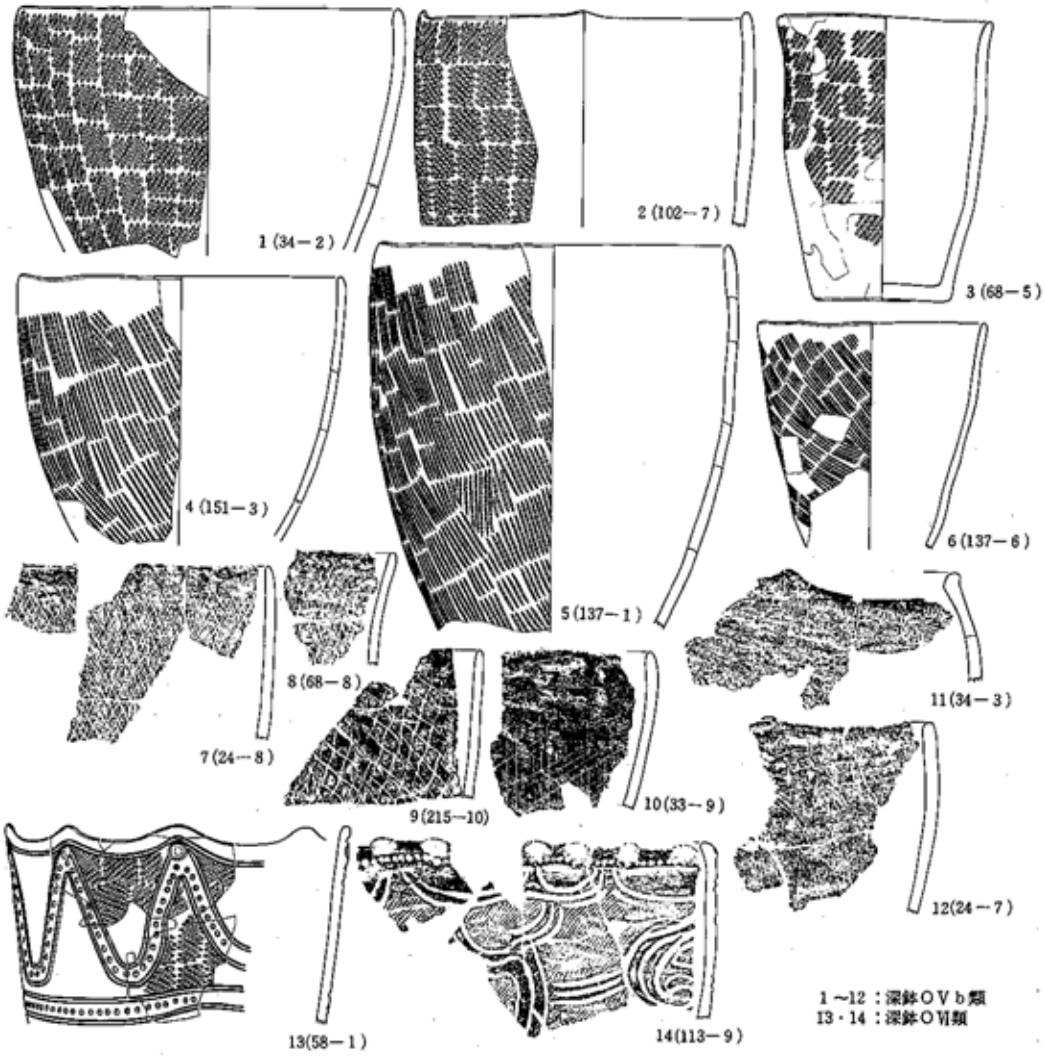
第456図　土器分類基準図（後期）



第457図　土器分類基準図（後期）



第458図　土器分類基準図（後期）



第459図　土器分類基準図（後期）

鉢

鉢は器形の違いによってA～Dの４類に分かれ、文様の有無・文様の種類によってさらに細分される。

A類：口縁部が内弯する器形である。胴部はほぼ直線に外傾する。2 個体しかないがそれぞれ口縁部形態と文様が異っている。(Ⅰ)は４個の高い突起がつき、口縁部に楕円・渦状の隆線文がみられる。地文は施されていない。(Ⅱ)は口縁部に幅の広い橋状把手がつき、その脇に横向きの丸い突起が施される。口縁部は無文で胴上部に横位弧状文が施され、地文はなく、丹塗りが認められる。

B類：口縁部が内反して頚部に稜のつく器形である。胴部はほぼ直線的に外傾する。文様をもつＢⅠ類と地文だけのＢⅡ類とに分かれる。

ＢⅠ類―頂部の凹んだ高い突起と一体になった橋状把手がつく。数の判明するものは４個である。口縁部は無文で胴部に文様が施されるが、単位が判明したのは縄文を地文とした渦付山形文で、他に磨消縄文（磨り消し）技法を用いた横位展開文様もある。

ＢⅡ類―山形突起や頂部が渦状の高い突起、橋状把手がつくものがある。口縁部は無文の場合と、突起下に渦状沈線文や下垂隆線文が施されることがある。胴部に地文（縄文）がみられる。

C類：頚部が「く」字状を呈し、口縁部は外反・外傾する器形である。胴上部は内弯し、胴下部は直線的に外傾する。文様をもつＣⅠ類と地文だけのＣⅡ類とに分かれる。

ＣⅠ類―突起のつくことが多く、窓の開いた台形の大突起と山形小突起が対を成すものが特徴的で、その対面に小突起が１個だけ配される。ほかに台形の突起や頂部の凹んだ突起が3～4個つくこともある。突起の数は必ずしも胴部文様の単位数と対応しない。口縁端部は肥厚して段がつき、端部に横位沈線や盲孔が施される。端部下の口縁部は大抵無文であるが、台形の突起下には下垂隆線文や橋状把手がつく。

胴部には全体に文様が施文されており、文様構成の違いによって３つに分かれる。

ＣⅠａ類　横位に展開する文様である。(ⅰ)入組渦文、(ⅱ)渦付三角文、(ⅲ)多条沈線風入組渦文などで、磨消縄文(充塡)技法が用いられるが、入組渦文には沈線間にも縄文が施される場合とそうでないものとがあり、後者は多条沈線文様風にみえる。

ＣⅠｂ類　幅広い単位が並列する文様である。方形沈線文、渦文、「コ」字文、渦付三角文、三角文などがみられる。磨消縄文技法を用いており、「充塡」が大半で、「磨り消し」はごく少い。

ＣⅠ類の文様単位数は2・3・4・5・7単位と多様であるが、4単位が多い。

ＣⅡ類―低い山形突起がつく。口縁部から胴部まで地文（縄文）が施されている。

鉢の分類基準

	器　　形	文　　様	
鉢 A 類	口縁部が内弯 (I) 高い突起 (III) 橋状把手、突起	楕円・渦状隆線文 横位氣状文	
鉢 B 類	口縁部内反、頸部に稜	Ⅰ．文様をもつ	
		Ⅱ．地文のみ	
鉢 C 類	頸部「く」字状、口縁部外反、外傾	Ⅰ．文様をもつ	a．横位展開文様 (I) 入組渦文 (II) 渦付三角文 (III) 多条沈線風入組渦文
			b．幅広単位文様
		Ⅱ．地文のみ	
鉢 D 類	口縁部・胴部直線的に外傾		

D類：口縁部から胴部までほぼ直線的に外傾する。口縁端部は丸くおさまり、大小対の突起がつく。口縁部から胴部にかけて蕨手類似文が描かれ、文様単位下端で横に連絡されている。磨消縄文（磨り消し）技法が用いられている。

鉢の縄文は斜行縄文でＬＲとＲＬがあり前者が圧倒的に多い。

台付鉢

口縁と台部下端を欠く土器１個体だけである。口縁部は内反して４個の橋状把手がつく。胴部は丸味をもって外傾し、台部は直立する。胴部に斜行縄文（ＬＲ）を地文として隆線により方形区画文が施文され、口縁部と台部は無文である。

壷

法量に大小が認められ、その差は著しく、胴部径を較べると大形は小形の 3 倍ほどになる。大形をＡ類、小形をＢ類とする。

A類：数が少く、器形・文様とも個体ごとに幾分異っているが、大きく分けると胴部が算盤珠形と球形とがある。前者は口縁部に４ヶ所、あるいは頸部に３ヶ所の橋状把手がつく。口縁部は無文で胴部上半に渦付三角文が磨消縄文（磨り消し、充塡）技法を用いて描かれている。胴部下半は地文（縄文）が施されている。

後者は口縁部を欠く。肩部に突起と一体になった橋状把手が３ヶ所につき、さらにその中間に小形の橋状把手が施される。文様は胴部に磨消縄文（充塡）技法を用いた入組渦文が施文される。Ａ類の文様単位数は把手の数に対応し、3・4 単位である。

B類：胴部はほぼ算盤珠形である。所謂無頸のＢⅠ類と頸のあるＢⅡ類とに分かれ、また胴部破片ではあるが、ＢⅠ・ＢⅡ類にみられない文様が施されるものを（BIII）類とする。

壺の分類基準

壺 A 類	大形		
壺 B 類	小形	Ⅰ．無頸	
		Ⅱ．有頸	a．口縁部直立
			b．口縁部外反
		Ⅲ 下垂する平行隆線	

注口土器の分類基準

注口土器A類	壺形	Ⅰ．胴部珠状　球
		Ⅱ．胴部筒状
注口土器B類	鉢形	Ⅰ．文様をもつ
		Ⅱ．地文のみ

ＢⅠ類―器上半に磨消縄文（充塡）技法を用いた渦付三角文が３単位並列する。下半部には地文（縄文）が施される。

ＢⅡ類―口縁部が直立して胴部が丸味をもつＢⅡａ類と、口縁部が外反して胴上部が内反り気味の、胴部算盤珠形を成すＢⅡｂ類とがある。ＢⅡａは頚部中位に対を成す小橋状把手が２ヶ所につき、ＢⅡｂは頚部に孔、胴中位に把手が対になる。口縁部は無文で、胴部には把手間(把手と孔)を結ぶ平行隆線がみられ、その間の胴上部に弧状文(ＢⅡｂ)や渦付三角文(ＢⅡａ)が施文される。磨消縄文（充塡）技法を用いるものが多いが、地文をもたずに丹塗りの認められるものもある。胴下部は無文である。

(BⅢ)類は胴部中位を隆線が横走し、それより上位に下垂する平行連鎖状隆線や隆沈線による「H」字状の文様などが施されている。磨消縄文技法を用いていると思われるが、詳細は不明である。胴下半は地文（縄文）が施文されるものと無文とがある。

壺にみられる縄文は斜行縄文でＬＲが大半を占め他にＲＬがわずかに認められる。

注口土器

注口土器は深い壺形のＡ類と浅い鉢形のＢ類とに分かれる。

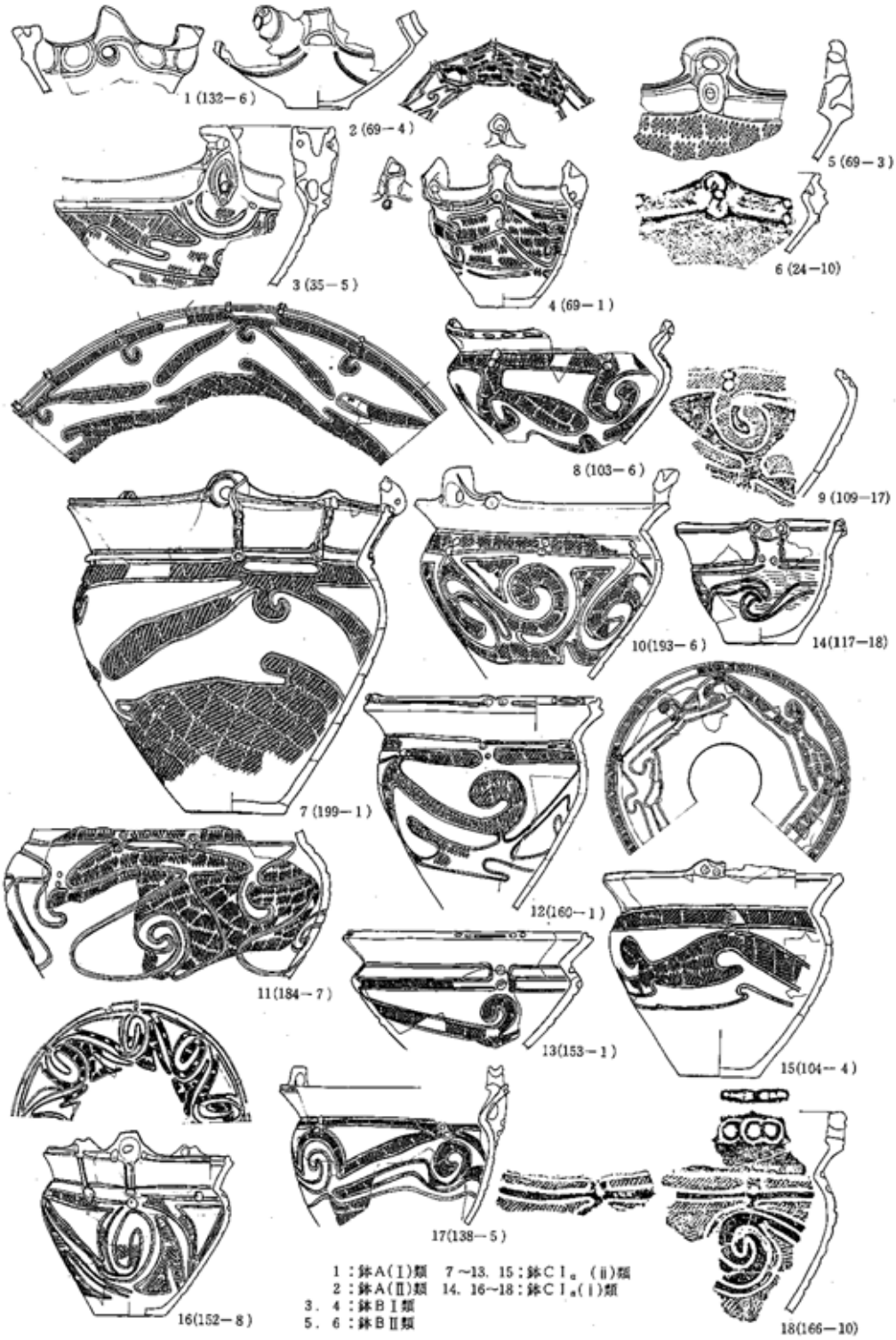
A類：口縁部は外反するものと、ごく短く直立するものとがある。胴部は丸味をもつが、丸味が強く球状に近いものをＡⅠ類、丸味が弱く筒状のものをＡⅡ類とする。

ＡⅠ類―口縁部に高い突起と橋状把手が一体になって２ヶ所に配され、その一方の把手下に上向きの注口がつく。

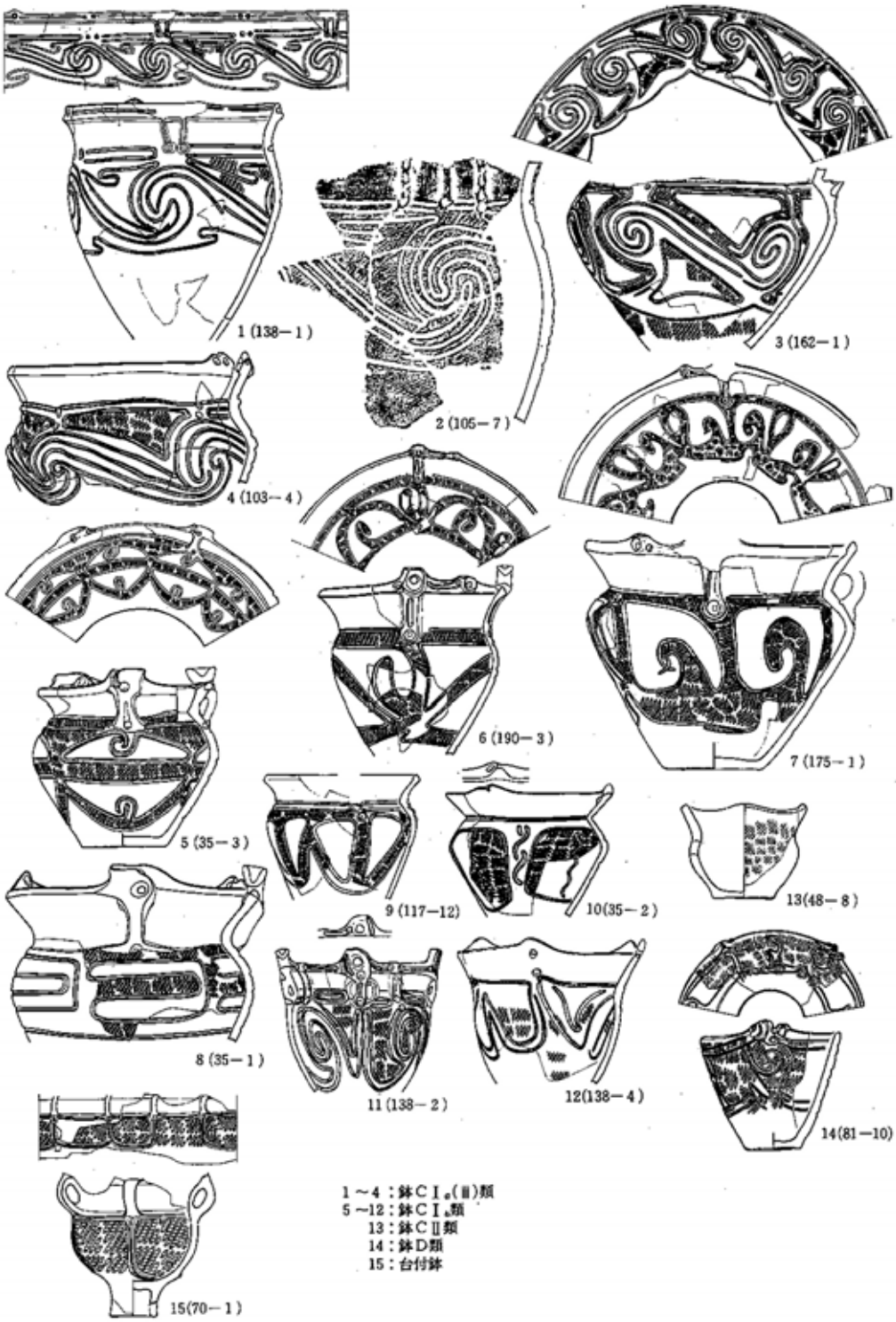
口縁部は無文で、胴部に磨消縄文（充塡、磨り消し）技法を用いた横位に展開する渦付三角文や渦文、楕円文と、地文のない重層弧状文が施文されている。文様単位数は２単位である。なお胴部破片の中には「J」字連結文が認められるものもある。

ＡⅡ類―造りが粗雑である。低い突起・橋状把手下に横向きの注口がつく。胴部に縄文を地文として連続「S」字文を沈線で囲んだ文様がみられる。

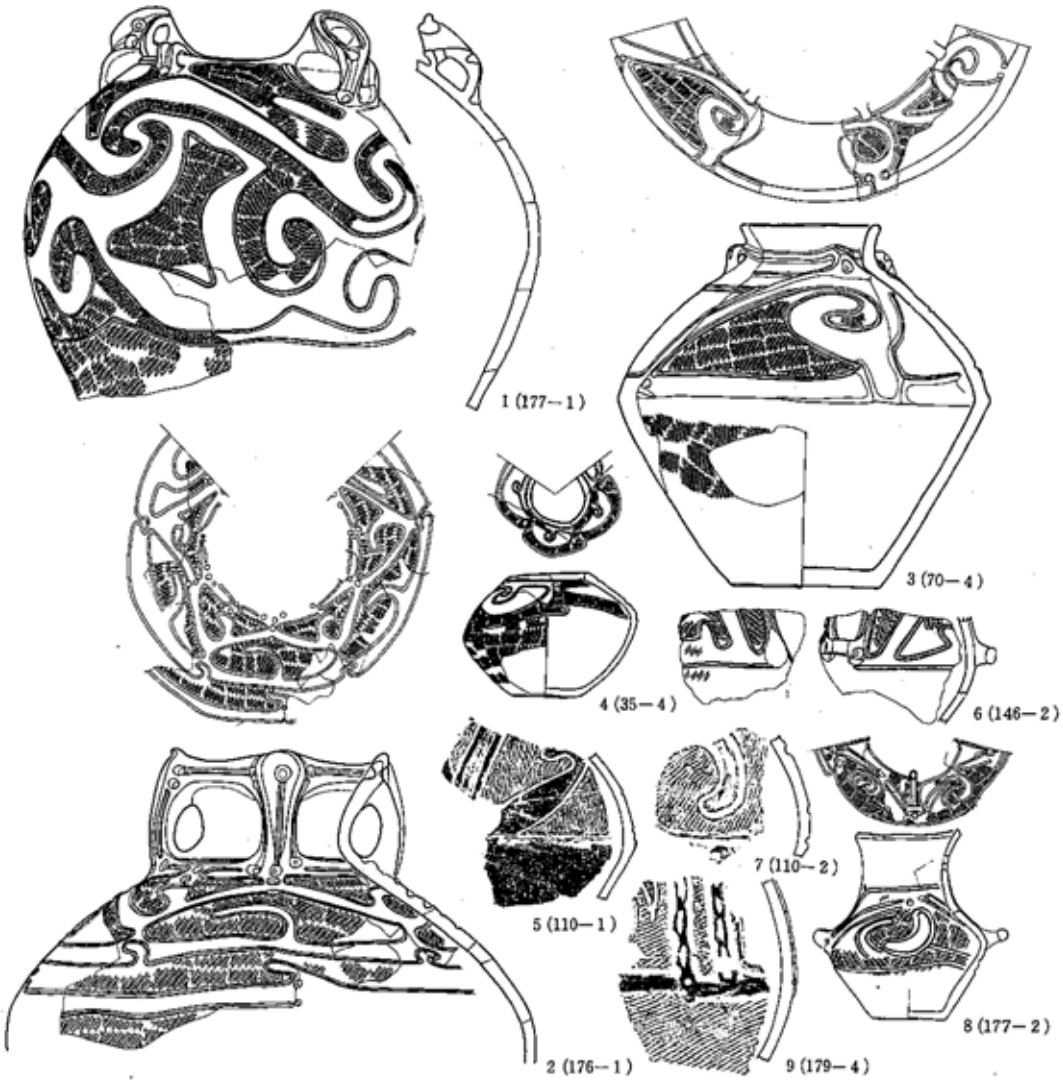
B類：口縁部は内反し、頚部に稜がついて胴部は直線的に外傾する。文様をもつもの（ＢⅠ類）と、もたないもの（ＢⅡ類）とがある。



第460図　土器分類基準図（後期）

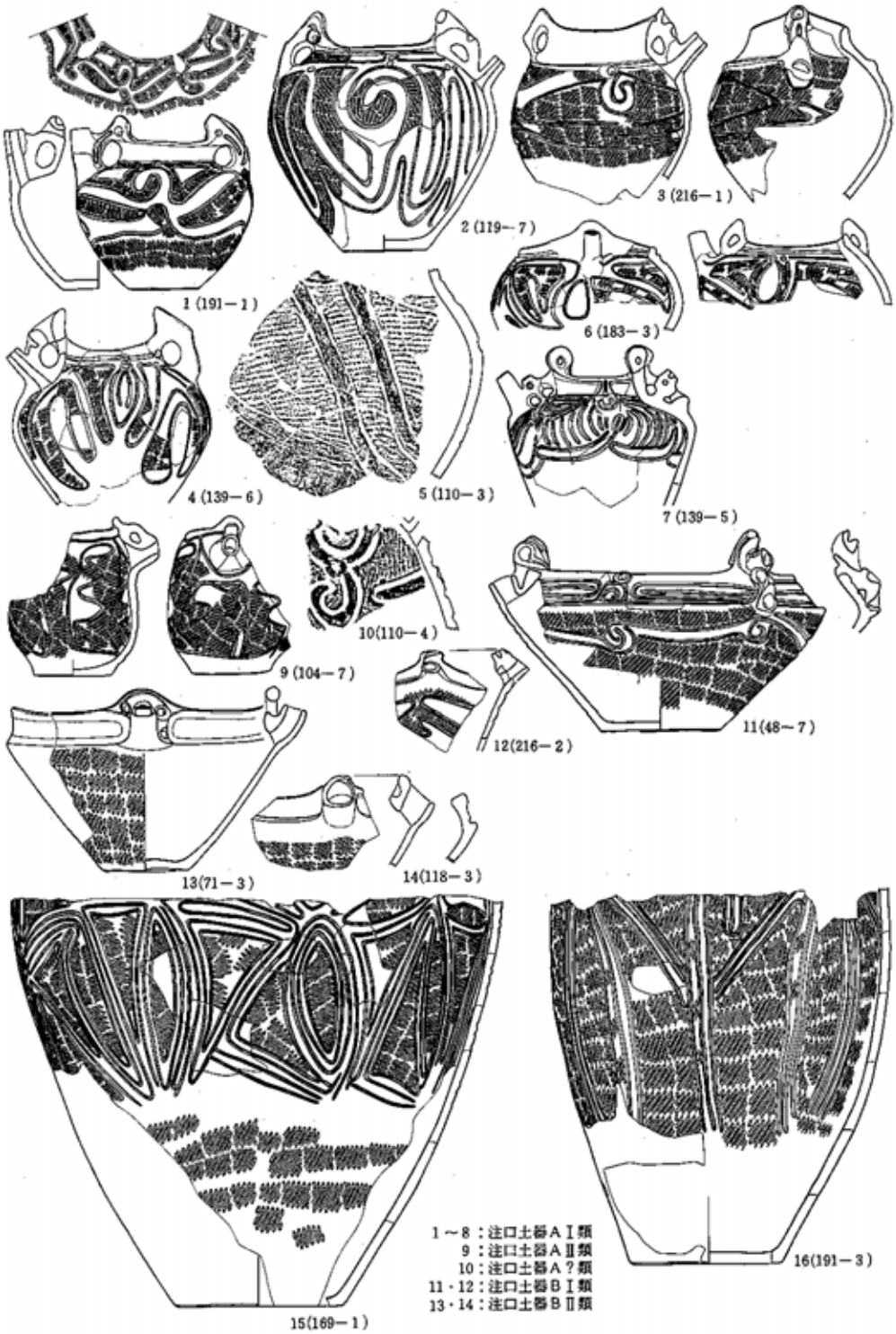


第461図　土器分類基準図（後期）

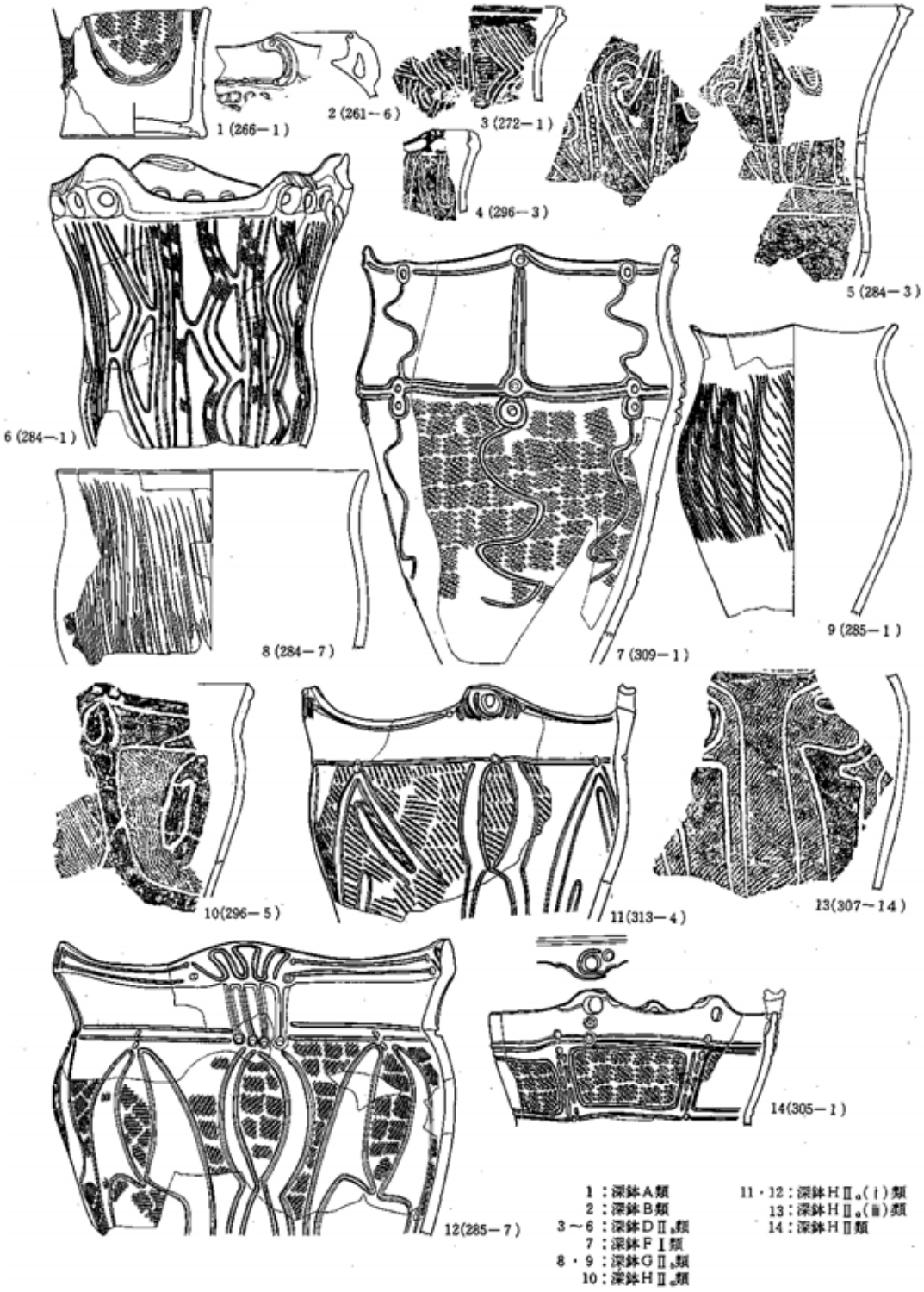


1～3：壺A類、4：壺BⅠ類、5～7：壺BⅡa類、8：壺BⅡb類、9：壺B(Ⅲ)類

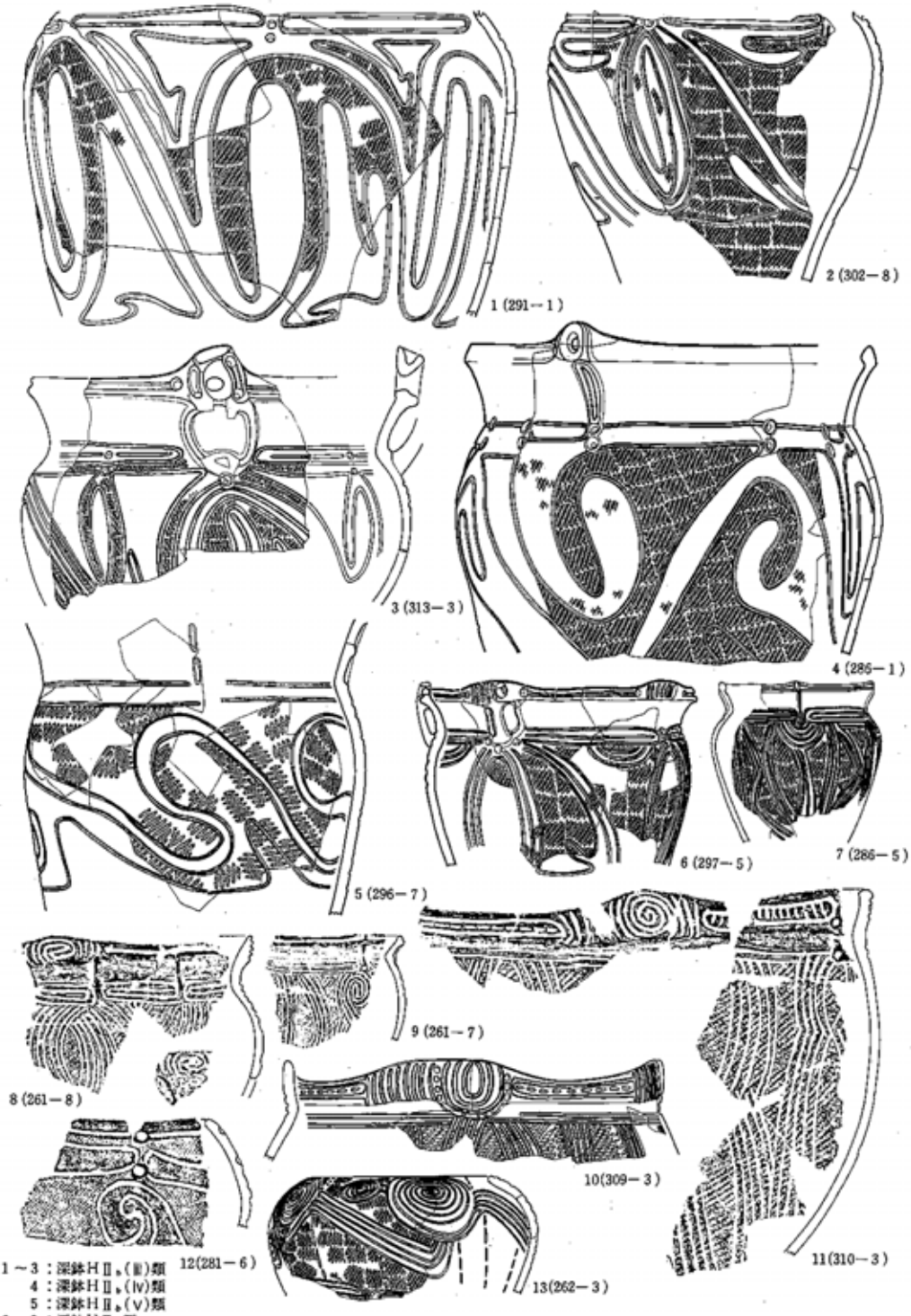
第462図　土器分類基準図（後期）



第463図　土器分類基準図（後期）

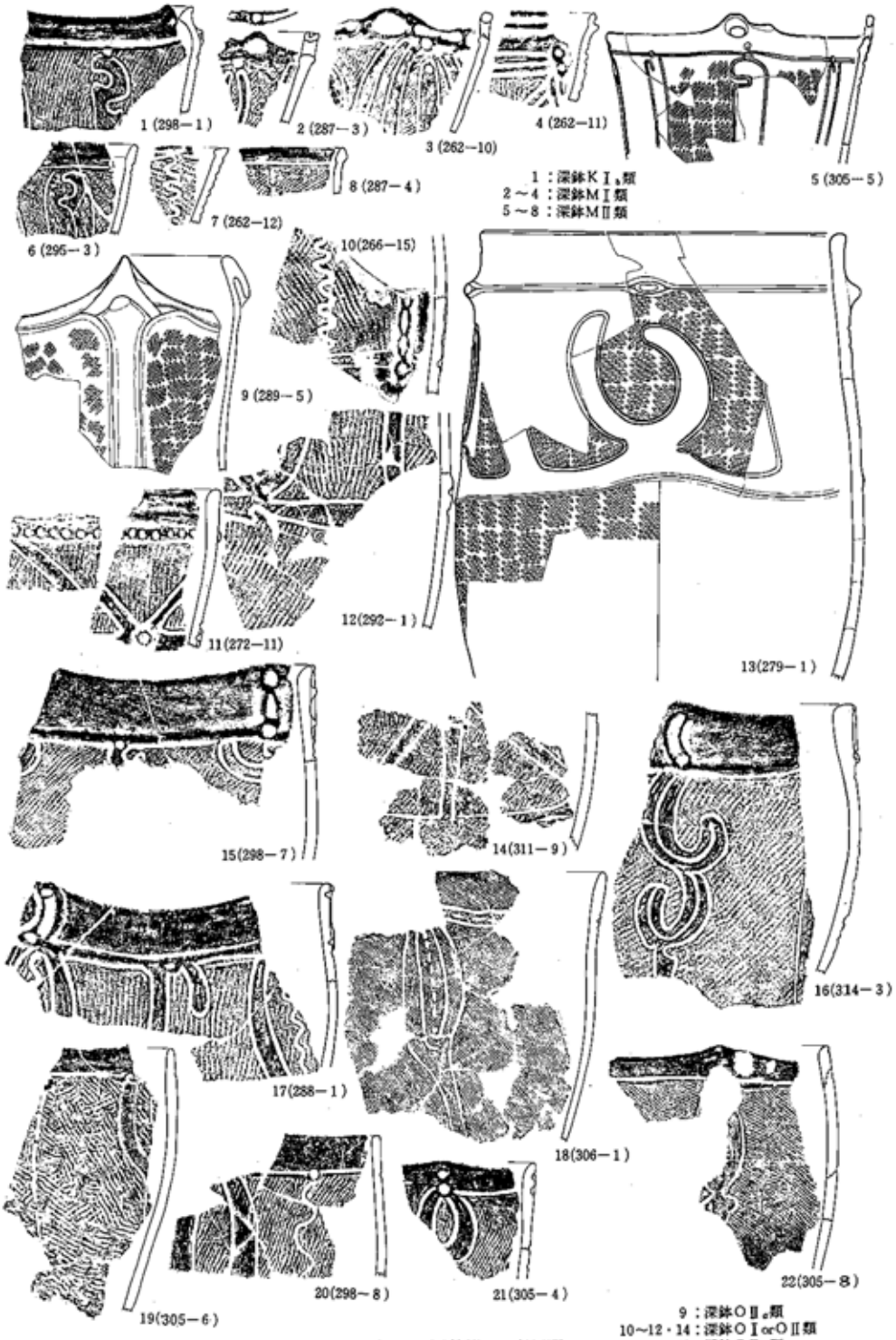


第464図　土器分類基準図（後期）

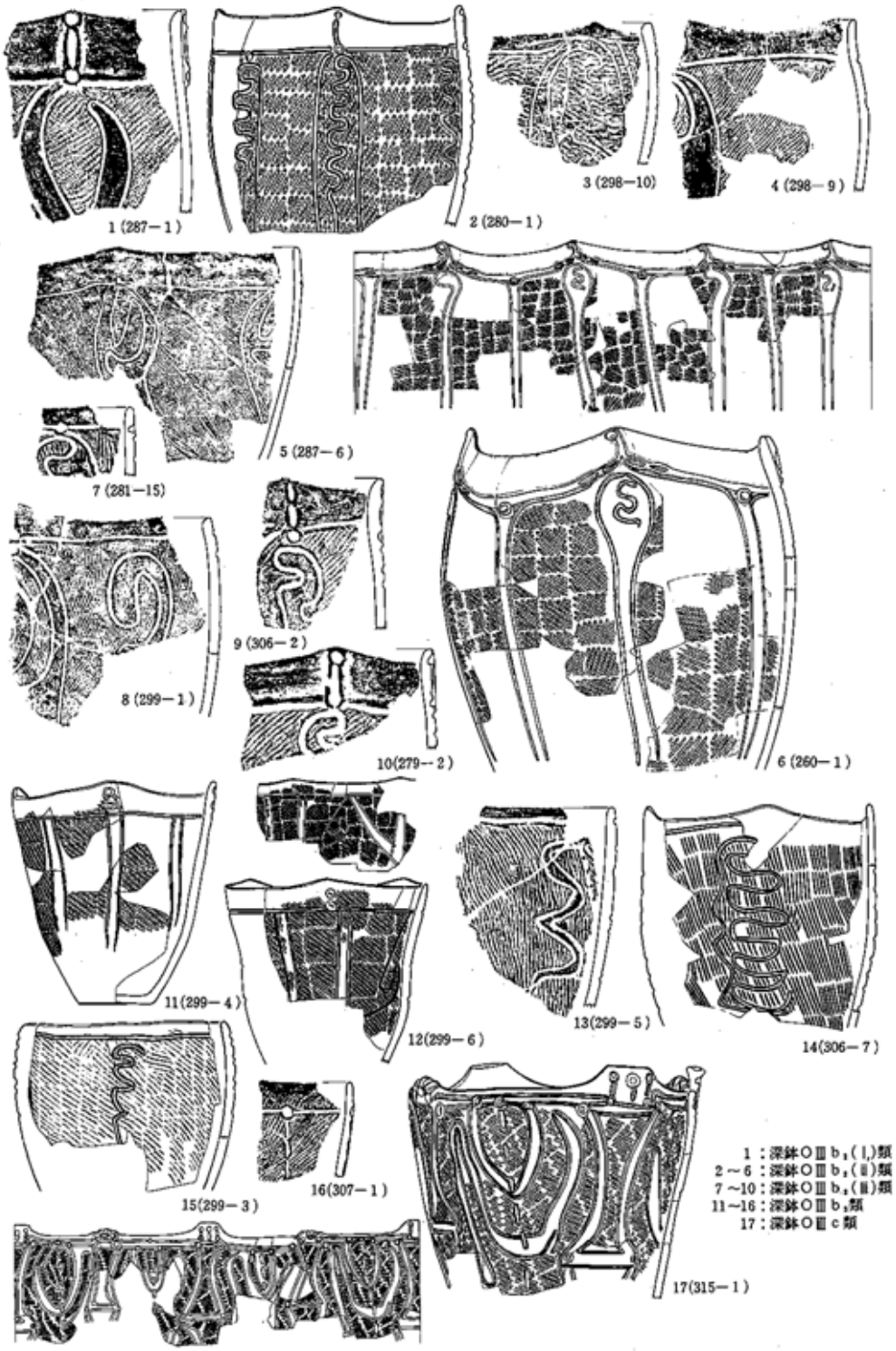


1～3：深鉢HⅡb(Ⅲ)類
4：深鉢HⅡb(Ⅳ)類
5：深鉢HⅡb(Ⅴ)類
6～9：深鉢HⅡa類
10・11：深鉢Ⅰ類
12：深鉢Ja類
13：深鉢Jb類

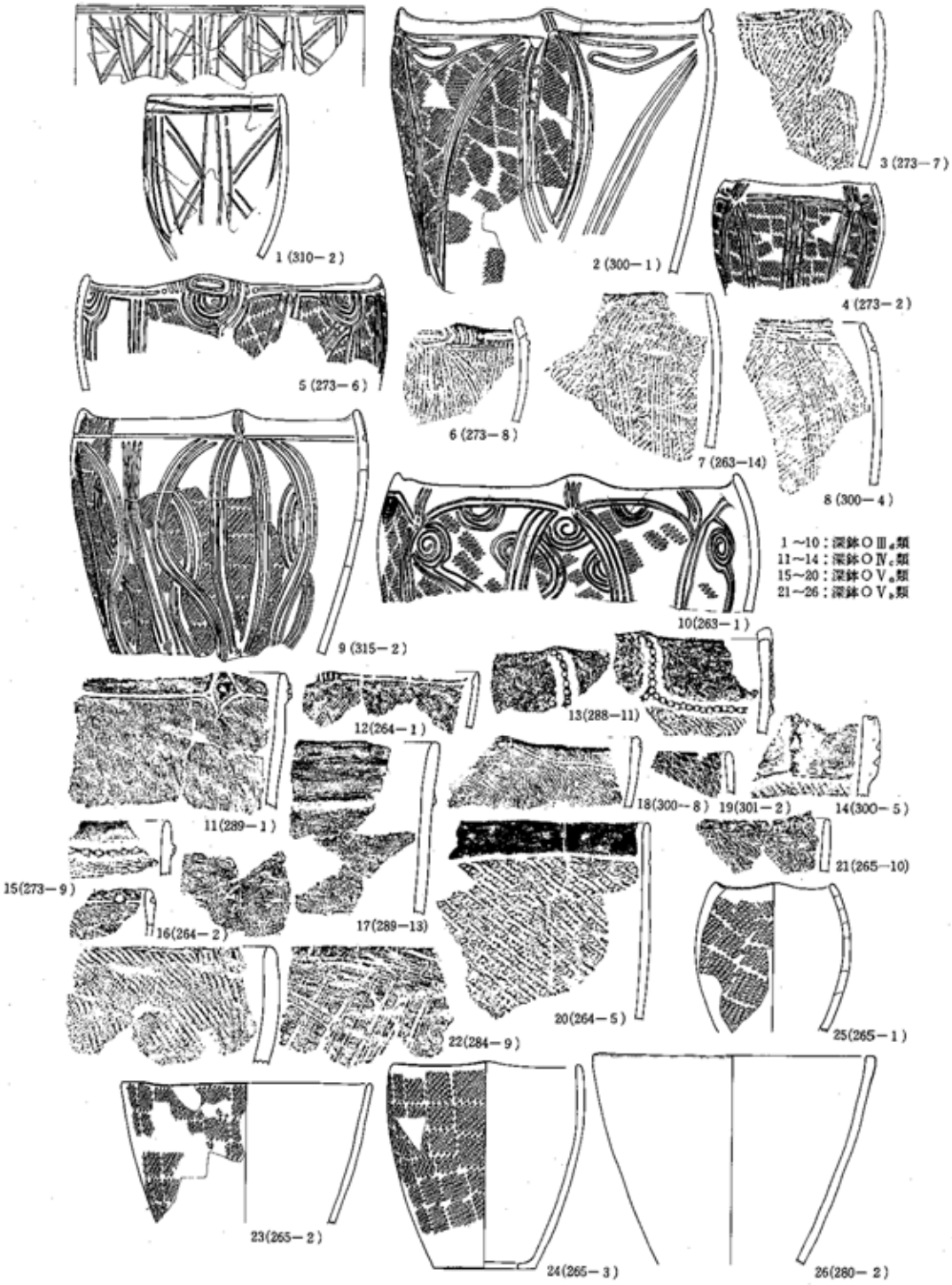
第465図　土器分類基準図（後期）



第466図　土器分類基準図（後期）



第467図　土器分類基準図（後期）



第468図　土器分類基準図（後期）

第469図　土器分類基準図（後期）

ＢＩ類―口縁部に高い突起と橋状把手が一体となって３ヶ所に配され、一つの把手の脇に上向きの短い注口がつく。文様は口縁部に渦文と長楕円文、胴部に磨消縄文（磨り消し）技法を用いた３単位の単純入組渦文がみられる。

ＢII類―低い突起下に短い注口がつく。口縁部は無文、胴部は地文（縄文）である。

注口土器に施されている縄文は斜行縄文でＬＲが多くＲＬは少い。

以上、遺物包含層出土土器の分類をまとめた。これ以外の堆積層や遺構からも同類に分類される土器が多数出土している。その中には基本的な共通点をもちながらも、若干包含層出土土器にみられない特徴をもつものがあるので、それらについて触れておくことにする。

○第 464 図 2―深鉢Ｂ類であるが、口縁部小突起下に沈線の加えられた弧状隆線が下る。

○第 464 図 5―深鉢ＤII類であるが、文様下端が沈線で区画され、下垂区画線が刺突をはさんだ平行沈線、その間に充塡される単位が３条沈線による単純な入組渦文で、１・２条沈線で、描かれるＤIIａ類と多条沈線のＤIIｂ類との中間的な技法であり、充塡される文様はＤIIａ類に近い。

○第 464 図 7―深鉢Ｆ類であるが、口縁部と胴部に文様が施される点はＦＩ・ＦII類いずれとも異っている。

○第 464 図 10―深鉢ＨII類である。胴部の文様単位全体は判明しないが、口縁部の「の」字状文はＨII類だけでなく他の土器には認められない。

○第 466 図 13―深鉢 0IIｂ類である。文様が１・２条の沈線が描かれている。

○第 468 図 1―深鉢 0IIIａ類である。多条沈線文様に含めてよい文様と思われるが、下垂線

区画文様であること、区画線間に2条単位の斜行線が充塡される点が異っている。また地文をもたない。

○第469図4―鉢ＢⅡ類である。縄文的にみえる連続刺突文が施されている。

これらは包含層出土土器の分類に含めることができ、それと相違する点も各種に抱括しうると考えられ、1個体づつでもあるので細分類は行わない。

その他の土器の分類

後期前葉に属するとは考えられるものの、包含層出土の第Ⅰ・Ⅱ群土器とは著しく特徴の異る土器である。層位的な共伴関係が認められておらず、量的にも少いので、簡単に類別する。

深鉢

完形品がないので、口縁部資料によって口縁部から胴上部の器形を分類すると、Ⅰ：反り気味に外傾するもの、Ⅱ：頚部がくびれて口縁部が外傾するもの、Ⅲ：口縁部端部が内傾するものとに分かれる。

Ⅰ類：口縁部は無文である。胴部文様は3類がみられる。ａ：磨消縄文（充塡）技法を用いた三角文や菱形文の施される。ｂ：多条沈線、櫛歯状沈線が横走するもので、それを縦位の連続Ｓ字文などで区切るもの、刺突が加えられるものなどもある。ｃ：縄文を地文として多条沈線が横位、縦位に組み合って文様を描くものである。ｄ類：口縁部から胴上半部に刺突の加えられた隆線によって文様が描かれ、胴下半に縄文が施されている。ｃ類を除き、口縁端部内面に沈線が巡る。Ⅰａ類Ⅰｂ類は平口縁と波状口縁、Ⅰｃ類は波状口縁で帽子状の突起がつく。Ⅰａ類は一方がなだらかな山形突起がつく。

Ⅱ類：口縁部は無文で、胴部に多条沈線を縦位・横位に組み合わせたⅠｃ類同様の文様が施文されている。

Ⅲ類：口縁端部に沈線と刺突、刻目、口縁部から胴部に多条沈線による弧状文刺突の加えられた隆線がみられる。頂部にＳ字状の隆線が施された突起がつく。

浅鉢

口縁部から胴上部が内弯気味の器形で、低い山形突起がつく。口縁部は無文、胴部に横位の多条沈線文、渦文が施文される。

壷

いずれも胴部資料である。胴部は丸く、把手がつくらしいものもある。胴部上半に流水状文

や渦文が磨消縄文（充塡）技法を用いて施文されている。

以上のように遺物包含層出土土器とその他の土器は分類された。そして本遺跡から出土した縄文時代後期前葉に属する土器は、すべてこれらの分類のいずれかに含まれる。

出土土器の共伴関係

前項で分類された各類の南側・北側遺物包含層の層ごとに出土状況をみると集計表のようになる。それによると各層ともわずかな違いはみられるものの、ほぼ同様な組み合わせであると理解される。したがって各包含層、各層出土土器はいずれも一定期間内のもので、ほぼ同時期に属すると考えることができる。しかし、包含層からは前述のように中期末葉（大木10式）の土器が若干混入しており、後期前葉とした土器の中にもなお時期の異る混入品が存在する可能性があるので、まずこの点を検討する。

包含層出土土器の中で、量的にも器形・文様の点からみても特徴的であって主体を成すのは深鉢の０類(ⅢＢb2、ｄ)類とM類・H類(Ⅱ)である。この３種の器形間には文様の特徴に共通性が強く、それを軸にして微の器形についてみると、共通した文様が認められる類は下の通りである。

（深鉢）ＨⅡａ＝MⅡ・ＭＩａ＝0ⅢＢb2・3（　0ⅢＢｃ）＝ＫＩｂ＝Ｌ

（深鉢）HⅡｂ＝ＭＩｂ＝Ｊａ＝(鉢)ＢＩｂ＝ＣＩ＝ＣⅡ＝D＝(壺)Ａ＝Ｂ(Ｉ、Ⅱａ)＝(注口土器)

Ａ＝Ｂ　HⅡｃ＝ＭＩｃ＝0ⅢＢd＝DⅡ＝Ｉ＝Ｊｂ

したがってこれらを第１グループとしておく。

次にこの他の類についてみると、

（深鉢）Ｃ＝ＤＩａ＝0Ｉ、0Ⅱａ＝(台付鉢)

（深鉢）ＤＩｂ＝ＨＩ

（深鉢）ＧＩ＝ＫＩａ＝0ⅢＢａ、0ⅢＢb1（0Ⅱｂ、0Ⅳａ・ｂ・ｃ、ＦＩ）

という少い類に共通する文様をもつグループがあり、また他と共通する文様をもたない深鉢Ａ・Ｂ、HⅢ、N、0Ⅵ類や鉢A類、壺ＢⅡｂ類をも含め、第１グループとは器形あるいは文様(施文部位、文様構成)の特徴に基本的な違いが認められるので、これらを第２グループとする。

また文様をもたないか、あるいはごく簡単な文様が施されている深鉢DⅢ、ＦⅡ、ＧⅡｂ、ＫⅡ、0Ⅳｃ、0Ⅴ類、鉢ＢⅡ、ＣⅡ類を第３グループとする。

これら３つのグループで、第１グループは包含層出土土器の中で主体を占めるところから、同時期性が強いと考えられる。第３グループについては、深鉢DⅢ、0Ⅴ類は同じ器の中に第1、第２グループのいずれにも含まれるものがあるが、主体を成す第１グループに属する可能性が強い。また深鉢ＧⅡｂ類と鉢ＢⅡ、ＣⅡ類は同じ器形が第１グループであることからそれに、

ＫⅡ、ＦⅡ類と同様の理由で第２グループに、それぞれ含めてさしつかえないと思われる。

このように後期前葉の土器は大きく２つのグループに分けることができ、その特徴を中期末葉から後期前葉にかけての土器変遷過程に位置づければ、第２グループの土器は第１グループの土器よりも古式の様相を呈しており、時期の異る可能性が強い。したがって遺物包含層出土土器は第Ⅰ群土器（第２グループ）と第Ⅱ群土器（第１グループ）の２つの土器群が認められ、包含層において主体を成し、同時期と考えられる第Ⅱ群土器と、それに混入している第Ⅰ群土器とすることができる。南側遺物包含層での第Ⅰ群土器の出土量は第Ⅰ・Ⅱ群土器全体の約5.6%とごく少い。また包含層以外の遺構、堆積層などから出土した土器についても同じ特徴を有するものはそれぞれ第Ⅰ・Ⅱ群に含まれる。

このほか「その他の土器」として扱った土器群は基本層位第Ⅱ層出土品が多いものの同層には第Ⅱ群土器の方がより多く出土しており、共伴関係は認められないが、第Ⅰ・Ⅱ群土器とは大きく異った特徴をもつところから第Ⅲ群土器とする。

なお、第Ⅰ群土器と第Ⅲ群土器は他遺跡の類例をみても第Ⅱ群土器とに時期差が存在することは明らかであり、この点は第Ⅰ・Ⅲ群土器と第Ⅱ群土器との相違点とともに以下の項で詳述する。

南側遺物包含層口縁部資料出土点数①　※破片集計と図示資料の合計である。

		GP50		GP51		GP52		GP53		GP55		GO52		GO53		GO54		GO55		GO56		GN51		GN52		GN53		GN54		GN55		GN56'		GM51		GM52		GM53		GM54		GM55		GM56		GM57	
		2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層
深鉢	A														1									1	1		1												2									
	B															1								3				1			2		1		1					1	3						1
	C													1	2		1		1		1								3		1						1								1		
	DⅠ																						2										3												2		
	DⅡ																							1				2	2	2			2	1		4							1	1		2	1
	DⅢ										2																									1											
	E																												1				2														
	F																		13				6				1		3		4	1	2		8	2	2				1		2		4		1
	GⅠ																																														
	GⅡa																																		1												1
	GⅡb					1									1						1												1												1		1
	HⅠ																		1								1				1		1		1				1								
	HⅡa																																								1						
	HⅡb					1															1			1							1	1	1	1													
	HⅡc					1			1											4										2	1	3				7			3		1		2	2			
	HⅡ	3				4	4	6	1	1		29	3	17	7	15	10	5	10	5	10		7	37	8	20	26	13	24	21	29	4	16	20	2	38	3	16	21	15	32	2	25	8	25	5	9
	HⅢ																																														
	I						1				1																																1				
	J							1				1		1																																	
	KⅠa													1															1														1				1
	KⅠb							1					2		2			2																		1	1				1		2					
	KⅠ									1	1	1				3			5					2	5		5		6	3	10		2	1	1				2	1		1	6		3			
	KⅡ																																1														
	L					3		2				2			1				1						1						5								4		1	1	3		2			
	MⅠa																												1		2		3			1												
	MⅠb																							1															2		1							
	MⅠa、b												1	1		2								5		9	1			4					1	8	2	2	1	2					3			
	MⅠc								1					5																				1		2		1	4			1	1			4	
	MⅡ					1				1		6	2		3	4	1		5					3	2	11	8	3	11	1	8			1		2	1	2	3	1	11		7	3	7	1	
	N											1																																			
	OⅠ								2							1	2				1				1		1																				
	OⅡa																												1																		
	OⅡb																																														
	OⅢa																																										2				
	OⅢb_1												1		1										1		2		1						1								1				
	OⅢb_2(i)			1		1		3	1	1	1	6	1	3	3	3	6		6	2			2		1	1	2	1	1	1	2			2	1		1		2		1		6	1	3		
	OⅢb_2(他)	1				2		1				10		25	14	7	8	1	7	3	4		1	3		1	10	11	12	6	13	1	2	2	2	2	5	4	2	1	12		8		7	3	1
	OⅢb_3						1				1	3	1		3	2	2							1			3		3	2	1				1	1			2	15	1	1						
	OⅢb	6				3		4	1	9		6	21	5	6	10	7		10	9				26	12	25	44	19	34	14	47	6	10	19	9	34	3	7	49		44	10	51	14	33	6	7
	OⅢc						5		1					1							1			2	1	1	2		1		5				1	2	3	1			3		3	2	3		1
	OⅢd								2	5	2	2		2	2	3		1	2	13									1	6	2	2	3	3		2								1			
	OⅢ					3				1					2		2				1			1		1	2		6		1						2	3	1		2		5		3	1	2
	OⅣa						1		1		1	3												1	1					1						2										1		
	OⅣb							2	3			5			4	1	5		2		2				1		3																		5		
	OⅣc	1									1	1	3		5		13		9			1	2			1	1								1								1		1	1	
	OⅤa	7			2	9	1	11		17	3	58	1	37	59	37	57	3	46	10	44		24	37	11	18	61	21	66	5	95	5	21	16	23	30	4	8	52	16	47		57	15	49	8	4
	OⅤb	4		5	1	7	1	5	7	36	14	18	6	24	11	15	51	3	30	31	7	2	1	8	9	2	16	25	25	14	23	2	8	9	7	17	2	6	34	4	18	1	14	6	20	9	6
	OⅥ																										1									1											
鉢	A																																														
	B					1			1								3								1				1		2							1				1				
	CⅠa																										1								1						2				1		
	CⅠb														1		2																							1			1				
	CⅠ	1						5		2		30		13	11	5			1		5		2	12	10	12	17	9	20	10	28	1	12	5	1	16	1	6	32	4	19	1	12	5	19	8	6
	CⅡ											1																																			
	D																							1																							
台付鉢																																	1														
壺	A																														1													1			
	BⅠ																1																														
	BⅡa										1					1													2															1			1
	BⅡb																																														
	不明																									2	3		2	1	2				1	1					6			1	1		
注口	AⅠ								3			1		2				1					1			5	5	1		1		1						1	1		1		1		2		
	AⅡ																																						1								
	B											1			1		1												1															1			
	不明							1					2				1							2				3	2	1	1					2		1	1		1		1		1		
不明		16			1	8		36	54	5	3	42	18	10	66	6			66	11	34		43	50	66	40	69	26	119	54	177	10	104	40	80	94		45	140	23	80	13	69	25	124	17	9
大木10式																																															

南側遺物包含層口縁部資料出土点数②

		GL50		GL51		GL52		GL53		GL54		GL55		GL56		GL57		GK53		GK56		GK57		GJ53		GJ54		GJ56		GJ57		GI55		GI56		GI57		GH55		GH56		GH57		合計		
		2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	2層	3層	計
深鉢	A				1	1									1																												2	7	9
	B			1											1							2								1													7	12	19
	C							1	1					1										7																		3	10	15	25
	DⅠ				1																																						1	8	9
	DⅡ	2		1	1		4	3	2	3	1		4				1	3		3									1					1									28	21	49
	DⅢ																																										1	2	3
	E																																											3	3
	F		2				3	1			1		2		2	1	2				1		2						2						2									5	66	71
	GⅠ																																												
	GⅡa																																											2	2
	GⅡb		1																											1													1	7	8
	HⅠ				1												1													1														9	9
	HⅡa																																		2								1		4	4
	HⅡb																				1								1		1	1					1					1		6	7	13
	HⅡc			2	2	3	5	1	1	1	1	1	2	1		3		4		3								2	1					1						1			41	21	62
	HⅡ	3	1	11	7	6	13	10	19	7	22	5	20	13	24	27	8	2	3	28	8	14	18					13	4	8	21		4	17	7	4	7	1	11	7			9	460	478	938
	HⅢ																						1																						1	1
	I					1		1	1																																		2	4	6
	J												3	1	1					2																							6	4	10
	KⅠa				1										3																												1	7	8
	KⅠb														1					1																						1	5	10	15
	KⅠ										2			1	3	2	1				2	1												1									17	55	72
	KⅡ																																											1	1
	L										1		1							1		1	1							1	3						1						11	25	36
	MⅠa												1																														1	7	8
	MⅠb								1		2		1			1		1																									3	7	10
	MⅠa,b							4				2	3	1		1				3			1									1		1										46	13	59
	MⅠc				1		1	2	5		7	6	8		3		1	1	1	2			1	2				1																28	34	62
	MⅡ			2		1	2		1		1		8	1	10	3	8			2	3		5								4		1		4	3								52	117	169
	N																																										1		1
	OⅠ																																										1	7	8
	OⅡa			1	1				1						2		1																										1	6	7
	OⅡb								1																																			1	1
	OⅢa																																											2	2
	OⅢb₁																																		1									9	9
	OⅢb₂(i)								1				1		3	2				1			1					2	5	1						1				1		2	32	55	87
	OⅢb₂(他)	1		2	1	1	2	4	4		6	1	3	2	3	4	5	2		8	8	3	6					3	4	5	4	1		1	2		6	3	1	2		2	2	129	165	294
	OⅢb₃												3		1	1	1			3	2	1	1							1	3												2	31	32	63
	OⅢb	3		7	12	10	16	9	8	5	39	8	55	24	33	28	17	6	1	22	22	18	25	4				13	16	18	21		3	18	3	13	14	3	7	4	3		7	445	690	1135
	OⅢc						2	1		1		1		2		2	3			1	2		1			1				3	1					1	1			1	1		1	23	42	65
	OⅢd			4	1	2	6	2	4	3	4	1	1						1	2							1	1				1												56	32	88
	OⅢ				2		1		1		3		5		2		3	1	1	2	2		1					1	2		1				1									14	54	68
	OⅣa								1										1																									7	7	14
	OⅣb				3		1				2		2				1		1	1																								9	35	44
	OⅣc		2		1		1		2								1																					1						5	45	50
	OⅤa	5	9	7	18	5	27	17	15	8	37	8	40	24	46	22	37	5	9	29	11	15	38	9				8	17	14	23	1	4	17	7	5	16	9	8	2	2		3	578	1094	1672
	OⅤb	10	1	9	16	12	16	6	7	13	22	8	23	10	21	8	5	5	3	21	12	13	18	5				6	10	5	10		3	5	1	2	2	11	4	4	1		5	406	491	897
	OⅥ																																										1	1	2
鉢	A																1																												1	1
	B						1										1																											1	12	13
	CⅠa								1		2			1						1			1													1								3	9	12
	CⅠb												1																1						1								1	1	8	9
	CⅠ	1		4	3	1	4	3	7	2	11	6	10	10	10	12	11	5	2	17	14	8	6					2	2	12	12	1		5		6	4		1	2	3		7	242	303	545
	CⅡ																																										1		1
	D																																										1		1
台付鉢																																												1	1
壺	A						1		1		1																		1		1												1	6	7
	BⅠ																																											1	1
	BⅡa												1							2										2														6	5	11
	BⅡb																														1													1	1
	不明					1	2								1																			2		1				1				10	18	28
注口土器	AⅠ			1						2	3		2	1	3	2	2			1				2				1			2			2	1					1			1	26	28	54
	AⅡ																																											1	1
	B														1																													2	4	6
	不明						1		1				1	3	2	1		2	1	1		1	1	1							2			3										22	19	41
不明		26	11	10	52	16	42	51	43	18	95	29	93	120	129	74	78	10	14	70	47	40	77	19				24	68	42			8	46	20	39	56	16	20	18	5		16	1239	2196	3435
大木10式																																											250	856	1106

土器群の内容

縄文時代後期前葉の土器は3つの群に分けることができた。そのうち同時期であることが明らかなのは遺物包含層出土の第Ⅱ群土器で、第Ⅰ・Ⅲ群土器は後期前葉という時代幅の中において第Ⅱ群土器よりそれぞれ古い、あるいは新しいと考えられる土器群であって、共伴関係は認められない。第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器とは遺物包含層出土土器を中心として構成されており、第Ⅲ群土器は堆積層から主に出土している。本遺跡出土の縄文時代前葉の土器はすべて、この3つの土器群いずれかに含まれている。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器に含まれる器形は深鉢A、B、C、D(Ⅰ)、E、F、G、H(Ⅰ、Ⅲ)、K(Ⅰa)、N、0(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲa、b1、Ⅳa、b、c、Ⅵ)類の11器種、これに細部の器形的特徴や文様の有無、文様の種類を加えると27類になる。鉢はA類、壺はBⅡb類、他に台付鉢がある。注口土器は明らかでない。それらの特徴は次表のようにまとめられる。

この中で深鉢FⅡ、GⅡb類は地文だけが施され、他はすべて文様をもつ。文様が施文される部位には5種類みられる。①口縁部から胴部上半、②胴部上半、③胴部、④口縁部と胴部、⑤口縁部である。①は深鉢 0Ⅰ類で、口縁部から胴部上半までが一単位の文様（方形区画文）を構成する。②は深鉢B・C・0Ⅱ類で、口縁部が無文であるが、C類は口縁部が狭く、文様の基点となるボタン状隆線が口縁部に施されている。③は深鉢DⅠ・E・G・HⅠ類で、口縁部は②同様無文だが、DⅠ類やGⅡa類には胴部文様の一部が口縁部に突き出るものもあり、またE類の1点は口縁部に縄文が施されている。④は鉢KⅠa、0Ⅲa、0Ⅲb1類で、口縁部は突起下に限って文様がみられ、他の大部分は無文である。⑤は深鉢 0Ⅳa・b・c類で、胴部に地文が施されている。

文様をもつ土器について器形と文様の関連性をみると、一種類の文様しかみられない器形と数種みられる器形があり、また器形の違いを越えて共通する文様をもつ場合と、一器形に特有の文様であるものなどが認められる。

共通した文様が数器種に施されているものは、方形区画文様、縦位・横位連絡文様、「X」字状・「Y」字状・「V」字状文の3種類がある。方形区画文様は深鉢C、DⅠa、0Ⅰ、0Ⅱa類台付鉢形土器にみられる。深鉢形土器では器形ごとに文様の特徴に多少の違いがあり、C、0Ⅰ、0Ⅱa類は胴部上半あるいは胴部上半から口縁部に施文されるが、DⅠa類では胴下半部まで及んでいる。しかし主な文様が隆線によって描かれる点は共通している。磨消縄文技法の用いられるものが多く、0Ⅱa類は「充塡」他は「磨り消し」である。また方形区画内は地文が施されるものが多いが、胴部破片には櫛状文・渦文などが充塡されるものがあり、C類はクサビ状文

や弧状文、蕨手状文などが磨消縄文技法を用いて描かれている。

連結文様は深鉢ＧＩ、0IIIａ、0IIIｂ1、0VI類の胴部文様として施文されている。異った単位がボタン状隆線を介すなどして連結される文様である。0IIIａ類は「Ｊ」字状文を中心にして横位に連結され、ＧＩ、0IIIｂ1類では上部の「C」字状文や弧状、半円文から下に連結される。連結部にはボタン状隆線が多くみられ、0IIIａ、0IIIｂ1類には3本単位の沈線で文様が描かれるものがある。またいずれも磨消縄文技法（磨り消し）が用いられている。さらに、これらに近似するものにＦＩ類、0IIｂ類、0IVａ・ｂ・ｃ類がある。0IIｂは文様構成が0IIIａ類と類似している。ＦＩ・0IVａ類は文様施文部位が口縁部という点を除けばほぼ同様な文様であり、0IVｂ・ｃ類の「く」字状、「Ｊ」字状文や下垂・弧状隆線は0IIIａ・0IIIｂ1の口縁部文様と同じである。またＫＩａ類についても近似したものと思われる。

「X」、「Y」、「V」字状の文様はＤＩｂ類とＨＩ類にみられる。

このほかに、深鉢E、ＧIIａ類は文様単位全体は判明していないものの磨消縄文技法を用いた曲線文様はＤＩｄ類の渦文に類似性がみられる。

また深鉢A・B、HIII・0VI類鉢形土器ＡＩ・ＡII類、壺形土器には、その器形特有の文様が施されており、ＤＩｃ類は他の文様との共通点が少い。N類は文様の詳細が不明である。

以上第Ｉ群土器の特徴を述べた。この第Ｉ群土器は第II群土器よりは古い後期前葉に属するという土器群である。共伴関係は認められておらず、したがって土器型式的には幅広い時期の土器を含んでいる可能性がある。

第II群土器

第II群土器に含まれる器形の種類は深鉢がD(II、III)、H(II)、Ｉ、Ｊ、K(Ｉｂ、II)、L、M、0(IIIｂ2・3・ｃ・ｄ、V)の8器種、これに文様の有無、基本的な文様の種類を合わせると26類になる。鉢はB・C、D類の3器種、同6類、壺はA、ＢＩ・ＢIIａ・ＢIIｂ類の4器種、注口土器はA・B類の2器種である。その内容をまとめると次表のようになる。なお点数と比率は南側遺物包含層における出土量である。

器形の特徴

深鉢には8種類の器形が認められる。その中でD(II、III)類とM(特にＭＩ)類には口縁部から胴上部だけをみると口縁端部の屈曲や外面の沈線、窓の開いた突起、胴上部外反気味という共通点がある。またＩ類は口縁部が短いだけでほぼH(II)類と同じ器形であり、Ｊ類はH(II)類の胴部に相似する。K・L・M類はいずれも胴部が直線的に外傾している。

第Ｉ群土器と比較すると、D(II、III)類、H(II)類、K(Ｉｂ、II)類、0(IIIｂ1など)類は第Ｉ群土器

第Ⅰ群土器

深鉢

A　類　器形：胴上部張り、頸部鍔状隆線、口縁部外反、突起、把手　　文様：胴上部「C」字・懸垂文、磨消縄文（充塡、磨り消し）(胴下部) 縄文

B　類　器形：胴上部張り、口縁部外傾、外反 ─ BⅠ類—胴部強く張る ─ 文様(胴上部)：連続刺突文
　　BⅡ類—張りが弱い

C　類　器形：胴部中央に稜、以上外反気味、以下外反、外傾　　文様：稜以上、「方形区画文」、対称弧状文、クサビ状文、蕨手状文、ジグザグ文を充塡、(稜以下)縄文
　　磨消縄文（充塡、磨り消し）

DⅠ類　器形：胴部中位くびれ、以上外反、以下脹む　　文様(胴部)DⅠa類：方形区画文、縄文
　　DⅠb類：「X」「Y」「V」字状文、磨消縄文(充塡)、刺突文充塡
　　DⅠc類：三角懸垂文　　磨消縄文(充塡)
　　DⅠd類：渦文　　磨消縄文(充塡)

E　類　器形：胴部脹み、胴上部～口縁部内傾、口縁端部強く外傾、突起・橋状把手　文様(胴部、口縁部と胴部)：単位不明　磨消縄文

F　類　器形：頸部に稜、口縁部くびれて外反、突起胴部わずかな脹み　　文様FⅠ類：口縁部、ボタン状隆線、「J」字状隆線文　(胴部)縄文
　　橋状把手 ─ FⅡ類：胴部、縄文

G　類　器形：頸部丸くくびれ、口縁部外反 ─ GⅠ類—胴上部強く張る　　文様：胴部、ボタン状隆線、盲孔、「C」字連結文他　磨消縄文(磨り消し)
　　GⅡ類—張りが弱い　　文様GⅡa ─ 口縁～胴部、「S」字・平行隆線　磨消縄文(磨り消し)
　　胴部、渦状文　磨消縄文(充塡)
　　GⅡb ─ 胴部、地文（縄文、撚糸文、条線）
　　口縁～胴部、地文

HⅠ・Ⅲ類　器形：頸部「く」字状、口縁部外反、外傾、胴上部内弯　HⅠ類—口縁部内弯気味、端部張る　　文様：胴部、「Y」字文、磨消縄文(充塡)or刺突充塡
　　HⅢ類—波状口縁　　文様：重層・連続楕円隆線文、細縄文・刺突充塡

KⅠa類　器形：口縁部内反気味、頸部稜、胴部直線的に外傾　　文様：口縁部、円形隆線文、胴部、不明隆線文(連結文様？)、縄文

N　類　器形：胴上部～口縁部直線的に外傾、頸部鍔状隆線　　文様：刻目、ボタン状隆線、渦状隆線文、沈線文、縄文

O　類　器形：口縁・胴部わずかな脹みで立ち上がる。OⅠ・Ⅱ・Ⅲa・b1・Ⅳa・b類—平口縁　　文様OⅠ類　：口縁～胴部上半、方形区画文、磨消縄文(磨り消し)or縄文　胴部下半、縄文
(OⅠ・Ⅱ・Ⅲa・b1・Ⅳa・b・c・OⅥ)　　OⅥ　—波状口縁　　OⅡa類　：胴部上半、方形区画文、斜行沈線・襷文充塡もあり　磨消縄文　胴部下半、縄文
　　OⅡb類　：胴部上半「C」字文　（充塡多、磨り消し少）
　　OⅢa類　：口縁部、「C」字状隆線文、胴部「J」字・横位連結文、磨消縄文(磨り消し)　胴
　　OⅢb1類：口縁部、弧状・下垂隆線、盲孔、胴部、上下連結文、磨消縄文(磨り消し)
　　OⅣa類　：口縁部、渦・長楕円文、下垂・「C」字、隆線横位連結文(磨消縄文＝磨り消し)　胴部、縄文
　　OⅣb類　：口縁部、「C」字・「S」字・「J」字・弧状隆線文　胴部、縄文
　　OⅣc類　：口縁部、下垂・弧状隆線文、胴部地文（斜行縄文、撚糸文、条線）
　　OⅥ類　：胴部、連続山形文、横位連結文、磨消縄文(磨り消し)

鉢

A　類　器形：口縁部内弯、胴部外傾　　文様　A(Ⅰ)類：口縁部、楕円、渦状隆線文
　　A(Ⅱ)類：胴上部、横位弧状文、丹塗り

壺　BⅡb類　器形：頸部丸くくびれ、口縁部外反、胴部算盤珠形　　文様：胴部中・上位弧状文

台付鉢　器形：口縁部内反気味、胴部丸味、台直立　　文様：胴部、方形区画文、縄文

と共通する器形である。DⅡ・Ⅲ類はDⅠ類と違って口縁(端)部に装飾が施されており、この点はHⅡ類とHⅠ、HⅢ類との関係でも同様のことが言える。KⅠb・Ⅱ類の場合にはKⅠa類と突起の形態が異っている。また0類は器形が単純であり、変化を見い出すことは難しいが、第Ⅰ群土器に含まれている類は胴上部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反気味であるのに対し、第Ⅱ群土器では同じ特徴のものもみられるが、口縁部まで内弯気味になるものが多い。

これら各種の南側遺物包含層における出土量は0(Ⅲb2・3・c・d、Ⅳc、Ⅴ)が最も多く、これに次ぐM、H(Ⅱ)類とでその大半を占めている。この点からしても3器種が主体を成すのであり、0類は単純な器形であるから別にしても、H(Ⅱ)、M類は第Ⅱ群土器に特徴的な器形と言える。他の少量出土している類では、D(Ⅱ、Ⅲ)類とK(Ⅰb、Ⅱ)類の場合には同様の器形がすでに第Ⅰ群土器に存在しているところから第Ⅱ群土器の中でも古い特徴の器形と言えるかも知れない。

鉢には3種類の器形がみられ、口縁部から胴上部の形態は口縁部の内反するB類が深鉢K類に、頸部が「く」字状を呈するC類が同H類に、直線的に外傾するD類が同M類にそれぞれ相似した特徴をもつ。したがって鉢独自の器形ではなく、深鉢を浅くした形態とみることができる。量的にはC類が最も多い。

壺には4種類の器形がみられるが、A・B類を分ける基準とした大きさの著しい違いは器形の特徴を越えた機能、用途が異ることを想定させる。胴部に上下対の把手をもったBⅡa類が量も多く、代表的な壺形土器である。

注口土器は2種類の器形がみられる。A類は壺形とはいっても胴部の丸味に類似点がみられるだけで、口縁部や突起と一体化した橋状把手の形態などは注口土器独自のものである。これに対してB類は鉢B類とほぼ共通した器形的特徴をもつ。

文様施文技法と地文の特徴

第Ⅱ群土器の文様は隆線・沈線・磨消縄文技法によって主に描かれており、それに盲孔、ボタン状隆線・刺突・刻目が加えられることがある。

ボタン状隆線は盲孔を施す際にその周囲に粘土を盛り上げたという程度のもので、第Ⅰ群土器で多用される「貼り付け」的な技法を用いてはいない。

隆線は単なる隆線、上部に沈線が引かれて平行隆線的なもの、刺突や刻目が施されるもの、細長い刺突が施された連鎖状隆線などがみられる。ほとんどの場合深鉢HⅡ類や0各類鉢形土器BⅠ、CⅠ類などの口縁部文様や頸部区画線として使用されるが、刻目付隆線は深鉢DⅡ2類とMⅠc2 類の胴部文様にまれに使用される。また壺BⅡ類では胴部の上下対になる把手間を結ぶ平行隆線として施されている。

沈線は1・2条単位あるいは3条以上を単位とする多条沈線とがあり、多条沈線にはまれに

沈線外を調整することがあるが、他の大半は沈線内外ともほとんど調整を施さない。

1・2条沈線で描かれる文様の多くは磨消縄文技法が用いられているが、縦長単位並列文様の1条沈線による連続S字文、ジグザグ文、破線文や2条沈線による下垂区画線間充塡文様には使用されていない。ほかの蕨手文をはじめとする縦長単位文様にみられる磨消縄文は深鉢形土器MII類の中に1点だけ「充塡」があり、他はすべて「磨り消し」である。幅広単位文様の場合には器形によって違いが認められ、深鉢形土器（0IIIc類など）では「磨り消し」と「充塡」両者が、鉢（CIb類）と壺では圧倒的に「充塡」が多い。横位展開文様も同様で深鉢形土器（HIIb類など）や注口土器では両者があって「磨り消し」が多く、鉢形土器は「充塡」が大半である。

多条沈線文様はほとんどが単に縄文を地文として沈線が引かれているが、深鉢DIIa類の下垂線区画文様やHIIc2 類の横位展開文様の中にはまれに磨消縄文の用いられるものがあり、いずれも「充塡」である。

地文は斜行縄文（原体LR、RL、L、R）、撚糸文（L、R）、網目状撚糸文（L、R）、櫛歯状条線、条線などがあり、斜行縄文・LRが大半を占め、他はいずれも少ない。櫛歯状条線にはS字状の曲線、下垂・斜行を組み合わせて文様的効果を生じているものもある。

文様の特徴

地文以外の文様が施文されている土器について、その施文部位をみると深鉢HII類、L類、0III(b2・3・c・d)類、鉢CI類には2種類みられる。このうち深鉢L類はいずれも小破片で不明な点が認められるので除外すると、他は口縁部と胴部に文様をもつ場合と口縁部は無文で胴部にのみ文様が施文されているものとである。深鉢HII類と 0III(b2・3・c・d)類では前者の方が圧倒的に多いのであり、口縁部に施される文様が口縁部全体にではなく突起下などその一部に限られて、それ以外の部分は無文であるという施文文様の内容が関連して後者の場合には口縁部文様が単に省略されているとみることができる。鉢CI類はこれとは逆に口縁部文様をもたない方が多い。そして施文されているものでも、深鉢HII類に較べればかなり簡略化されている。

口縁部の文様

口縁部に施されている文様は、深鉢HII類の中に口縁部全体に認められるものが少量ある以外はすべて前述のように口縁端部に横位、あるいは口縁部の一部（主に突起下に）に施されるだけで、口縁部の大部分は無文である。したがってごく単純な文様が多く、次のような種類がみられる。

隆線文（隆線、平行隆線、連鎖状隆線、沈繰入隆線、弧状隆線、ボタン状隆線）

沈線文（沈線、凹み状沈線、平行沈線、弧状沈線、波線、方形沈線、）

総点数　口縁部 6,524点

深鉢（口縁部 5,796点　88.8%）

- **DⅡ・Ⅲ類**　胴中位くびれ、以上外反、以下張る（口縁部52点）
  - DⅡ：口縁～胴部　下垂線区画文様
    - DⅡa—2条沈線（＝矢羽根状文、渦文）、地文なし
    - DⅡb—多条沈線（＝連続弧状文）
      - 地文（斜行縄文）
      - 磨消縄文（充填）
    - ……4・8単位
  - DⅢ：口縁端部　DⅢ：口縁端部　刺突文、口縁～胴部（地文）、斜行縄文
- **HⅡ類**　頸部「く」字状くびれ、口縁部外反、外傾　胴上部内弯（口縁部1,017点）
  - ○口縁・胴部に文様（多）　（口縁部）下垂・弧状隆線文、下垂平行沈線文、横位沈線文、刺突、刻目—まれに地文（斜行縄文）
  - ○口縁部無文、胴部文様（少）　（胴部）HⅡa—縦長単位文様＝(ⅲ)蕨手文、(ⅱ)蕨手類似文、(ⅰ)楕円・対称弧状文—磨消縄文（磨り消し）……6・8単位
    - HⅡb—横位展開文様＝(ⅱ)入組渦文、(ⅰ)渦・楕円入菱形文・楕円文、(ⅲ)渦付三角文—磨消縄文（磨り消し多、充填少）……3・4・6単位
    - HⅡc—多条沈線
      - HⅡc1—縦長単位文様＝円・半円弧状文—地文（斜行縄文多、撚糸文少）
      - HⅡc2—横位展開文様＝入組渦文（連絡渦文）—地文（斜行縄文）、まれに磨消縄文（充填）
      - 4・8単位
- **Ⅰ類**　頸部「く」字状くびれ、口縁部短く外傾（口縁部6点）　胴上部内弯
  - 口縁部　平行沈線、刺突
  - 胴部　多条沈線縦長単位文様＝円・半円弧状文—地文（斜行縄文）
- **J類**　胴上部～口縁部内弯（口縁部10点）
  - Ja　：口縁部無文、胴部　横位展開文様　＝楕円・三角文—磨消縄文（磨り消し）
  - Jb　：口縁～胴部　多条沈線横位展開文様＝連絡渦文—地文（斜行縄文）
- **KⅠb・Ⅱ類**　口縁部内反気味、頸部稜、胴部直線的外傾（口縁部88点）
  - KⅠb：口縁部盲孔、弧状隆線、下垂沈線、胴部——　縦長単位文様＝(ⅲ)「T」字連絡、蕨手文、(ⅰ)下端連絡楕円文—磨消縄文（磨り消し）
    - (ⅳ)ジグザグ文—地文（斜行縄文）
    - ……4・8単位
  - KⅡ　：口縁部無文　胴部地文（斜行縄文
- **L類**　口縁部内傾、頸部稜、胴部直線的外傾（口縁部36点）
  - ○口縁部方形沈線—地文（斜行縄文）胴部地文（斜行縄文）
  - ○口縁部無文　胴部沈線文＝蕨手文など—磨消縄文（磨り消し）
- **M類**　口縁～胴部直線的外傾（口縁部309点）
  - MⅠ（口縁端肥厚、内面段、外面沈線）　MⅠ　口縁～胴部
    - MⅠa—幅広単位文様＝「y」字・連続楕円、破線文、渦付懸垂文—磨消縄文（充填、磨り消し）
    - MⅠb—横位転開文様＝(ⅰ)楕円・三角文、(ⅱ)渦付三角文、(ⅲ)連続山形文—磨消縄文（充填、磨り消し）、地文（斜行縄文まれに網目状撚糸文）
    - MⅠc—多条沈線
      - MⅠc2—下垂線区画線間充填文様＝斜行線文—地文（斜行縄文）
      - MⅠc1—縦位単位並列文様＝円・半円・弧状文、まれに刻目隆線—地文（斜行縄文）
      - 4・6・8単位
  - MⅡ（口縁端削がれたように三角）　MⅡ　口縁部無文、胴部縦長単位文様＝(ⅰ)楕円文、(ⅱ)蕨手文、(ⅲ)蕨手類似文、(ⅳ)鉤状文、平行線文—磨消縄（磨り消し多、1点のみ充填）
    - (ⅳ)破線文、ジグザグ文—地文（斜行縄文）、1点のみ地文なし
- **O類**　（OⅢb2・b3・c・d・Ⅳc・Ⅴ）　口縁～胴部わずかな張み（口縁部4,366点）
  - OⅢb2・b3・d　○口縁・胴部に文様（多）　口縁部　弧状・下垂隆線・沈線、盲孔、ボタン状隆線
    - ○口縁部無文／胴部文様（少）
    - 胴部　OⅢb2：縦長単位文様＝(ⅰ)円・半円・楕円・「U」字文、(ⅱ)蕨手文、(ⅲ)蕨手類似文、鉤状文—磨消縄文（磨り消し）
      - まれに条線地文
      - （平行線上部肥大）
      - 縄文は斜行縄文多
      - 撚糸文、網目状撚糸文少
      - 4・8単位
    - OⅢb3：縦長単位文様＝（単純下垂文様）
      - ○平行沈線文—磨消縄文（磨り消し）
      - ○連続「S」字文、ジグザグ文、破線文—地文（斜行縄文）
    - OⅢc：幅広単位文様　＝楕円・「T」字文、横位弧状文、「八」字文など—磨消縄文（磨り消し多、充填少）
      - ……4単位
    - OⅢd：多条沈線
      - OⅢd1—縦長単位文様＝円・半円弧状文—地文（斜行縄文）
      - OⅢd2—下垂線区画文様＝斜行線文—地文なし
      - OⅢd3—横位展開文様＝楕円・三角文—地文（斜行縄文）
  - OⅤ　：口縁or胴部地文のみ
    - OⅤa—頸部区画線有、口縁部無文、胴部地文
    - OⅤb—頸部区画線なし
      - 口縁部無文、胴部地文
      - 口縁～胴部地文
      - 地文（斜行縄文大半、撚糸文、櫛歯状条線、条線ごく少）

鉢（口縁部580点8.8%）

B類　口縁部内反、頸部稜、胴部直線的外傾　B Ⅰ：口縁部無文、胴部渦付山形文―地文（斜行縄文）、単位不明横位展開文様―磨消縄文（磨り消し）　……4単位あり

（口縁部13点）　B Ⅱ：口縁部無文 or 下垂隆線文、胴部地文（斜行縄文）

C類　頸部「く」字状、口縁部外反、外傾、胴上部内弯　C Ⅰ：口縁部無文 or 下垂隆線／胴部―C Ⅰa―横位展開文様＝(i)入組渦文、(ii)渦付三角文、(iii)多条沈線風入組渦文
　　＼文様　C Ⅰb―幅広単位文様＝方形沈線文、渦文、「コ」字文、渦付三角文など　｝磨消縄文（充塡多、磨り消しごく少）……
　　……2・3・④・5・7単位

（口縁部566点）　C Ⅱ：口縁～胴部地文（斜行縄文）

D類　口縁～胴部直線的外傾　口縁～胴部、蕨手類似文―磨消縄文（磨り消し）

（口縁部1点）　（縦長単位文様）

壺（口縁部47点0.7%）

A類　大形―胴部○ソロバン玉形　―胴上部、横位展開文様＝渦付三角文―磨消縄文（充塡、磨り消し）、胴下部地文（斜行縄文）　｝3・4単位
　　＼○球形　―胴部、横位展開文様＝入組渦文―磨消縄文（充塡）

B類　小形　B Ⅰ：所謂、無頸　胴上部、横位展開文様＝渦付三角文―磨消縄文（充塡）、胴下部、地文（斜行縄文）　……3単位

　　B Ⅱ：有頸　B Ⅱa―口縁部直立、胴部丸味　胴上部、幅広単位文様＝渦付三角文＜磨消縄文（充塡）／地文なし、丹塗り　胴下部無文……2単位

　　（B Ⅲ）：　胴上部平行・H状隆線文―磨消縄文？　胴下部、地文（斜行縄文）

注口土器（口縁部101点1.7%）

A類　壷形　A Ⅰ：胴上部内弯　胴部、横位展開文様―渦付三角文、渦文、楕円文―磨消縄文（充塡、磨り消し）　｝2単位
　　＼重弧状沈線文―地文なし

　　A Ⅱ：胴上部内傾　胴部、縦位文様＝連続S字文―地文（縄文）
　　（幅広単位）

B類　鉢形　B Ⅰ：口縁部、渦文・長楕円文、胴部、横位展開文様＝単純入組渦文―磨消縄文（磨り消し）…3単位

　　B Ⅱ：口縁部、無文、胴部、地文（斜行縄文）

盲孔・刺突・刻目

胴部あるいは口縁部から胴部にかけて施文される文様

施文技法の違いによって、1・2条の沈線で描かれる文様と多条沈線による文様とに大別することができ、前者はさらに①縦長の単位が並列する文様（縦長単位文様）、②幅広い単位が並列する文様(幅広単位文様)、③横位に展開する文様(横位展開文様)、④下垂線区画の間に充塡する様(下垂線区画文様)という文様構成の種類がみられる。後者は多条沈線という技法上の特徴もあって文様構成の明らかな個体は少いが、大まかには①下垂線区画文様、②縦長単位文様、③横位展開文様とがある。

1・2条沈線による①は蕨手文に代表される文様で、大半は磨消縄文（縄文後磨り消し）技法を用いるが、ジグザグ文など1条の沈線が下垂する文様はそれを用いていない。②は文様単位の種類が多く、個体ごとに異ると言える程である。磨消縄文技法を用いており、「充塡」と「縄文後磨り消し」の両技法がみられる。③は入組渦文などであり、①・②のように文様単位が独立せず、横位に連らなって描かれる。磨消縄文技法が用いられ、②と同様に「充塡」と「縄文後磨り消し」とがある。④は1・2条一組の沈線で描かれ、地文が施されないものと磨消縄文（充塡）技法を用いたものとがある。

多条沈線文様の場合には 1・2 条沈線ほど明瞭な区分とは言えないが、①の下垂線区画文様は1・2条沈線文様の④に、②の縦長単位文様は同①に、③は同③にそれぞれ共通性をもつ文様構成とみることができる。②・③は縄文などの地文は施されるものの磨消縄文技法はみられない。①の場合には磨消縄文（充塡）が用いられるものもある。

器形と文様

前述した文様の種類と器形の関係をみると表のようになる。

		深鉢									鉢			壺			注口		
		DⅡ	HⅡ	I	J	KIb	L	MⅠ	MⅡ	O	BⅠ	CⅠ	O	A	BⅠ	BⅡa	AL	AⅡ	B
1・2条沈線文様	①縦長単位文様		㊙			○	⑦	⑦	㊙	㊙			⑦						
	②幅広単位文様						⑦	㊙		㊙		㊥			○	○		○	
	③横位展開文様		㊙		㊙			㊙			○	㊙		○			○		○
	④下垂線区画文様	○																	
多条沈線文様	①下垂線区画文様	㊙						㊙		㊙									
	②縦長単位文様		㊙	○				㊙		㊥									
	③横位展開文様		㊙		○					㊙									

またこのほかに、口縁部の一部にのみ単純な下垂文様のみられる新鉢形土器0Ⅳc類がある。

※　新鉢KⅡ、0Ⅳ類、鉢BⅡ、CⅡ類、注口土器B類の一部は地文あるいは無文。

この表で単的に言えることは多条沈線文様が深鉢だけに施文される文様であり、他の鉢や壺、注口土器には全くみられない点である。まれに鉢CⅠ類の入組渦文のように多条沈線文様的にみえるものもあるが、この文様の場合でも2条の沈線で描かれた入組渦文と文様帯の空間を埋めるように加えられた三角文が一体となった結果生じた効果であって深鉢のものとは異っている。また鉢・壺・注口土器では鉢形土器のD類を除き、幅広単位文様と横位展開文様とに限定されている。

おのおの器形に施文されている文様は、深鉢Ⅰ、KⅠb類、鉢BⅠ、D類、壺各類、注口土器各類が1種類であり、他は数種類認められる。後者の場合でも器形ごとに数種類の文様の中で特に主体的、特徴的なものがあり、そしてその文様がいくつかの器形に共通している。

1・2条沈線による文様では縦長単位文様を主体とするもの、およびそれだけがみられるのは深鉢0Ⅲb2・3類とM、KⅠb、HⅡ類、鉢D類で、同幅広単位文様は深鉢0Ⅲc、M類、壺B(Ⅰ、Ⅱa)類注口土器AⅡ類、同横位展開文様は深鉢HⅡ、J、M類、鉢BⅠ類、壺A類、注口土器AⅠ、B類であり、1・2条沈線による下垂線区画文様を主体とする器形はない。鉢CⅠ類では横位展開文様と幅広単位文様の両者が特徴的である。

多条沈線文様は深鉢DⅡ類で下垂線区画文様が主体的であり、またⅠ類には縦長単位文様だけが施され、これ以外は深鉢HⅡ、J、M、0（Ⅲd）類に少量づつ認められる。

1・2条沈線による縦長単位文様（第470・471図）

深鉢0類（0Ⅲb2・3類）では突起下などに施される主な文様が縦位平行沈線の上部が肥大する文様であるもの（0Ⅲb2類）と単に下垂する文様だけが施されるもの（0Ⅲb3類）とがあって、前者には肥大部がⅰ：円・半円・「U」字状文になるものとⅱ：蕨手類似文・鉤状文、ⅲ：蕨手文が、後者には連続「S」字文、ジグザグ文、平行線文、破線文などがみられる。また前者には主要単位の中間にさらに1単位が加えられている場合がある。

ⅰの文様は肥大部が第Ⅰ群土器の深鉢0Ⅲb1類に類似し、ⅰやⅱの文様が個体ごとに肥大部から平行沈線への移行部などに多少の違いが認められるのに対しⅲはいずれも全く同一の文様が施文されているのである。またⅱはⅰ・ⅲより数は少く、ⅱよりⅲに似てはいるが、より変化が多い。文様ⅰのつく土器は頚部の区画線、口縁部文様が隆線や隆沈線で描かれるものが多く、ⅱとⅲでは沈線が主である。

深鉢K(Ⅰb)、M(Ⅱ)類の場合には平行線の上部が肥大する文様と単に下垂する文様のほかには文様単位下端を横位に連絡するものがあり、0Ⅲb2類と同様の蕨手類似文も認められる。

深鉢HⅡ(a)類には単に下垂する文様が少なくて、縦長の楕円・対称弧状文、連絡渦文と蕨手類似文、蕨手文とがみられ、楕円・対称弧状文には単位間を下端で連絡するものがあり、連絡渦文は、渦を斜行線で連絡している。

このように縦長単位文様にはさらに数種類があり、その中で蕨手文は各器形に共通して全く同一と言ってよい単位が描かれている。単に下垂する文様はごく単純な単位のために変化をとらえることができない。このほかの文様は器形ごとの特徴を示しているものと思われる。

また単に下垂するジグザグ文、平行沈線文などは単位としては第Ⅰ群土器の深鉢 0Ⅲb1 類にみられる連結文様の中間に施される場合もあり、第Ⅰ・第Ⅱ群の両土器群に共通する文様単位である。したがって 0Ⅱb3 類と分類された土器でも特に破片ではいくつか第Ⅰ群土器に属するべきものが含まれている可能性がある。

1・2 条沈線による横位展開文様（第 472 図）。

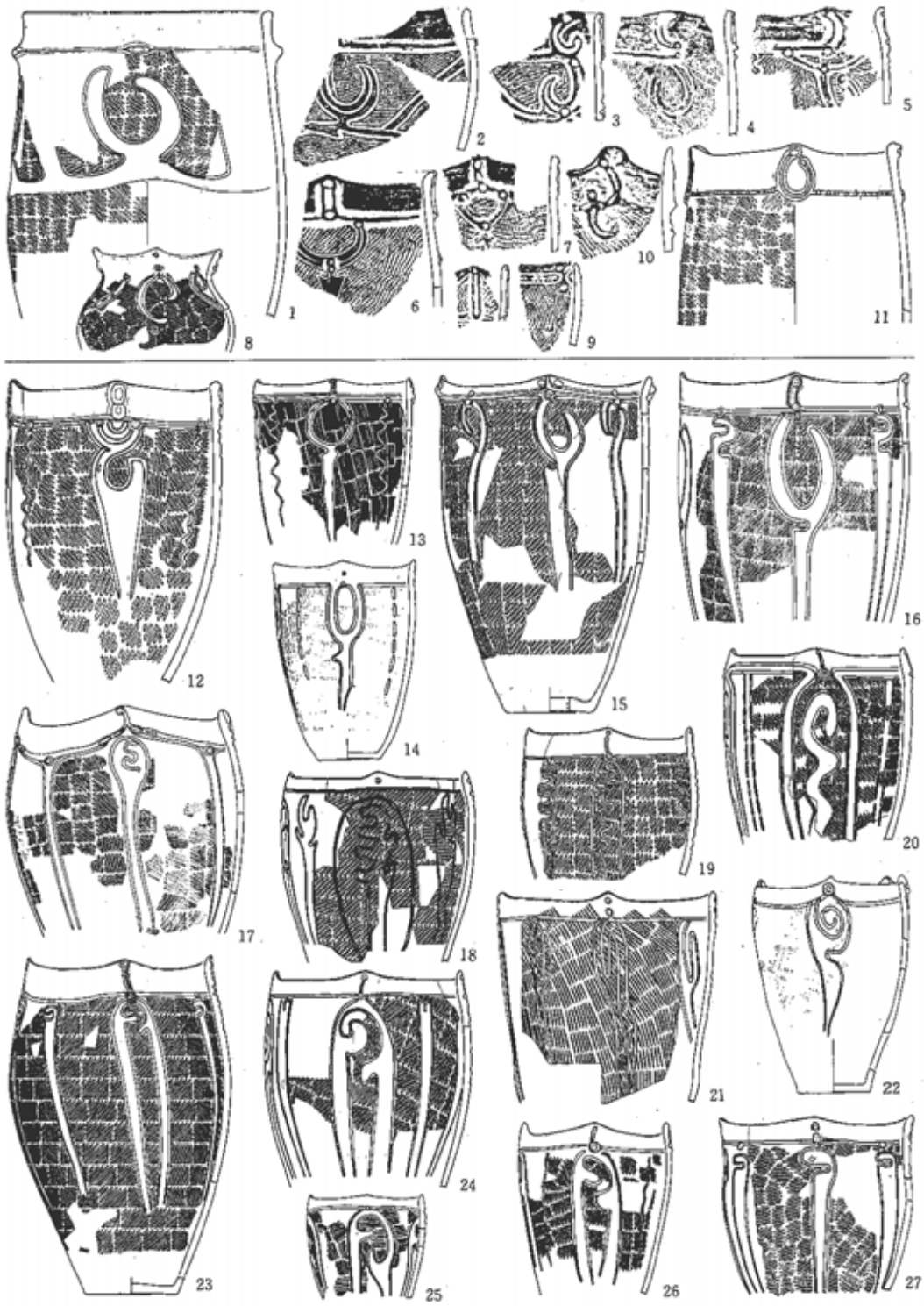
深鉢HⅡ(b)類、J(a)類の横位展開文様は楕円入菱形文、渦入菱形文、楕円三角文、入組渦文、渦付三角文、流水状文などがある。この中で楕円・渦入三角文は文様単位とともに単位の上下幅が狭く、胴上部に施文されている点で共通し、それに対し、他は胴部全体に描かれているという違いがある。しかし楕円入菱形文は単位の幅が広がると楕円三角文とほぼ同様な文様であり、入組渦文はまた楕円三角文に似た文様効果が生じている。流水状文についても同じことが言える。また渦付三角文は、胴上部に三角形が重なることによって長方形的な区画となる文様も含まれており、これを介在させることによって渦入菱形文との共通性が明確になっている。なお、渦入三角文や楕円文などには文様を分解すると各単位が独立しており、それが集合した形で文様を構成しているものがあるが、単位が重複して組み合わされて一連の文様となっている点で幅広単位文様とを区別している。

鉢ではＢⅠ類とＣⅠ(a)類にみられる。ＢⅠ類の横位展開文様は横位の単純な弧状線が中ほどで反転あるいは入組渦状になる。ＣⅠａ類の場合には深鉢HⅡｂ類に対応した形の入組渦文と渦付三角文があって、中には深鉢の文様よりも簡略な印象を受けるものもあり、また入組渦文には並行する沈線間に縄文が施されずに多条沈線文様風の文様が含まれている点は深鉢と異っている。

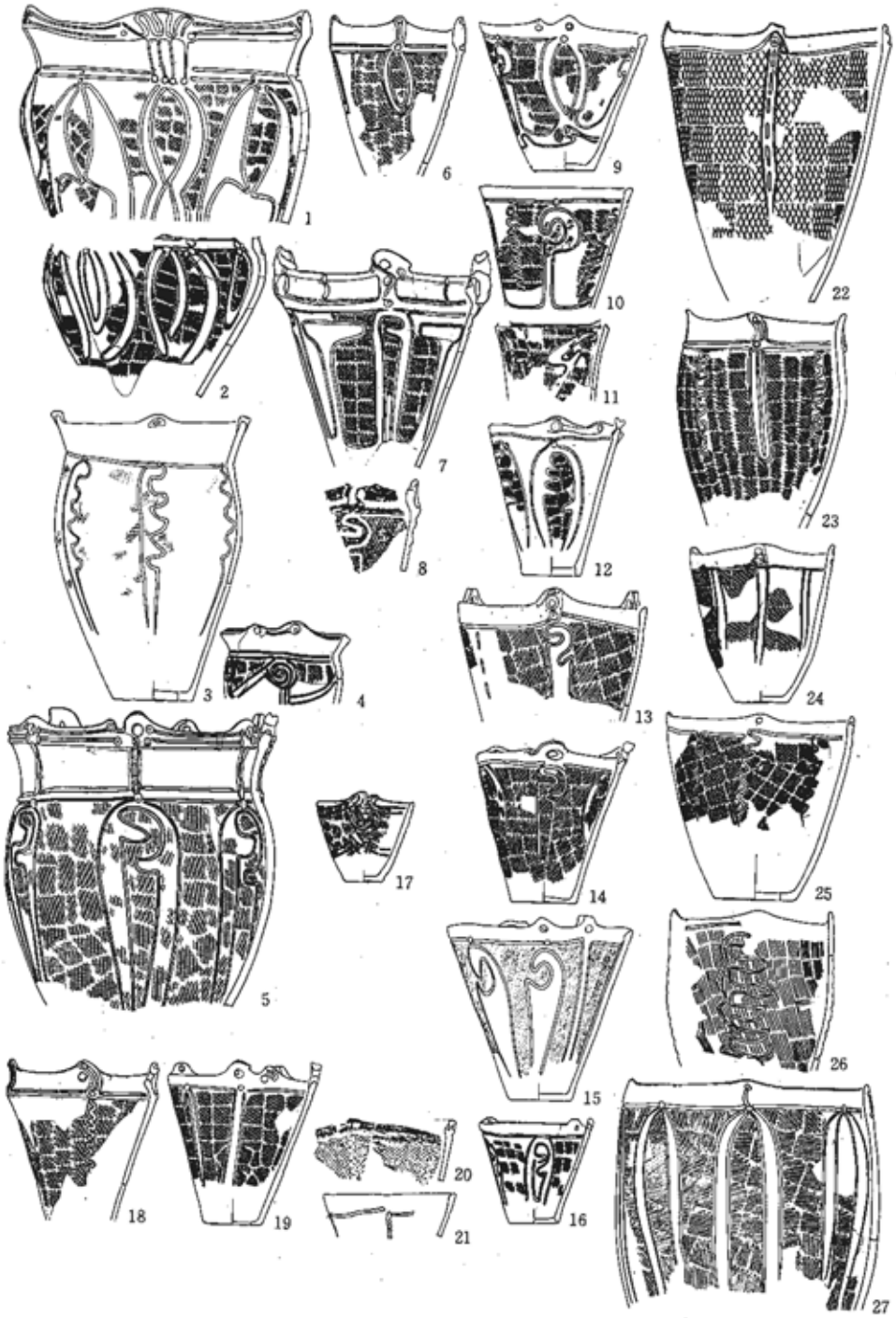
このほかの器形ではいずれも少量づつ認められる。深鉢MⅠｂ類にはHⅡｂ類に対応した楕円三角文と渦付三角文のほかに連続山形文がある。壺形土器（A類）と注口土器（ＡⅠ、B類）の場合には渦付三角文や入組渦文もみられるが、総じて深鉢・鉢とは共通点をもってはいるもののこの器形独特の文様となっている。その中で注口土器B類は鉢ＢⅠ類と同様の単純な入組渦文をもつ。

1・2 条沈線による幅広単位文様（第 473 図）。

深鉢M(Ⅰａ)、0Ⅲｃ類、鉢CⅠ(ｂ)類、壺(Ⅰ、Ⅱａ)類、注口土器AⅡ類にみられるが、深鉢、注口土器と鉢・壺とでは文様単位に大きな違いがある。鉢・壺では渦文・渦付三角文・三角文・「コ」字状文など単位の種類は多いが、いずれも単純な区画の文様である。これに対して深

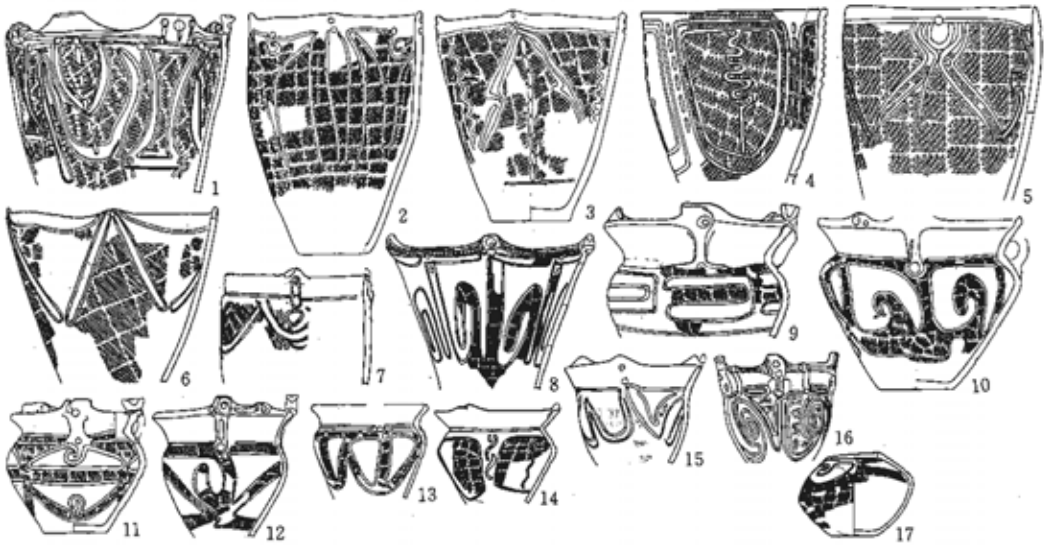


第470図　第Ⅱ群土器



第471図　第Ⅱ群土器

第472図　第Ⅱ群土器



第473図　第Ⅱ群土器

鉢・注口土器は四角文や三角文などの文様も少量あるが、このほかは縦長単位文様の平行線部分を「ハ」字に開いたり、斜位に施文した文様で、まとまりをもった特徴が認められない。

1・2条沈線による下垂線区画文様（第474図6）。

この文様は深鉢DⅡ類に数点みられるだけである(DⅡa類)。2 条単位の沈線で文様が描かれる点を除けば以下に述べる多条沈線文様と全く同じである。したがって本来的にこの文様構成は多状沈線によってのみ施されるとして差しつかえないと思われる。

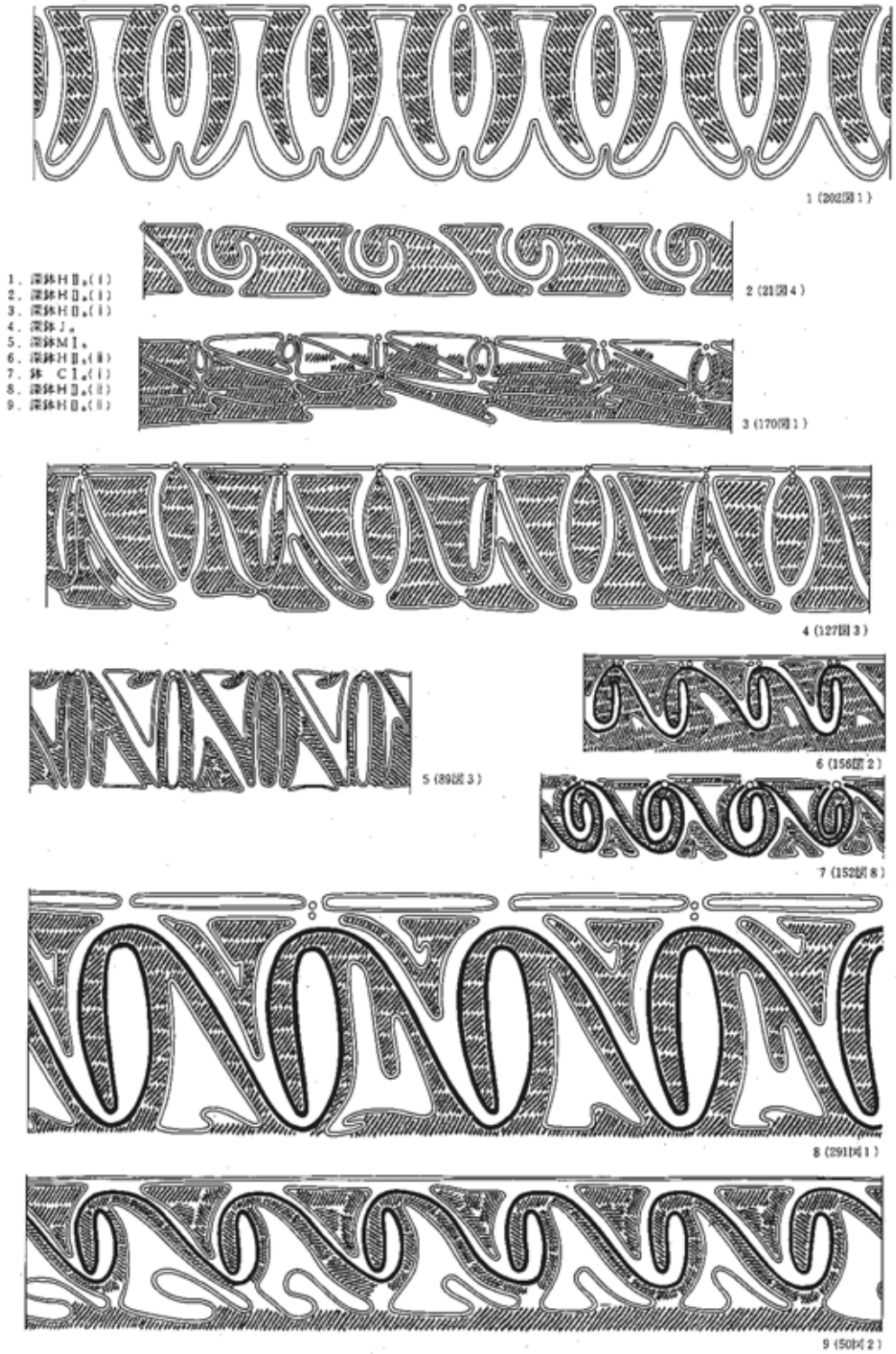
多条沈線による下垂線区画文様（第474図）。

深鉢DⅡ(b)、M(Ⅰc)、0Ⅲa類にみられる。区画内に斜行線が交互に充塡される単純な文様と、斜行線が連続して縦位の山形を成し、上下端で反転沈線によって下垂線と連絡されるもの、弧状、斜行線が数回くり返され、その一部を連絡して三角形や多角形を描くものの三者がみられる。

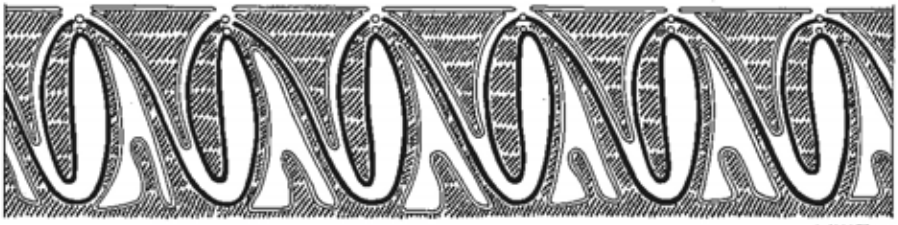
多条沈線による縦長単位文様（第474図）。

深鉢HⅡ(c)、Ⅰ、M(Ⅰc)、0Ⅲd類にみられる。いずれも弧状線の組み合わせで文様が描かれているが、大きく分けると上部に円や半円があってそれから弧状線が下垂するものと、単位全体が同じ弧状線で描かれるものとがある。前者には各単位が完全に独立して並列する場合と、単位間に斜行線が施されて一部連絡する文様とがある。1・2条沈線の縦長単位文様（上部が肥大する文様）に共通性が認められる。後者の中でも対称な弧状文や連続楕円文は1・2条沈

第474図　第Ⅱ群土器



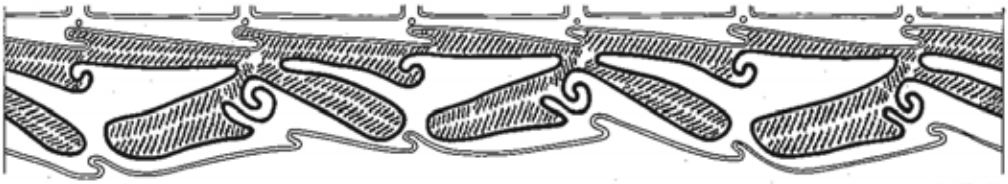
第475図　文様展開模式図



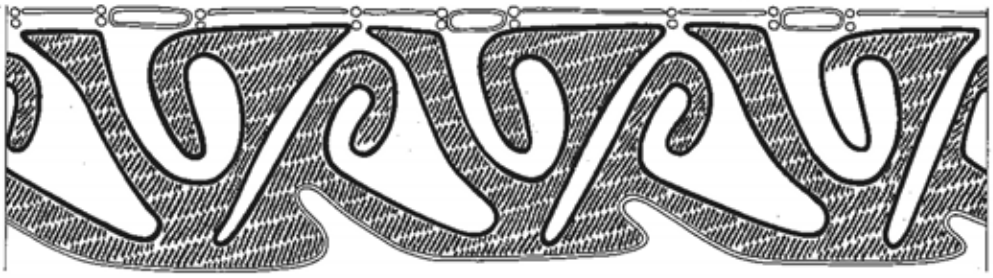
1（111図1）

2（184図17）

3（199図1）



4（50図1）



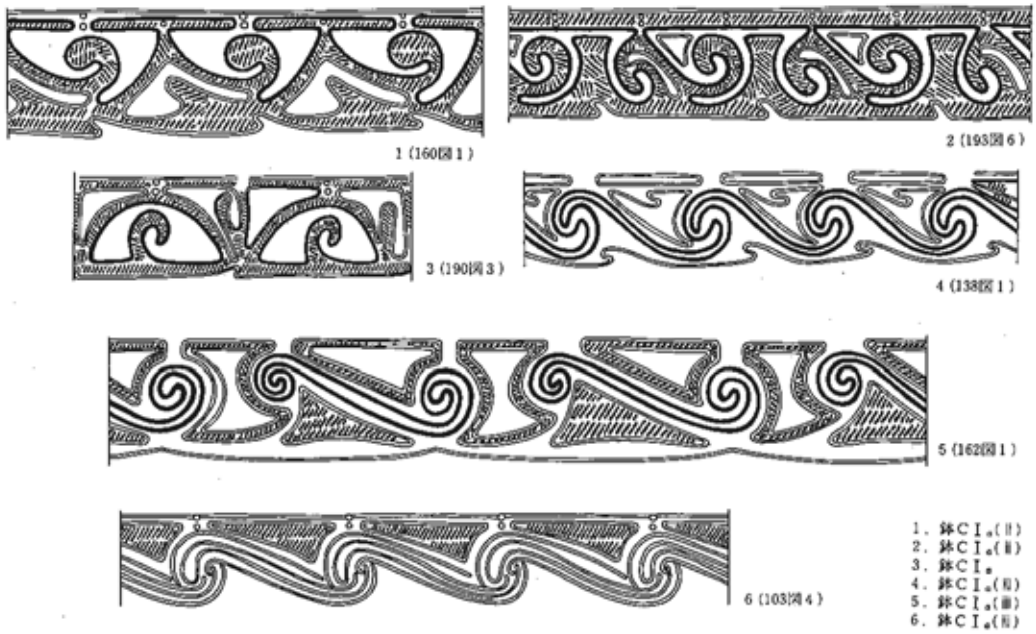
5（285図1）

6（104図4）

7（103図6）

1．深鉢Ⅱ$_a$（Ⅱ）
2．鉢Ⅰ$_a$（Ⅱ）
3．鉢Ⅰ$_a$（Ⅱ）
4．深鉢Ⅱ$_a$（Ⅲ）
5．深鉢Ⅱ$_a$（Ⅲ）
6．鉢Ⅰ$_a$（Ⅱ）
7．鉢Ⅰ$_a$（Ⅱ）

第476図　文様展開模式図



第477図　文様展開模式図

線に多数の半円がつく文様は多条沈線によってのみ描かれている。

多状沈線による横位展開文様（第474図）。

深鉢HⅡ(c)、J(b)、0Ⅲd類にみられる。数は少いが、1・2 条沈線による横位展開文様に対応するように楕円三角文と、入組渦文および渦文を横位に連絡した文様とがある。後者にはまた文様帯の空間に弧状線などを加えて複雑にみせているものと、それが施されていない単純なものとがある。

第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器に含まれる土器はごく少量で、深鉢がⅠ・Ⅱ・Ⅲの3種のほかは浅鉢、壺、注口土器が各数点あるに過ぎない。文様の面からみると3種に分けられる。2条単位の沈線によって磨消縄文（充塡）技法を伴った区画文様が描かれるものにはⅰ：深鉢Ⅰa類にみられたような直線の組み合わせによる三角文と、ⅱ：壺にみられる曲線的な渦文や流水状文とがある。また沈線間の近接した多条流線や櫛歯状沈線によって描かれる文様には、ⅲ：深鉢Ⅰc類やⅡ・Ⅲ類のように横位・縦位の沈線が組み合うものとがある。この類には地文（縄文）が施されるものと、施されないものとがある。

器形と文様の系統性について

第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲの各土器群は内容に明確な違いが認められるものともに、個々の器形や文様の特徴では関連性が見い出せる点も少くない。したがって、ここでは各群の特徴を比較検討し、さらにそれを中期末葉から後期前葉にかけての土器変遷過程に位置付けることによってより細かな系統性をさぐってみたい。

第Ⅰ群土器

器形

深鉢の11種の器形はほとんどが宮城県内における大木10式土器の中から生まれたとみることができる。大木10式の最終段階の土器組成が必ずしも明らかにされていない現在、系統的なつながりに多少難しい点が残るが、大木10式第Ⅲ段階(丹羽茂：1981)に比定されている西ノ浜貝塚第4層出土土器（後藤勝彦：1967）と比較してみると、Ａ・Ｂ・Ｅ類を除けば直接的あるいは大木10式第Ⅳ段階を経ていくぶん変化したとみて無理がないと思われ、多用される山形の突起も同様である。その中でＧⅡａ類のねじれた橋状の突起、楕円を連ねたような鉤り手やＫⅠａ類の筒状の突起、0Ⅱａ類の「8」字状を描く突起は第Ⅰ群土器の特徴といえるだろう。

Ａ類については沼津貝塚（三塚・阿部・佐藤：1976）、青木畑遺跡（加藤道男：1982）をはじめとして宮城県北部からそれ以北に多く分布する器形であり、当該地域の大木10式末葉の土器群が明らかにされることによって出現の系譜が把握されるものと思われる。Ｂ類は胴上部が張る点などＡ類との類似点もみられ、施文技法もまた大木10式から認められており、県内の後期初頭の遺跡から普遍的に発見されている類であるから当地方で生まれた可能性がある。Ｅ類は本遺跡での出土点数がごく少く、類例もみられない。

文様

第Ⅰ群土器の文様は、複数の器形に共通するものに①方形区画文、②連結文とそれに類する「Ｃ」字状文、「Ｊ」字状文、③「Ｘ」・「Ｙ」・「Ｖ」字状文があり、ほかに④単一の器形にのみ施文される文様がみられる。

①方形区画文様は深鉢Ｃ、ＤⅠａ、0Ⅰ、0Ⅱａ類、台付鉢に施されている。深鉢Ｃ類では方形区画内に充塡される単位がクサビ文のもの(ａ)と対称弧状線、ジグザグ文、蕨手状文(ｂ)の場合とがある。深鉢ＤⅠａ類の方形区画文は胴部の上下二段に施文されて、その交叉部がさらに四角を成すという特異な文様である。深鉢0Ⅰ・0Ⅱａの類、台付鉢では方形の区画線だけが施されるという共通点がある(ａ)が、そのいずれかに属すると思われる胴部破片には区画内に襷文の入るもの(ｂ)もある。これら方形区画文は隆線を用いて描かれ、区画内に充塡される単位

は沈線文である。またＤＩａ類を除いて器上半に施文されるという特徴をもっている。

深鉢０Ⅰ・０Ⅱ類、台付鉢の文様ａは中期大木 10 式との識別が難しく、また深鉢ｃの文様は②で述べるように文様ｂより古い要素とみられることから、これら深鉢ｃ類文様ｂへの変化が考えられる。このほかは出土点数が少いこともあって位置付けが困難である。

②連結文と「Ｃ」・「Ｊ」字状文は大半が深鉢０類（０Ⅱｂ、０Ⅲａ、０Ⅲｂ1、０Ⅳａ・ｂ、０Ⅵ）の器形に施され、ほかにはＦ(Ⅰ)、ＧⅠ、ＫⅠａ類に少量みられる。この中ではａ：０Ⅱｂ類の「Ｃ」字文と、ｂ：他の類の文様とに分けることができ、文様ａはより大木 10 式に、文様ｂは第Ⅱ群土器に近い特徴をもち、特に文様ｂの上下連結文様(０Ⅲｂ1 類)などは深鉢０Ⅲｂ2 にごく近似して単位が連結されているか否かの違いで分割されるのである。また方形を画文の充塡単位であるクサビ文(深鉢Ｃ類文様ａ)は、充塡単位が独立すれば半円と連結して連結文様（②の文様ｂ）へ変化したとみることができる。また蕨手状文は蕨手文とごく近い形の単位である。

③、「Ｘ」・「Ｙ」・「Ｖ」字状文は深鉢ＤＩｂ、ＨＩ類にみられる。系統の異る土器である。福島県南部から関東にかけて多く分布する。

④は上記①～③以外の深鉢Ａ、Ｂ、ＤＩｄ、Ｅ、ＧⅡａ、ＨⅢ、Ｎ、０Ⅵ類、鉢Ａ類に施されている文様である。深鉢Ａ類は他地域の系統に属する土器であり、深鉢Ｂ類は大木 10 式土器にみられる区画内を埋める連続刺突文から変化したと考えることが可能である。深鉢ＤＩｄ類の渦文は第Ⅱ群土器の渦文と類似点をもつ。深鉢Ｅ類は文様が不明確なものの、「Ｊ」字状文に類した単位と思われる。また鉢Ａ類の隆線楕円文は器形からの制約を受けて文様帯の幅が狭められている点を考慮すれば方形区画文との共通性が認められ、横位弧状文は第Ⅱ群土器の鉢ＢⅠ類や注口土器Ｂ類に施されている単純な入組渦文との関連が考えられる。このほかの深鉢ＨⅢ、Ｎ類や０Ⅵ類の連続山形文などは、文様が特異であり、また小破片であることなどから、位置付けを明確にできない。

以上のように第Ⅰ群土器に施文されている文様にはより大木 10 式土器あるいは逆に第Ⅱ群土器に近い特徴をもつものがあり、この点からみれば前者が古い要素をもち、後者は新しい要素をもつと考えることができ、共伴関係の認められていない第Ⅰ群土器内部の違いであるからそれが時間差に起因するものかどうかについては全く根拠をもたないが、次の第Ⅱ群土器への変化を考えやすいものとして肥えておきたい。

第Ⅱ群土器

器形

第Ⅰ群土器においてそのほとんどが県内での大木 10 式から生まれた器形と考えることができた。それをさらに第Ⅱ群土器への変化という視点に立つと、類した器形が第Ⅱ群土器に引き継

がれるものとそうでないものとがある。また深鉢A・B・C・E・F・G・N類は第Ⅰ群にのみみられる器形である。

前者は深鉢D、H、K、0 類があげられる。DⅡ類はDⅠ類に較べて口縁部の形態変化が多くなり、突起や口縁端部の装飾が増し、口縁端部の装飾からすればDⅢ類はDⅡ類と共通する。HⅡ類は比較の対象となるHⅠ、HⅢ類が、HⅠ類は施文文様が他地域の系統に属するものであり、小片のみで器全体が判明していないこと、HⅡ類は特異な文様が施されて1点だけであることから検討しにくいが、F、G類などからの変化も考えられる。KⅠa類は筒状の突起がつき、KⅠb・KⅡ類の耳状、山形小突起と異るが、山形小突起は第Ⅰ群土器にも多用されており、時期的な差とはいえない。逆にKⅠb・KⅡ類が第Ⅱ群土器の中でも古い要素をもった器形と言えるかも知れない。0類は単純な器形であり、形態的違いはほとんど認められない。

第Ⅰ群土器にみられない器形としては深鉢Ⅰ・J・L・M類、鉢B・C・D類、壺A・BⅠ・BⅡa類、注口土器がある。このうち鉢B類と注口土器B類は突起の形状を除けば大木10式にすでに認められている器形であり、また口頸部の特徴が共通する深鉢K(Ⅰa)類は第Ⅰ群土器に含まれていることから、同種の器形が本遺跡第Ⅰ群土器に欠落していると考えることが妥当であろう。さらに鉢B類、注口土器B類で文様をもつものの多くは後述するように第Ⅱ群土器の第Ⅰグループに属しているのである。

深鉢Ⅰ・J類はHⅡ類との類似点があり、口縁部点数がごく少いところから特にⅠ類などはHⅡ類の変形とみることができる。深鉢L類は口縁部の屈曲が少い点を除けばK類に類似しており、M類は胴部形態がK・L類と共通する。したがって第Ⅰ群土器の時期に存在する可能性が強いK類から口縁部の屈曲が少なくなってM類へと量的に変化していくことが考えられる。

鉢C類は深鉢HⅡ類との共通点が多い。第Ⅱ群土器に特徴的な器形である。壺ではBⅡa類が第Ⅰ群土器の壺BⅡb類から変化したものとみられ、他のA・BⅠ類、また注口土器A類は系統を追う資料に欠ける。

文様

第Ⅱ群土器には、口縁部文様と胴部文様が分かれているものや、口縁部から胴部にかけて1つの文様がみられるものがあるが、ここでは主な文様である胴部あるいは口縁部から胴部にかけての文様について検討を行うことにする。

第Ⅱ群土器の文様は施文技法・文様構成、文様単位によって次表のように分かれている。

① 1・2条沈線による縦長単位文様

深鉢0ⅢB2・3類が最も多い(第470図)。ⅰ：平行沈線の上部が肥大して円・楕円・半円・「U」字状を成すものは、第Ⅰ群土器の深鉢0ⅢB1類の連結文様から要易に変化し得る文様であり、ⅱ：蕨手類似文（17～22）は蕨手文（23～27）と同様の文様を描きながらも部分的な屈曲が多

文様の種類

1・2条沈線	縦長単位文様	(深鉢0IIIb2・3類)	ⅰ：楕円・円・半円・「U」字文　ⅱ：蕨手類似文、鉤状文　ⅲ：蕨手文　ⅳ：単純下垂、ジグザグ文、連続「S」字文、平行線文
		(深鉢K1b、MII類)	ⅰ：下端連絡楕円文　ⅱ：蕨手類似文　ⅲ：「T字」連絡蕨手文　ⅳ：蕨手文　ⅴ：単純下垂、ジグザグ文、平行線文
		(深鉢HⅡa類)	ⅰ：楕円・対称弧状文、連絡渦文　ⅱ：蕨手類似文　ⅲ：蕨手文
	横位展開文様	(深鉢HⅡb、Ｊa類)	ⅰ：楕円・渦入菱形文、楕円文　ⅱ：楕円・三角文　ⅲ：入組渦文　ⅳ：渦付三角文　ⅴ：流水状文
		(深鉢MⅠb類)	ⅰ：楕円・三角文　ⅱ：渦付三角文　ⅲ：連続山形文
		(鉢BⅠ類)	渦付山形文
		(鉢CⅠa類)	ⅰ：入組渦文　ⅱ：渦付三角文　ⅲ：多条沈線風入組渦文
		(壺A類)	ⅰ：入組渦文　ⅱ：渦付三角文
		(注口土器AⅠ類)	渦付三角文、渦文、連続弧状文など
		(注口土器BⅠ類)	単純入組渦文
	幅広単位文様	(深鉢0IIIc類)	重層懸垂文、ジグザグ文入四角文、三角文、「八」字状文など
		(深鉢MⅠa類)	渦付懸垂文、「Y」字・連続楕円文など
		(鉢CⅠb類)	渦文、渦付三角文、三角文、楕円三角文「コ」字状文など
		(壺B類)	渦付三角文、渦文など
	下垂線区画文様	(深鉢DⅡa類)	渦文・矢羽根状文
多状沈線	縦長単位文様	(深鉢HⅡc1、Ⅰ類)	円・半円・弧状文
		(深鉢MⅠc1類)	円・半円・弧状文
		(深鉢0IIId1類)	円・弧状文・連続楕円文・対称弧状文・交互弧状文など
	下垂線区画文様	(深鉢DⅡb類)	斜行線文、連続弧状・斜行線文
		(深鉢MⅠc2類)	斜行線文
		(深鉢0IIId2類)	斜行線文
	横位展開文様	(深鉢HⅡc2類)	入組渦文、連絡渦文
		(深鉢0IIId3類)	楕円・三角文
		(深鉢Ｊb類)	連絡渦文

い。またこれらが同一の単位でも肥大部の形状や肥大部と平行線の境には個々に異った特徴が認められるのに対し、iii、蕨手文はその大半が全く同じ単位がみられる。この点からすれば、蕨手文は縦長単位並列文様として一つの完成された段階の文様であり、ｉ、ⅱの文様を経て生まれたと考えることができる。ｉ・ⅱの文様を個々にみれば、第Ⅰ群土器の円連結クサビ文（図6）などの上部が円を基調としたものからｉのうち円・楕円・半円平行線文（12〜14）へさらに、Ｓ字を含んだ文様（17）という系列や、「Ｊ」字状連結文（3〜4）－ｉの「U」字状・平行線文－ⅱの蕨手類例文の一部（20）、などという数通りの系列を想定することもできるのである。しかしいずれもが最終的にⅲの蕨手文に達しており、第Ⅰ群土器からの流れの中で生まれたいくつかの文様単位が、蕨手文という１つの文様単位に集約していく過程を示していると思われる。また、16のように突起下に「U」字状文があって、その中間に蕨手文が配される土器があり、「蕨手文」は出現してもそれが未だ主体的な文様とはなっていない段階に位置付けられよう。

同じ文様構成である深鉢ＫＩｂ・MⅡ類やＨⅡａ類(第471図)についてみると、ＫＩｂ・MⅡ類のｉ：下端連絡楕円文（6・9）やＨⅡａ類、鉢D類のｉ：楕円・対称弧状文、連絡渦文（1・2・4）は第Ⅰ群土器の連結文様から変化したとみることもでき、またそれとともに対称弧状文が充塡される方形区画文（深鉢C類）から隆線による区画線を除いた文様であり、単位の下を横につなぐ特徴はＫＩｂ類の「T」字・蕨手文(7)にも残る。また蕨手文との関係は0Ⅲｂ2類と同様にしても、楕円・対称弧状文から蕨手文への変化を追うことはできない。したがって蕨手文の成立は主に深鉢0Ⅲａ・ｂ1類から0Ⅲｂ2類への系統の中に見い出されるが、方形区画文に充塡される文様(蕨手状文)からも要易に生まれ得るのであり、第Ⅰ群土器の器形や文様構成の違いを超えた共通要素から生じ、例えば9のように主体的な文様となっていないものや、4・17 のように横位・斜位に連絡するという古い要素を残す文様が、器形の差を伴って中介していると思われる。

単純に下垂する文様（18〜27）は変化を抱えにくいが、単位としてみた場合にはジグザグ文や破線をはさんだ平行線文などは蕨手文とではなく、上部が円・楕円・「U」字状を成す単位と組み合うことが多い。

②　1・2条沈線による横位展開文様

深鉢ＨⅡｂ類と鉢ＣＩａ類が多い。第472図と第475〜477図に示した文様の展開模式図をもとに説明する。

深鉢ＨⅡｂ類の中で楕円・渦入菱形文は文様上下の区画線と斜行線によって楕円や渦を中心とした三角形を連続させた文様で、楕円文は小楕円と「几」状の単位を交互にくり返しており、その構成は第Ⅰ群土器の深鉢0Ⅲａ類やC類に類似点をもつ。特に渦入菱形文(472図11、第475

図2）は0IIIａ類の横位連結文様に、また楕円入菱形文(第472図7、第475図3)と楕円文（第472図6、第475図1）はC類の文形区画文から隆線による区画線を除いた文様に近い。

そして深鉢HⅡｂ類の楕円三角文、入組渦文、渦付三角文、鉢CⅠａ類の入組渦文、渦付三角文、多条沈線風入組渦文が横位展開文様の主体を占める。入組渦文（第472図10・13・14・16、第475図6〜9、第476図1）は大きな渦状に反転する沈線がさらに斜行して次の単位へと連続する主要単位（図中黒塗り部分）と、その空間を埋める三角文や単純な反転沈線から成る文様である。また楕円・三角文（第472図8・9、第475図4・5）は入組渦文と同様の効果を生じてはいるが、独立した楕円文を中心にし、その間に三角文を埋め、入組渦文のように沈線が横に連続しておらず、楕円入菱形文と入組渦文の中間的な文様構成と言うことができる。これに対し渦付三角文（第472図20〜27、第476図2〜7、第477図1・2）は、主要単位が渦状の張り出しを伴って横にのび、さらに縦・横に連続してくり返されることにより頂部の閉じない三角形状を成す文様である。文様下部の空間は反転沈線や三角文によって埋められている。ただし第477図2は渦2個を取り込んだ形で沈線が閉じており、変形と思われる。これら入組渦文と渦付三角文は渦文を中心にしてそれを横走・斜行する沈線で連続させるという点で共通点がみられ、1 つの単位から次の単位へ移行する方法が入組渦文では斜行沈線で単に横につなげるのに対して渦付三角文の場合には正・逆位の三角形が交互にくり返されるように縦・横につなぐ点が異っている。そのため渦付三角文で渦が三角の上部にのみ施される場合は文様下部に空間が生じ、そこに小単位を充塡し、渦が上・下交互につくものは空間が生じない。入組渦文では常に斜行線部分に空間があり、そこに小単位が充塡される。なお、渦付三角文でも第 476図6のように三角が交互に配されず、横一列のものもある。

深鉢HⅡｂ類の流水状文(第472図15)や鉢CⅠａ類の多条沈線風入組渦文(第472図17〜19、第477図4〜6)はいずれも入組渦文と同様の構成である。流水状文は入組渦文の主要単位だけが簡略に施されるか、反転沈線が独立して数条単位の沈線で描かれた文様と考えられる。多条沈線風入組渦文のうち第477図4は単に主要単位が2条沈線で描かれているだけであり、5は沈線が渦2つで閉じている点は第477図2の渦付三角文に近い。6は4に類したものと思われるが文様下部が不明な個体を復元している。流水状文や多状沈線風入組渦文は第III群土器の壺に施される文様と類似点が認められるものの、器形が異っており、文様自体の差も少くないと思われる。

また鉢BⅠ類の渦付山形文(第472図5)や注口土器BⅠ類の単純入組渦文(第472図12)は第Ⅰ群土器鉢A(Ⅱ)類の横位弧状文(第472図4)に渦が付くことによって要易に生じる文様である。

このように横位展開文様では入組渦文と渦付三角文が中心となり、楕円・渦入菱形文と単純

入組渦文、渦付山形文に古い要素を見い出すことができた。これは、入組渦文と渦付三角文成立までの過程という面からみれば、第Ⅰ群土器から受け継いだ各単位を構成する沈線の連続する方法が未だ規則的でない段階から、主要な単位が共通して連続する沈線で描かれ、しかも空間を埋める補助的な充塡単位が分離する変化と言える。また多条沈線風入組渦文や流水状文を第Ⅲ群土器の文様と類似点をもつことから新しい要素をもつとすれば、入組渦文や渦付三角文の主要単位が多条沈線化、独立していくとみることもできるが、第Ⅲ群土器がごく少量のためその内容が明らかではなく、十分な検討が行えない。

③　1・2条沈線による幅広単位文様（第473図）。

深鉢・注口土器と鉢・壺とで異っていることはすでに述べた。鉢・壺にみられる文様は「の」字文、渦付三角文などが多く、沈線の一部が渦状に張り出す特徴は横位転開文様の渦付三角文と同じであり、特に鉢ＣⅠｂ類の一部(第477図3)や壺ＢⅡａ類は渦付三角文の施された空間に三角文が埋められる点も共通している。また渦文や三角文などは横位展開文様の一部が独立して施文されたとみられる。

深鉢には対称弧状文や「八」字状文、ハシゴ状文などが多く、それらはいずれも縦長単位文様が幅広くされたり、斜めに施文されるだけの文様である。また渦付懸垂文や渦付三角文といった渦を中心にした文様も少量みられる。

このように幅広単位文様は壺を除けば個々に単位形が異ってまとまりを示さず横位展開文様や縦長単位文様の異形と思われる。

④　多条沈線で描かれる文様（第474図）。

下垂線区画文様（7〜13）と縦長単位文様（14〜24）、横位展開文様（25〜31）とに分けることができるが、おのおのの数が少いためか系統性を求めることは難しい。多条沈線文様出現の要因としては第Ⅰ群土器の連結文様3条単位の沈線で文様の一部が描かれているものなどがあげられ、文様表現技法自体は第Ⅰ群土器段階ですでに生まれている。縦長単位文様では上部が円や半円、渦になり、その下に弧状線が下る文様や、対称弧状文、横位展開文様の入組渦文や連絡渦文、楕円・三角文などは1・2条沈線による文様にそれぞれ対比することができる。しかし、文様単位には1・2条沈線文様ほど変化を求めることができず、第Ⅰ群土器との差が大きい。下垂線区画文様だけはほぼ多条沈線文様に特徴的とみることができ、方形区画文の文様構成を引き継いでいると思われる。そして多条沈線文様の中に変遷をさがすよりむしろ、2条沈線（6）や2条と3条の沈線の組み合わせ（7・8）で描かれる下垂線区画文様を、同じ文様構成が多条沈線化する過渡的なものと位置付けた方がよいと思われ、一方では1・2条沈線文様に似た文様を多条沈線で描くということが行われたのではないだろうか。

このように、第Ⅱ群土器に施文される文様には同群の中で主要な位置を占めるものと、それ

より第Ⅰ群土器に近い特徴をもつものに分離することができた。それは以下のようにまとめられる。

	1・2条沈線、縦長単位並列文様	1・2条沈線、横位展開文様	
第1グループ （古い要素をもつもの）	楕円・円・半円・「U」字平行線文（深鉢O Ⅲb2-1） （連結）楕円文（深鉢K Ⅰb Ⅰ、M Ⅲ Ⅰ、H Ⅲa Ⅰ） （連結）「T」字・蕨手文・（深鉢K Ⅰb Ⅱ） 対弧状文（深鉢H Ⅱa Ⅰ）	楕円・渦入菱形文（深鉢H Ⅱb Ⅰ・Ⅱ） 単純入組渦文（鉢B Ⅰ、注口B）	（1・2条沈線、下乗区画線閉充填文様） 矢羽根状文・渦文（深鉢D Ⅲa）
第2グループ （主体的 規則性の強いもの）	鈎状文 蕨手類似文（深鉢O Ⅲb2 Ⅱ、M Ⅲ Ⅱ、H Ⅲa Ⅱ） 蕨手文（深鉢O Ⅲb2 Ⅱ、K Ⅰb Ⅲ、M Ⅱ Ⅲ、H Ⅱa Ⅲ）	楕円・三角文（深鉢Ja、M Ⅰb Ⅰ） 入組渦文（深鉢H Ⅱb Ⅲ、鉢C Ⅰa Ⅰ、壺A） 誤付三角文（深鉢H Ⅲb Ⅳ、M Ⅰb Ⅰ、鉢C Ⅰa Ⅱ、注口土器A） 流水状文（深鉢H Ⅲb Ⅴ） 多条沈線風入組渦文（鉢C Ⅰ Ⅲ）	1・2条沈線幅広単位並列文様 （深鉢O Ⅲc、M Ⅰa、鉢C Ⅰb） 多条沈線文様 （深鉢D Ⅲb、H Ⅲc、Ⅰ、Jb、M Ⅰc、O Ⅲd）
（第3グループ） （第1・2グループい ずれか不明なもの）	ジグザグ文、連続「S」字文、破線文、平行線文など （深鉢O Ⅲb3、K Ⅰb Ⅳ、M Ⅱ Ⅳ）	連続山形文（深鉢M Ⅰb Ⅲ）	

くり返し述べているように、第1・2グループの中で主体を占めるのは第2グループの文様である。単に数量が多いだけでなく、文様構成や文様単位に規則性が認められ、さらに蕨手類似文、楕円・三角文には規則性が成立しきれていない要素を、流水状文・多条沈線風入組渦文には規則性から逸脱しかけた要素を認めることができる。

これに対し、第1グループは第Ⅰ群土器の連結文様と方形区画文様からの類似性を強く残しており、特に1・2条沈線による楕円・円・半円・「U」字・平行線文は縦位連結文様との差がごく微妙である。

以上、第Ⅱ群土器の器形と文様の系統性をみてきたが、それは前後する土器群との比較によって行ったのであり、各群の土器を集計した表でも明らかなように、遺物包含層第2・3層での違いは認められないから層位的な新旧の裏付けをもたず、同様に同じグループに含まれている文様の類もそれらだけで共伴すると言えるものではない。このような二屋敷遺跡における層位的事実と土器論的な方向性が、県内各地の資料といかなる関係にあるのかを、次項において各群の編年的位置付けや地域性を検討するなかでみていきたい。